浦添市文化財調査報告書第22集

内間西原古墓群（イリバル）

―― 都市計画道路工事に伴う緊急発掘調査 ――

１９９４年３月

沖縄県浦添市教育委員会

例　　言

1．本書は浦添市字内間に所在する内間西原古墓群の発掘調査成果を記録したものである。

2．調査は都市計画道路の建設工事に伴うもので、浦添市都市計画部都市計画課からの依頼を受けて浦添市教育委員会が平成４年度と５年度の二次にわけて実施した。

3．古墓の実測については業者に委託して写真測量で行った。ただし、平成５年度（第二次）に調査を実施した墓のうち第７号～９号・11号墓の４基の墓室については浦添市教育委員会文化課職員が実測を行った。

4．墓の各部名称については基本的に「浦添市史」第４巻資料編３所収の「亀甲墓の各部名称」（執筆：名嘉真宜勝）を参考にした（次頁参照）。

5．厨子甕の名称は上江洲 均氏の論文「沖縄の厨子甕」に依った。本文中の蔵骨器観察表のなかで使用した計測記号は次頁のとおりである。また、蔵骨器の文様のうち「屋門（ヤージョウ）」については那覇市壺屋での呼称を使用した。

6．本書に掲載した地形図は浦添市建設部・都市計画部所収の1／25,000及び1／2,500を複製した。

7．本書の原稿執筆は下記のとおりである。

下地安広　第Ⅰ章

松川　章　第Ⅲ章第１節・第Ⅳ章第１節(1)～(3)･(5)

宮里信勇　第Ⅱ章・第Ⅲ章第２節・第Ⅳ章第１節(4)･(6)･第２節(6)･(7)・第Ⅴ章

玉城京子　第Ⅳ章第２節(1)～(5)

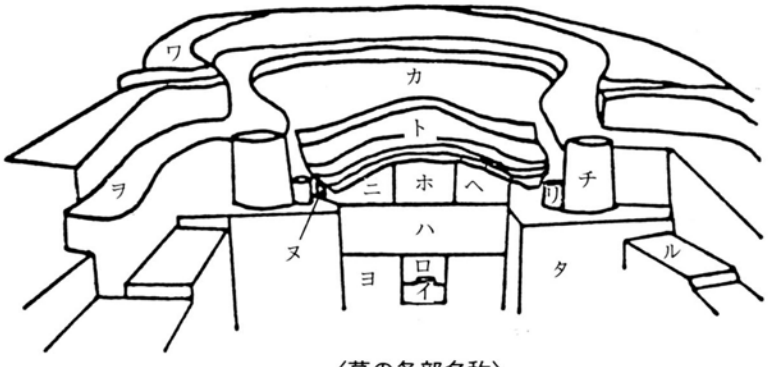
大城逸朗　第Ⅳ章第１節(7)

8．発掘調査および資料整理にあたっては下記の方々からご教示をいただいた。記して感謝申し上げます。

墓について	名嘉真　宜　勝（読谷村歴史民俗資料館）
地形・地質について	大　城　逸　朗（沖縄県立教育センター）
銘書の解読	長　間　安　彦（浦添市立図書館沖縄学研究室）
〃	徳　元　　剛（　　〃　　）
聞き取り　７号墓	當　間　静　子（浦添市宮城在住）
８号墓	島　袋　カマダ（浦添市内間在住）
蔵骨器の文様名称	小橋川　秀　義（壺屋陶器事業協同組合）
〃	高江洲　康　義（沖縄陶器株式会社）
資料整理	當　銘　由　嗣（沖縄考古学会員）

9．発掘調査で得られた資料は浦添市教育委員会文化課で保管している。

凡　　例



〈墓の各部名称〉

㋑ ウコールイシ（シーチ）（香炉石） ㋺ ヒラチ ㋩ ジョウカブイ ㋥・㋭・㋬ カガミイシ（鏡石）
㋣ マユ（眉）㋜ ウーシ（トゥール）（臼） ㋮ クヮウーシ（クヮトゥールグヮ）（子臼） ㋯ ヌンチャ
㋰ チンバ（ナージミー）（庭積み）㋱ ワラビヌティ（童の手）㋲ シミイシ（ハシラ）（隅石）
㋳ ソデイシ（袖石） ㋷ ヤジョマーイ（ウスディマーイ）（袖回り）㋕ チジ（ボージ）（頂上）

〈墓実測図中の表現記号〉

一次調査（1～6号墓）二次調査（7～11号墓）

漆　喰
モルタル
セメント
土
岩　盤

岩　盤
セメント
漆　喰
土、その他
岩盤断面
石積断面

〈蔵骨器観察表中の分類記号〉

Ⅰ　類　甕型厨子甕
- A　ボージャー厨子
- B　マンガン掛け
- C　マンガン掛け屁つき

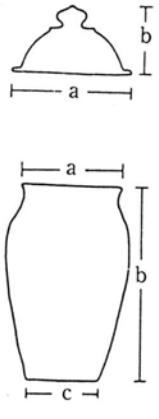
Ⅱ　類　家型厨子甕
- A　石　製
- B　陶　製

Ⅲ　類　火葬用骨壺

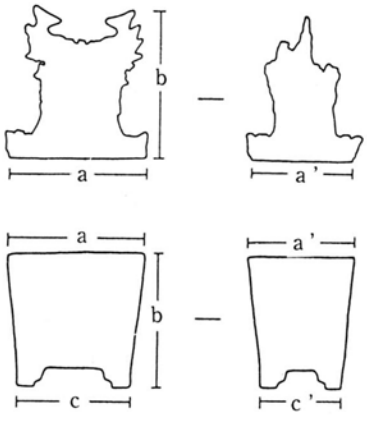
Ⅳ　類　日用品の転用

〈蔵骨器観察表中のサイズ記号〉

甕　型



家　型



報告書抄録

ふりがな	うちま　いりばる こ ぼ ぐん
書名	内間西原古墓群
副書名	都市計画街路建設工事に伴う緊急発掘調査
巻次	
シリーズ名	浦添市文化財調査報告書
シリーズ番号	第22集
編著者名	下地安広・松川　章・宮里信勇・玉城京子・大城逸朗
編集機関	沖縄県浦添市教育委員会文化課
所在地	〒901-21 沖縄県浦添市宮城2丁目4番1号　TEL：098-877-4556
発行年月日	西暦1994年3月30日（平成6年3月30日）

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
内間西原古墓群 うちまいりばるこぼぐん	沖縄県 浦添市字内間 おきなわけん　うらそえしあざうちま	47208		26° 14′ 20″	127° 42′ 00″	第1次調査 1992.10.1 ～ 1992.12.11 第2次調査 1993.6.21 ～ 1993.11.30	第1次調査 500 第2次調査 280	都市計画 道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
内間西原古墓群	古墓	近世 ～ 近代	堀込墓　11墓 平葺墓　3墓 亀甲墓　1墓	蔵骨器 花瓶 香炉 碗 鉢 茶碗 その他	墓は去る沖縄戦中、避難壕として使用されており、戦争遺跡としても貴重である。

もくじ

例　言

凡　例

報告書抄録

第Ⅰ章　調査に至る経緯と調査体制 …… 1

第１節　調査に至る経緯 …… 1

第２節　調査体制 …… 2

第Ⅱ章　位置と環境 …… 3

第Ⅲ章　調査の経過 …… 7

第１節　第一次調査 …… 7

第２節　第二次調査 …… 8

第Ⅳ章　調査の成果 …… 9

第１節　第一次調査 …… 9

(1) １号墓 …… 9

(2) ２－１号墓 …… 13

－２号墓 …… 14

－３号墓 …… 15

－４号墓 …… 15

(3) ３号墓 …… 20

(4) ４号墓 …… 25

(5) ５号墓 …… 30

(6) ６号墓 …… 33

(7) ６号墓庭における縦状小穴の調査メモ …… 38

第２節　第二次調査 …… 39

(1) ７号墓 …… 39

(2) ８号墓 …… 46

(3) ９号墓 …… 49

(4) 10号墓 …… 51

(5) 11号墓 …… 51

(6) 墓道表採資料 …… 52

(7) 墓道石積み …… 55

第Ⅴ章　まとめ …… 58

写真図版 …… 61

第Ⅰ章　調査に至る経緯と調査体制

第1節　調査に至る経緯

平成4年5月29日に浦添市都市計画部都市計画課より教育委員会教育部文化課あて、浦添市字内間西原一帯で公園施設整備工事及び街路工事を予定しているが、工事予定区域に係る文化財の有無及び取り扱いについて照会する旨の文書を受け、同区域の文化財行政と都市計画行政の具体的調整がスタートした。

前述の文書に回答するため現地踏査を実施したところ公園施設工事区域内に古墓2基、街路工事区域に古墓7基（踏査時点で確認した古墓の数）が工事区域に係ることが明かになったため、古墓等の文化財が所在する旨の回答文書を平成4年8月13日付、浦教文第69号で都市計画課長あて発送した。

なお、沖縄の古墓は貴重な文化財との見方が県内の歴史・民俗・考古等の研究者をはじめ、文化財行政側にも広がってきていることから本市教育委員会も貴重な古墓については可能な限り保存するとの方針で本件の工事に係る古墓数基の現状保存について調整を都市計画課と試みた。その調整の結果は、次のとおりである。

(1)　公園施設工事区域内の古墓については、可能な限り現状保存する方向で考える。

(2)　街路工事区域に係る古墓については、道路線形や他の街路事業との関連もあることから記録保存をする。

よって、浦添市字内間西原の工事に係る文化財の取扱については、(1)街路工事に係る7基の古墓を記録保存する。(2)公園区域内の比較的規模の大きい2基の古墓については現状保存の方向で今後検討する、とした。なお、後者については詳細な調整等が今後必要であることから本件とは切り離して、検討して行くこととなった。

以後は、記録保存する対象となった古墓7基（踏査時点で確認した古墓の数）の緊急発掘調査を平成4年度に実施できるかの調整となった。しかし、文化課では次の問題があるとした。(1)年度計画に組み込まれてない突発的な発掘調査であること。(2)調査には半年以上、期間を要すること。(3)本年度に同調査を実施すると当初から計画されている文化財の事業に影響が大きいこと。(4)同地域の本年度の街路工事の実施は困難になる可能性があること。そこで、文化財行政と都市計画行政の双方の事業目的が達成でき、かつ、業務上の問題が少ない方法として考えたのが街路工事と文化財の緊急発掘調査を平成4年度と平成5年度の2ケ年度に分けることであった。文化財の調査手法のみを考えた場合、好ましい調査とは言えないが、行政の双方の目的が達成できることから採用した。

なお、同区域の発掘及び発掘調査にあたっては文化財保護法の諸手続きを年度ごとに行い、都市計画部局から教育部文化課が執行依頼を受けて実施した。

第2節　調査体制

事業主体	浦添市教育委員会	教育長	保久村　昌　伸
事業所管	〃	教育部　部　長	東　　一　男（平成4年度）
	〃	〃　　〃	西　原　廣　美（平成5年度）
	〃	文化振興担当参事	西　原　廣　美（平成4年度）
	〃	〃	宮　里　良　一（平成5年度）
事業総括	〃	文化課長	宮　城　　勝（平成4～5年度）
	〃	文化課主幹	安　里　　進（平成5年度）
	〃	文化財係長	仲宗根　盛　栄（平成4年度）
	〃	〃	下　地　安　広（平成5年度）
事業事務	〃	主　　事	小波津　春　美（平成4年度）
	〃	〃	小那覇　典　江（平成5年度）
	〃	〃	松　川　　章
	〃	〃	宮　里　信　勇
調査指導	〃	文化課主幹	安　里　　進（第二次調査）
調査員	〃	主　　事	松　川　　章（第一次調査）
	〃	〃	宮　里　信　勇（第二次調査）
調査補助員	〃	臨時職員	玉　城　京　子

発掘作業員

第1次調査

大城幸純・大城晶子・大城秀子・西　宏・城間政光・比嘉善吉・末吉良一・名嘉高栄・大城文子・知念良盛・宮里盛仁・大城米太郎・末吉富一・末吉康盛・仲村亀造・比嘉憲保・当間千代

第2次調査（浦添市シルバー人材センター）

具志堅宏幸・津波宏・屋良朝典・浜川安秀・銘苅盛一・上地善市・宮城博・砂川菊一・入川光雄・砂川金五郎・饒平名弘・新城ヨシ・宮城サキコ・上原トシ・親泊シズ・盛島トミコ・備瀬トミコ・上地ミサオ・比嘉新次・平良好功・古波蔵善光・仲宗根秀雄・島袋宏・宮城徳良・金城清・金城清光・比嘉通吉・宮内初雄・東江栄一・松本秋吉・又吉清栄・仲間健一・金城芳和・又吉元徳・親富祖幸雄・佐久川よし子・幸地庸信

整理作業員　島袋里美・玉城悦子

第Ⅱ章　位置と環境

内間西原古墓群の所在する字内間は、浦添市の南西部に位置し、北は字仲西、字宮城、東は字沢岻、西は字勢理客と接し、南は西流する安謝川を境にして那覇市安謝と隣接している。かつては那覇市安謝を前安謝（メーアジャ）、内間を後安謝（クシアジャ）と称していたといわれ、『琉球国由来記』には、内間村にある拝所として安謝森・安謝之大ヒヤノ殿が記載されている（註１）。字内間は四つの小字からなり、集落の中心である大嶺原を囲むかたちで、後原、東原、西原がある。内間西原古墓群のある小字西原（イリバル）は字内間の西端に位置し、現在は大半が住宅地となっているが、戦前は安謝川沿いに畑地と原野が広がり、サチバルマーチューと呼ばれる小丘はカヤ地帯で、松林となっていた（註２）。

内間西原古墓群はこの小丘を中心に分布している。小丘は独立丘で、平面形が北を頂点とした三角形状をなし、標高は最高部で15m程である。古墓は主として標高５～10mの斜面地に形成されている。今回調査を実施した墓（15基）は小丘の北側および西側斜面に分布していたものである。

内間西原古墓群の東端部に位置する按司墓（伝承）の近くには、カンジャーガマ（鍛冶洞）、さらに東方の南傾斜部分には、内間遺跡（グスク時代）が所在している。内間遺跡内には内間の殿、根屋、火の神、井泉などが拝所として存在することから、グスク時代の内間はこの一帯が中心地であったと考えられている（註１）。

さて、古墓群の所在する小丘（サチバルマーチュー）について、去る大戦前および戦時中の状況が『内間字誌』に次のように記されている。

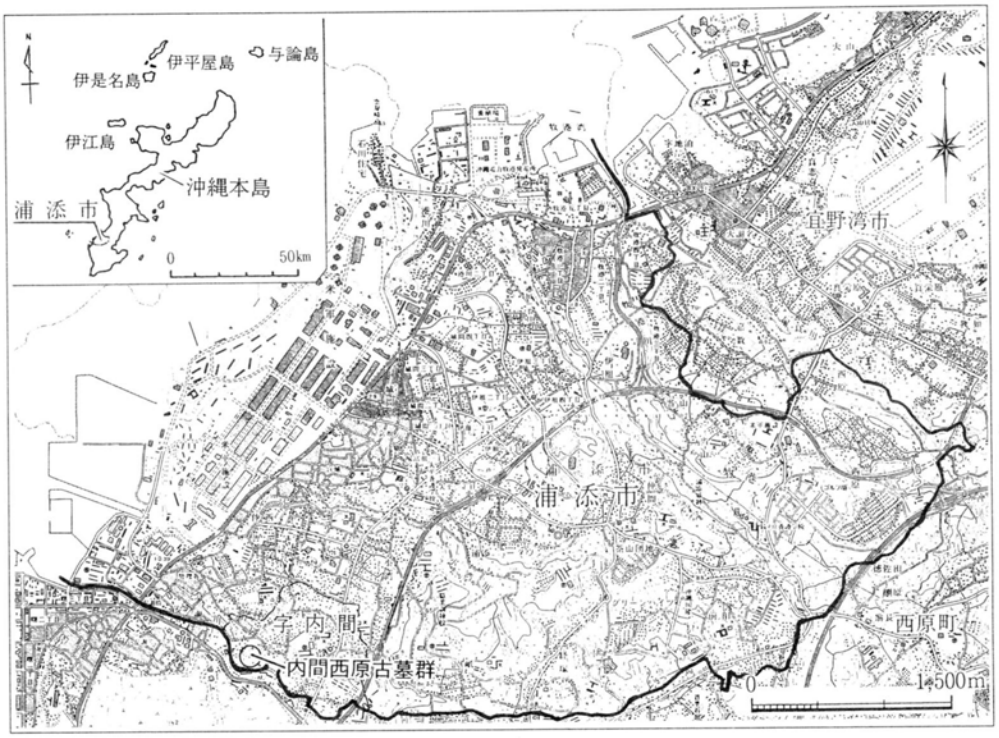
「･･･戦前は農家の芋炊きの燃料として利用された松葉の殆どが此所で収集されたといわれているし、砂糖製造の時の燃料の多くも此所で苅り集められた。･･･〈戦時中〉部落残留組（疎開組以外）の避難状況は10･10空襲後、タコツボを掘ったりその他適当な場所を探して壕を掘ったりしていたが、最後は殆どの人が各人の墓を開けて壕代わりに利用した。昭和20年４月１日米軍沖縄本島上陸の報せを受けて、残留組は住居を家から各人の西原(イリバル)の墓地に移して食料を主にその他の道具類も入るだけ運び込んだ･･･。４月20日頃になると村北部の残留組が避難して来て、サチバルマーチューは避難民で一杯になり、持主不在の墓まで開けて壕代わりに利用され･･･」。

今回の発掘調査では後述のように、こうした戦時中の様子をかい間見ることのできる遺物、遺構も出土しており、内間西原古墓群は単に古墓としてだけでなく、戦跡としての性格もあわせ持っている。

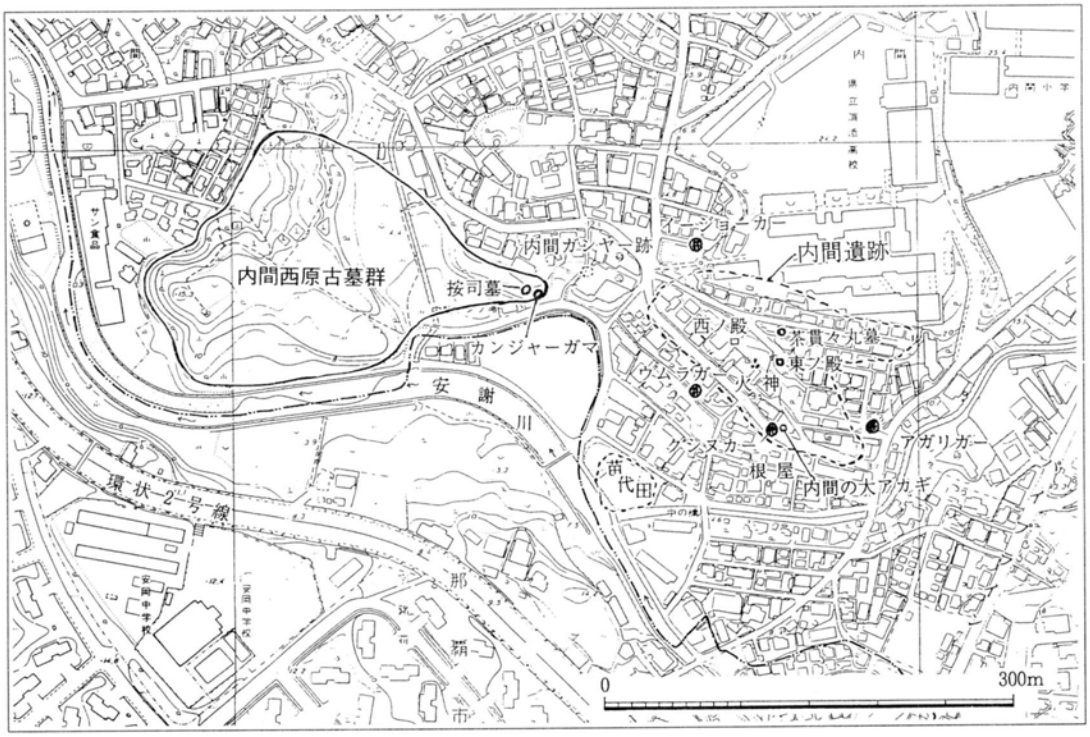
（註）

１.『浦添市史』第６巻資料編５　自然･考古･産業･歌謡（浦添市史編集委員会 1986年3月）

２.『内間字誌』（内間字誌編集委員会編集　内間自治会発行 昭和56年12月３日）



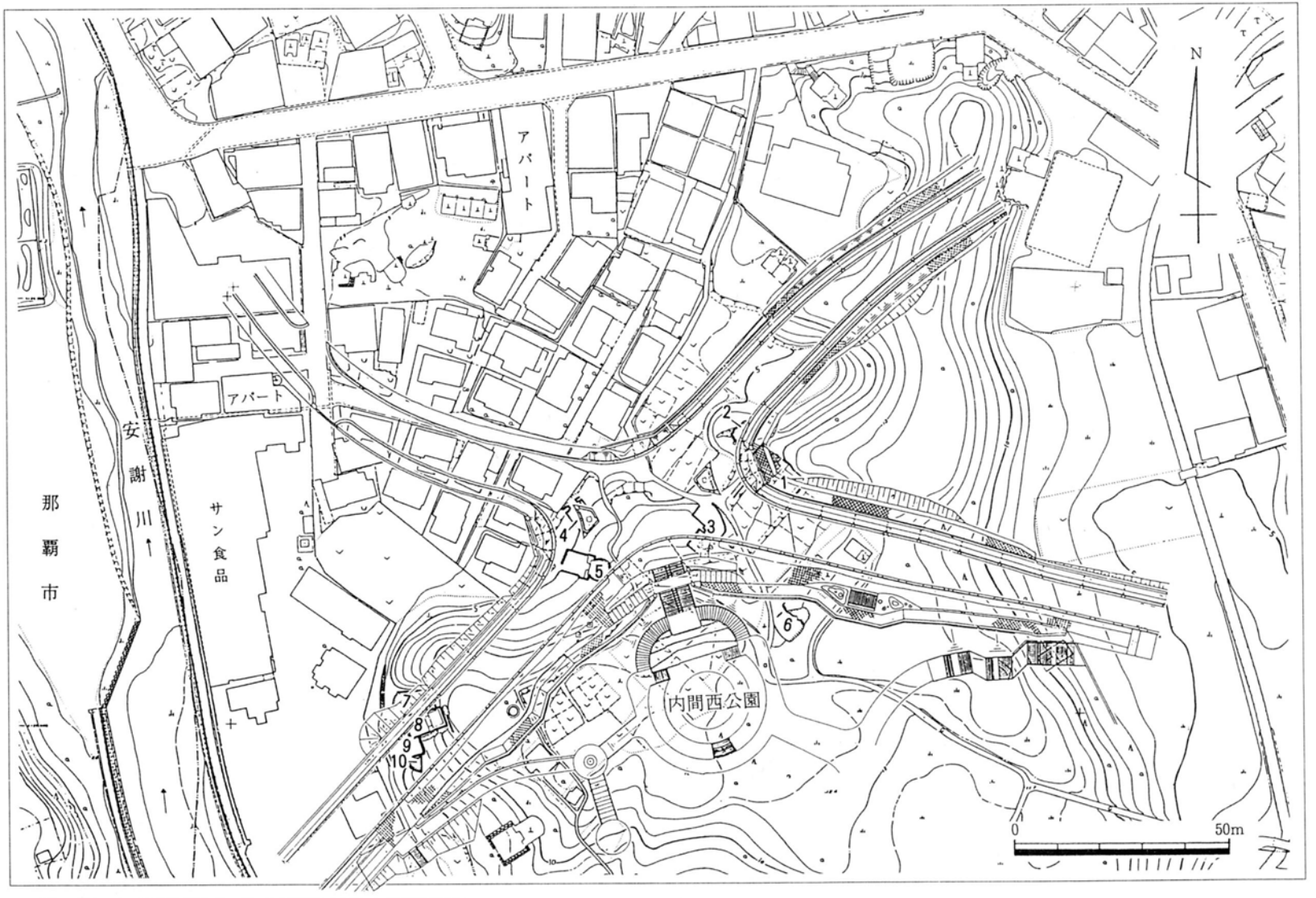
第１図　内間西原古墓群の位置



第２図　内間西原古墓群と周辺の文化財



第３図　調査を実施した古墓の位置(数字は墓番号)



第4図　都市計画道路 路線計画図(数字は墓番号)

第Ⅲ章　調査の経過

発掘調査は、道路工事の工程上から平成４年度と平成５年度の二次に分けて実施した。調査した古墓は第一次調査９基、第二次調査５基の合わせて14基で、それぞれの墓には調査順に一連番号を付した。遺骨などの移転は調査以前に終えており、墓室に蔵骨器が確認されたのは２号墓だけであった。

以下、調査の経過について記述する。

第１節　第一次調査

第一次調査は平成４年10月１日から同年12月11日の期間で実施した。

調査対象となった古墓は調査開始前は４基であったが、調査中に新たに５基が確認され、最終的には９基の調査を行った。

調査は北側に位置する墓から実施し、伐採と発掘による露出作業、そして写真撮影を順次行った。実測図の作成にあたっては、調査期間と調査体制上から写真測量で行うこととした。

各墓は移転からかなりの期間が経過しており、ススキ・アワユキセンダングサ等の雑草が繁茂していた。また、１号墓は高木のアカギが茂り、その枝にエビズルが巻き付いていたため伐採に予想以上の時間を費やした。

１号墓の伐採を進める中で、西側の岩で掘り込み墓が１基見つかった。周囲の伐採を行ったところ、さらに３基の墓が追加確認された。４基とも隣接して掘り込まれていることから一群として扱い、各墓には２－1号墓、２－2号墓と番号を付した。１基は墓口上部が崩落し、他の３基は石積みで塞がれていた。墓室にはそれぞれ蔵骨器が安置され、遺骨が納められていた。そのため、関係者を捜すことになり、都市計画課は地元自治会への聞き取り調査と縁故者不明の新聞広告を行った。遺骨は調査を終えた後の１月中旬まで現地に保管していたが親権者が現われず、無縁仏として市の共同墓地に納骨された。

３号墓を露出し、南側にある亀甲墓の伐採作業を行った。一帯はアカギ・デイゴ・ガジュマルが枝を広げ、そのためススキ等の丈の低い草は生育せず、比較的容易に伐採ができた。亀甲墓の北西側に生活廃品等が投棄される小洞穴が確認された。墓の可能性があるので、一帯の伐採を行なった。その結果、洞穴前面の岩盤が平坦に掘削され、洞穴内には１段の棚があり墓であると判断された。墓庭には右袖に接して方形状の石垣が積み上げられていたが、石積みの手法が墓庭入口と異なり、また内側には石灰岩の砂礫が込められていたことから、墓に伴うものではないことが分かった。戦時中の壕として使用された際の防御壁かと思われる。

５・６号墓の露出作業を終え、最後に写真撮影を行って発掘作業を終了した。その後、写真測量を開始し、街路工事の作業工程の都合から北側の１号墓から実測図の校正を行い、実測図の完成を待って発掘調査を完了した。

第2節　第二次調査

第二次調査は平成5年6月21日から同年11月30日の期間で実施した。

今回、調査したのは5基である。調査開始時では4基であったが、途中で新たに1基確認された。先に確認されていた4基は石灰岩小丘の西側斜面の裾に隣接して所在し、北側から順に7～10号の番号を付した。あとの1基は8号墓庭の発掘でみつかったが、墓口は7号墓庭から開けられていた。これを11号墓とした。番号は前年度の一次調査に後続する一連番号である。

いずれの墓も道路建設計画に伴ってすでに移転が済まされ、空墓となっていた。墓庭は枝振りのよいガジュマルやハゼノキなどによって陽がさえぎられてうす暗く、さらに低草木などが茂っていたためうっそうとしていた。

調査はまず現況の写真撮影を済ませ、墓庭や周辺の低草木や倒木・枯葉などの除去作業から始めた。また、これとほぼ並行して流れ込みや崩壊などによって部分的に堆積した土砂を除去する作業を行った。

4基の墓が完全に露出したのち、墓庭や周辺に散在していた遺物は表採資料としてとりあげた。8号墓前の墓道には墓移転の際に遺棄されたとみられる厨子甕の破片や陶磁器などが集められていた。これらが4基の墓のうちどの墓に所属していたものか判別が困難だったため、一括して採取することにした。

墓室内は天井や壁から石灰岩礫が崩落していたため、これを除去する作業から行った。

それぞれの墓の清掃作業が終了した後、割付を行った。墓室の割付はまず、墓口を二等分するかたちで中軸線（縦軸）を設け、これと直角に汁（シル）ヒラシで横軸線を設定した。

墓庭の発掘はそれぞれの墓庭を分割して行った。墓庭の分割は墓室の中軸線を墓庭へ延長し、これを基準とした。比較的規模の大きい7・8号墓については、墓口から3m地点で横軸線を設けて墓庭を4分割し、9・10号墓は墓庭が狭いため2区に分けて発掘を進めた。

発掘はまず、それぞれの墓が造成された時の完成面を露出させることから始め、次に墓の造成状況をみるため墓庭中央で縦横に断ち割りを実施した。その際に先述の墓完成面を土層断面によって再確認した。こうした断ち割りと同時に、墓道に積まれた野面積みの擁壁を露出させる作業も行った。

両方が完了した時点でひとまず発掘を終え、土層の実測に移った。また、これと並行して業者によって各墓の写真測量が進められた。ただし、7～9・11号墓の墓室については文化課職員で実測した。

写真測量が終了し、図面の現場校正を済ませたあと、7号墓についてはバックホウによって墓本体を半切した。断面から石積みの構造をみるためで、墓全体が崩壊しないように注意を払いながら進めた。石積み断面の写真撮影後、発掘調査を完了した。

第Ⅳ章　調査の成果

第１節 第一次調査

(1) １号墓

１号墓は本地区では比較的規模の大きい墓で、屋根が墓庭に向かって傾き、その端部が墓口正面上部で軒状に張り出す平葺形式の墓である。墓の移転に伴う廃棄からかなりの期間が経過し、ススキ等の雑草、アカギ等の高木とその枝に巻き付くツル性植物のエビズルが繁茂していた。表土の除去に伴って、墓庭から碗等の日用雑器、銃弾・薬瓶等去る大戦の遺物も出土した。墓室には陶製家型厨子甕の破片が散乱していた。

構　造

方形に造られた屋根の縁は「コ」字状に１段高く、その周囲は溝とそれを構成する野面積みの石積みが巡る。屋根は漆喰で覆われているが、漆喰が剥げ落ちた部分では黒色の腐植土が確認され、５・６号墓と同じく石灰岩の砂礫を敷き詰めた屋根であったことが分かる。漆喰は墓造成後の補修に使用されたようである。

墓庭は岩盤を方形に掘削し、左右の袖は屋根から続く外側の石積みと、庭側の二重の石積みで囲まれる。後者は面取りされた切石で「あいかた」積みされ、内と外の石積み間は土が詰められ、幅が約1.2mの面をなし、その中央で段がつくられる。西側は２段構成の石積みで、墓庭入口まで続き、その後西側へ折れる。墓庭入口は排水のための石組みの溝が設けられている。墓南側の小道から本墓に通じる道の東側は２段構成で石積みされている。墓庭の表土には枝サンゴ片が多数見受けられた。

墓室は石灰岩の岩盤に横穴を穿ったもので、墓口側に1.25m×1.35mの木棺を置く汁（シル）ヒラシ、これを囲むように蔵骨器を安置するための棚を切石で「コ」字形に１段、奥に連続して２段設けている。

墓口正面は大きな切石で組まれている。墓室は墓口側のみ板状の面取りされた切石で積み、その周囲は切石で「あいかた」積みで積み上げられている。

遺　物

採集された遺物は陶磁器、ガラス製品、鉄製品で、第１表に示したとおりである。これらの中で、墓に関わるものは陶磁器の花瓶、陶製の家型厨子甕等があり、磁器製の杯やガラス製の小瓶、鋏等は去る戦争時のものと思われる。

遺物の中から、蔵骨器１点、陶製の碗３点、皿・瓶・蓋各１点の計７点について紹介する。

第１表　１号墓出土遺物一覧

施釉陶器				無釉焼き締め			軟質陶器			磁器						鉄製品	合計
碗	瓶		蔵骨器	瓶	不明		皿	蓋	不明	花瓶	湯呑	蓋	杯	染付			
	花瓶	不明	身		胴部	底部			胴部					口縁部	底部		
3	1	2	1	1	12	3	1	1	1	3	1	1	1	1	1	2	36

蔵骨器は写真図版５－１に示す陶製の家型厨子甕の身の資料１点が得られている。身の正面と両側面に蓮華と僧侶の浮文を貼り付けている。全体に白色の化粧土を施し、浮文には飴釉、それ以外には呉須（コバルト）を施釉し、最後に透明釉を施釉する。黄白色の胎土は粗く、籾殻を混和材として用いる。身上面の蓋受け面と正面中央に銘書（ミガチ）が記され、それからすると大正８年に洗骨を行なったようである。

第２表　１号墓 蔵骨器観察表

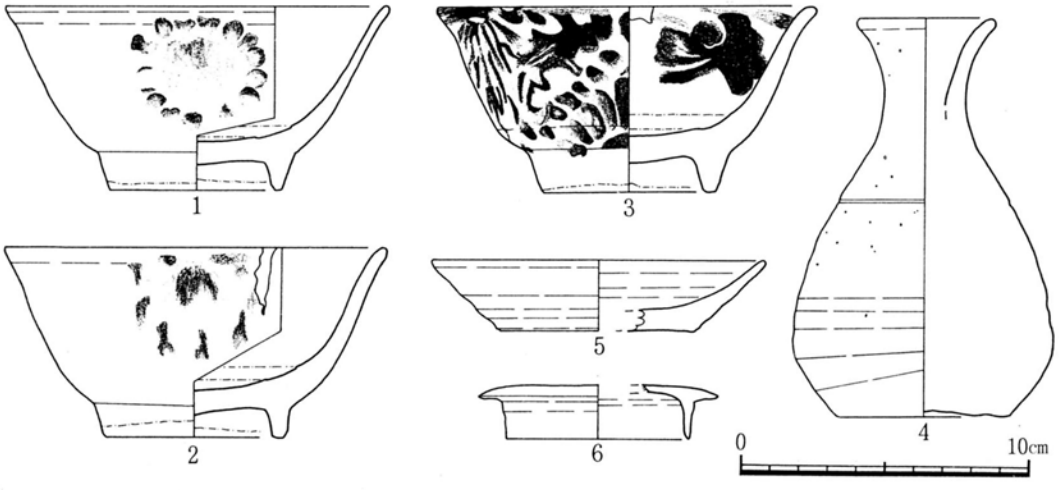
図版番号	採取地点	蔵骨器			サイズ（cm）					文　様	銘　書	銘書西暦
		分類	蓋	身	a	a'	b	c	c'			
５－１	墓室（汁ヒラシ）	ⅡB		○	34.2	25.5	41.9	27.0	19.0	胴中央部に屋門を貼り、その両側に立位の合掌僧侶像と蓮華文。側面は立位の合掌僧侶像と蓮華文。裏面はコバルトで12面に区画し、区画内に飴釉を施す。	〈屋門内部〉 前宮里小一代宮里三郎三男 宮里　勇 〈口縁上面〉 大正六年旧三月二十五日死去 宮□□（□□□□三男） 大正八年十月九日洗骨	 1917年 1919年

第５図１～３は陶器製の碗で、アラマカイと呼ばれている。１・２は器外面に飴釉と呉須で印花文を施すものである。３は呉須で内外面に草花文を施している。３点とも白色の化粧土を施し、文様を描いた後に透明釉が掛けられる。畳付は釉が取られ、見込みは蛇の目に釉剥ぎされる。器形は２・３が高台脇から若干の膨らみを持ち、１は高台脇から体部にスムースに移行する。１は墓に至る道で採集され、２・３は墓庭からの出土である。

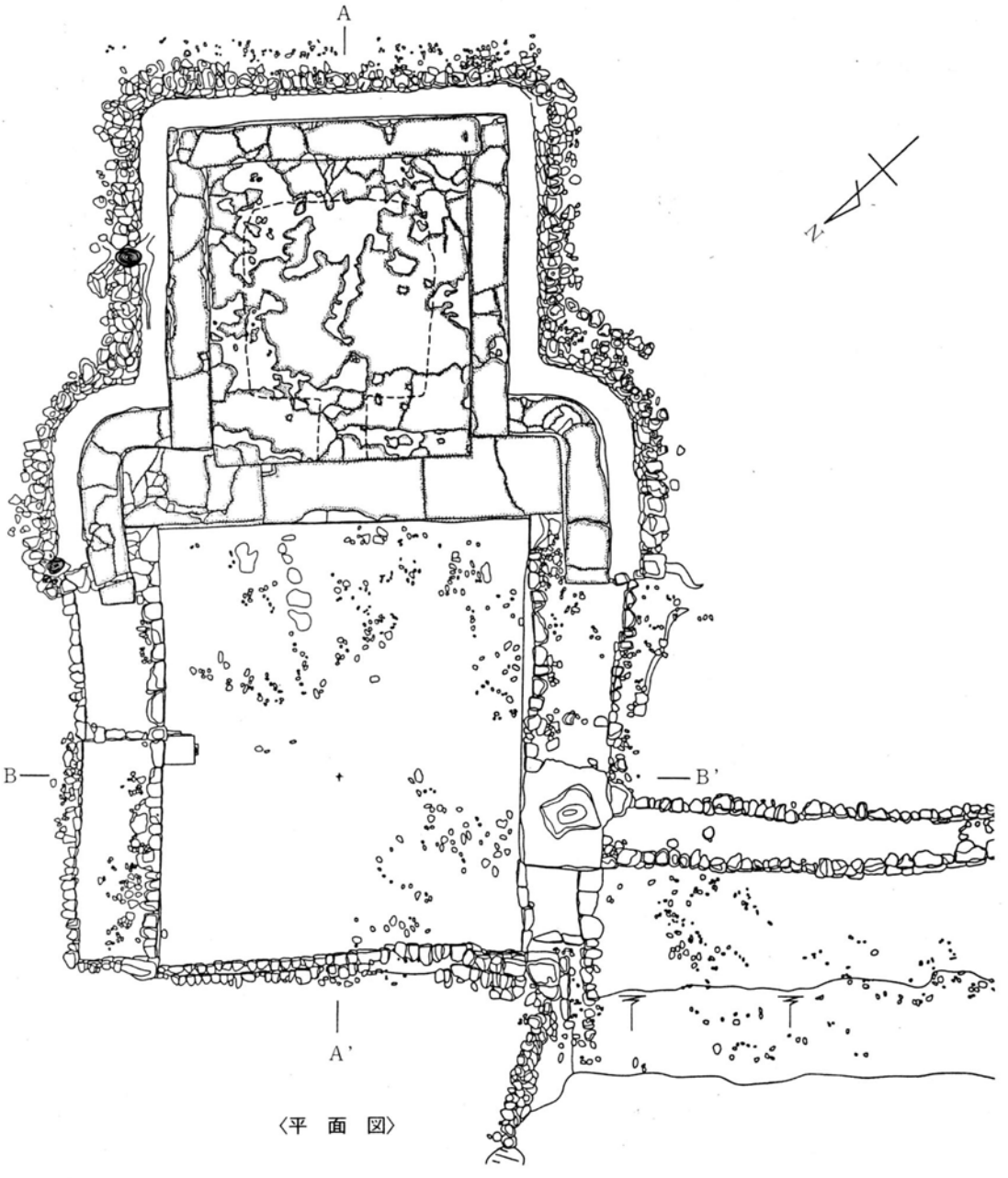
４は無釉の焼き締め陶器で俗にアラヤチと呼ばれるものである。器の最大径は胴下部にあり、頚部ですぼまり、口縁部でアサガオ状に開く瓶形である。器面は回転ヨコナデで仕上げられるが、底部から胴下部はヘラケズリされている。胴上部に１条の沈線文を施す。墓庭からの出土。

５・６はアカムヌーと呼ばれる無釉の低火度焼成の軟質陶器で、皿と急須(?)の蓋である。５は推算口径11.6cmで、底部から外側に直線的に立ち上がる器形である。外底面に糸切り痕が確認できる。

６は胎土に赤色粒を比較的多量に含む。２点とも表採資料である。



第５図　１号墓遺物（写真図版５－2～7）

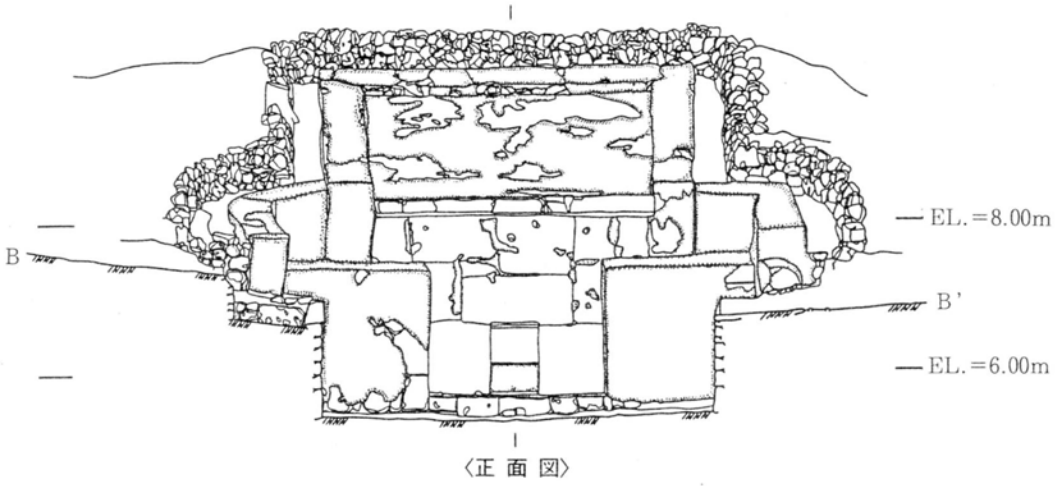


〈平　面　図〉

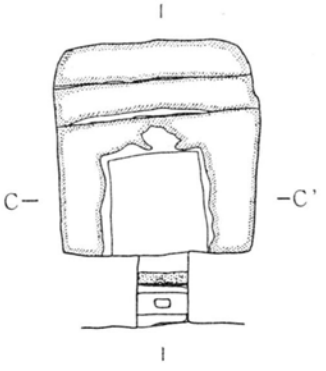


第6図　1号墓　　〈墓道石積〉

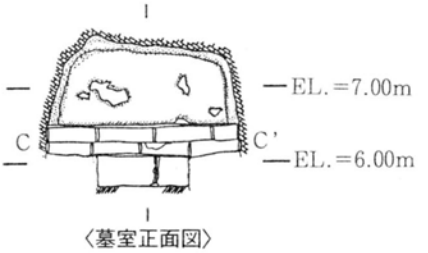
0　　5 m



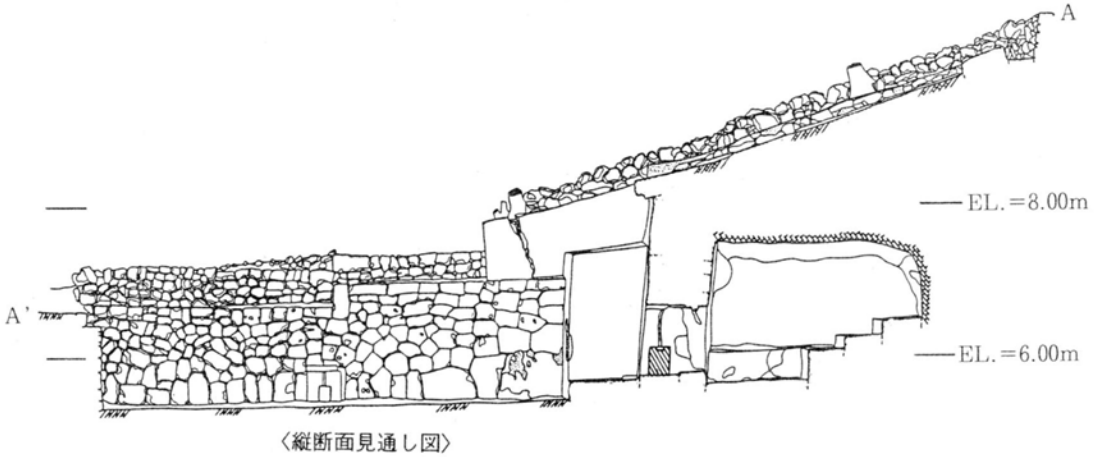
〈正 面 図〉



〈墓室平面図〉



〈墓室正面図〉



〈縦断面見通し図〉

第7図　1号墓

0　5 m

(2) 2号墓

本墓は第Ⅲ章で既述したように、1号墓西側の岩に造られた4基の掘り込み墓からなる一群の墓である。いずれも墓室に蔵骨器が安置されたままで、2－3号墓を除く墓の蔵骨器には遺骨が納められていた。

以下、各墓について記述する。

2－1号墓

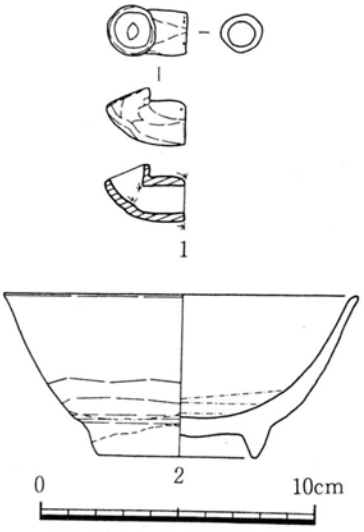
構　造

岩の南面側を掘り込んで造るもので、墓室には2点の蔵骨器が安置されていた。

墓は岩の前面を縦に掘削し、岩盤に横穴を掘り込んで墓室とする。墓庭の右側は岩壁を袖とし、隣接する2－2号墓の墓庭と区画する。墓室の平面形は墓口側の左隅を軸とする扇形で、奥壁の左隅から墓口側右隅にかけては弧を描くように削られる。墓室の天井は中央部で高く、垂直に仕上げられた両側壁へ傾斜する。墓口は粗く整形された石灰岩礫で積み上げられ、下面は3段の階段が設けられている。

遺　物

本墓から採集された遺物は、写真図版7－1・2に示す厨子甕2点と、碗・瓶・酒器（カラカラ）・キセルの雁首である。



第8図 2-1号墓出土遺物
（写真図版7－3・4）

第8図1はキセルの雁首で、火皿と外面に透明釉が施釉される。胎土は緻密で、白色を呈する。

2は鉄釉の施釉される碗で、高台脇から緩やかな弧を描いて立ち上がり、直線的に口縁部直下まで移行した後、僅かに外反する。外面の下半はヘラケズリされ、明瞭な稜線を残す。上半は、回転ヨコナデされる。釉掛けは底部を持って釉に浸す方法でなされ、したがって高台を含む底部と内底面は露胎であるが、後者はその後円形に釉が施されている。

蔵骨器は墓室に安置されていたもので、写真図版7－1は奥壁側、同2は左壁側に位置する。1はマンガン掛け甕型厨子甕で、身と蓋からなる完形品である。蓋は鍔の直径が28.0cmと大きく、頂部の狭い円錐台形である。頂部は2段の段をなし、宝珠形のつまみが付く。頂部の縁から鍔にかけての外面は弧を描く。器面調整は内面が水引き後に回転ヨコナデされ、外面は上部から頂部にかけてはヘラで仕上げられ、鍔側はヨコナデされる。

身は頚部で「く」字状に屈曲する直口の平口口縁で、頚部から胴上部へ緩やかに弧を描いて、若干の膨らみを持ちながら底部に至る。内外面は水引き後ヨコナデされ、外面は内面に比べ丁寧に仕上げ

られている。施釉されるマンガン釉は外底面から胴下部、そして内面を除く外面に施釉される。施釉されたマンガン釉は蓋では淡い茶褐色、身は黒褐色に発色している。

2はマンガン掛け庇付き甕型厨子甕である。蓋は本種の特徴である2層の鍔からなり、鍔の直径に比して高さが低い円錐台形である。上層の鍔は蔵骨器分類ＩＢの蓋に粘土帯を貼り付けて作りだすもので、頂部には宝殊形のつまみがつく。庇の上面には半載竹管工具で屋根瓦が描かれ、4箇所に獅子頭のつく降棟が配される。器面は回転ヨコナデされるが、外面鍔側と内面に水挽き痕を残す。

身は平口の口縁部が僅かに外反し、胴上部は張り、胴下部で締まって底部に至る器形である。1に比べ全体的に丸みのない器形である。内面には水挽き痕を残す。

2－2号墓

構　造

2－1号墓の西側に隣接して掘り込まれている。本墓と2－1号墓の墓庭の間に岩盤が張り出し、墓庭を区画する。この突出は墓をつくる際に当初から2基の墓を想定して削り出されたと考えられ、本墓と2－1号墓の墓口中軸線は2－1号墓では右側に、2－2号墓では左側に偏る。墓庭は地面を掘削してつくられ、本墓の右側は岩盤を袖とする。墓室は床の平面が方形で、奥壁は凹状に削り出され、小型の厨子甕が安置されていた。右側壁と奥壁は垂直で、左側壁は天井中央より弧を描くように調整されている。墓口は石灰岩礫を野面に積み上げている。

遺　物

墓室から蔵骨器3点（写真図版8－1～3）、ヒレジャコ3点が得られている。蔵骨器は分類ＩＡの口縁部の内反する無頚の甕型厨子甕1点、頚部が「く」字状に屈曲し、直線的な口縁部が外傾するマンガン掛け甕型厨子甕2点がある。

写真図版8－1はＩＡに属するもので、墓室右側に安置されていた。口唇部は丸く、口縁部直下から張り出す胴部は少し丸みを持ちながら底部に至る。外器面はナデ仕上げされるが、水挽き痕を残し、特に内面は顕著である。外面は自然釉により光沢のある褐色を呈している。

蓋は鍔の直径に比べ高さの低い頂部の平坦な円錐台形で、頂部は段をなし、宝珠形のつまみが付けられている。

2は墓室奥壁の凹部に安置されていたものである。身と蓋の大きさのバランスが悪いことから、蓋はその後に補充したものと考えられる。蓋は外面が弧を描く円錐台形で、鍔の直径に比べ高さの低いものである。平坦な頂部には偏平の宝珠形のつまみがつく。内外面に水挽き痕を残すものの全体的に回転ヨコナデで仕上げられ、外面上部はヘラ調整されている。マンガン釉は淡い茶褐色に発色する。

身は高さ29.5cmの小型の甕型で、平口で直口する口縁部は外傾し、頚部で「く」字形に屈曲する。胴部は頚部から胴上部まで弧を描き、若干の丸みを持って底部に至る。内外面は水挽き後ナデ仕上げされ、外底面の角はヘラで斜めに削られている。

3は墓室右側に安置されるものである。身は頚部で「く」字形に屈曲する平口の外傾する口縁部で、

頚部から胴上部にかけては緩やかな弧を描いて底部に移行する。胴部最大径と口径はほぼ同じで、高さとの関係からみると均整のとれた器形である。内面には粗い水挽き痕を残し、粘土帯の継目が2箇所に認められる。外面は水挽き後、ナデ仕上げされる。外底の角は斜めにヘラケズリされる。

蓋は体部が僅かに弧を描く円錐台形で、平坦な頂部は段をなし、円盤状のつまみがつく。器面には水挽き痕と回転ヨコナデの調整痕を残すが、外面上部はヘラ仕上げされる。

2－3号墓

構　造

厨子甕を1個納められる広さに掘削した簡易な墓である。現況から斜めに下る岩盤を垂直に掘削し、横穴を穿ち墓室としている。墓室は奥行が浅く、そのため右側は礫を積み上げて墓室を確保している。墓口は厨子甕の安置後に礫を野面積みして塞いでいた。墓口の前には墓庭として区画する石積み等はみられない。

遺　物

墓室からは蔵骨器分類のＩＡに属する厨子甕1点、前庭から土器胴部片が採集されている。

厨子甕は写真図版9－1に示すものである。蓋は円錐台形をなす笠形で、頂部平坦面の仕上げは悪い。内外面は水挽き後、回転ヨコナデで仕上げられる。

身は口縁部と肩部間で屈曲し、口縁部は直口するもので、2－1号墓出土の分類1Ａの厨子甕とは口縁部形態で異なる。口唇部は丸く仕上げられ、胴の最大径は胴上部にあるが、肩部の張りは弱い。本資料内に遺骨は認められず、海産貝のカンギクが多数納められていた。器面は水挽き後、回転ヨコナデされるが、内面には水挽き痕を明瞭に残す。

墓の前庭から土器の破片が11点得られた（写真図版9－2）。いずれも胴部破片で、胎土に石灰質砂粒と赤色粒を混入し、器色は淡い橙褐色を呈する。器面に微細な孔が見られ、焼成は良好である。前述の観察と宜野湾市教育委員会所蔵の資料と比較した結果、本資料は宮古式土器と称されるものであると判断される。

2－4号墓

構　造

岩の北面側を掘り込んだ墓である。岩盤の斜面を垂直に掘削して平坦にし、横穴を穿ち、墓室をつくる。墓室の平面形は隅丸方形で、横断面は半円形を呈する。2－1・2号墓に比べ墓口が墓室の中央に位置しており、平面形は均整のとれた墓室である。墓口下部は礫が階段状に配される。上部は大部分崩落のため墓口の状況は不明である。

遺　物

墓室から蔵骨器が3点得られた。分類ＩＢに属するものと、ＩＣに属するものである。

写真図版10－1はＩＢの資料である。平口の口縁部が外傾し、肩部が張るもので、他の同種資料に

比べ胴部最大径の位置が高いものである。内外面とも回転ヨコナデされ、外底面の角はヘラケズリされている。

蓋は緩やかな弧を描く円錐台形で、頂部は段をなし、円盤状の偏平のつまみが付く。内外面とも水挽き後ナデ仕上げされ、外面上部はヘラ調整されている。内面には銘書が記されている。

2も分類ＩＢに属する厨子甕で、器の最大径が胴部の中央より頚部側に位置し、均整のとれた器形である。平口の口縁部は僅かに外傾する。内外面ともナデ仕上げされるが、内面には水挽き痕を残す。

蓋は鍔の直径に対し高さの低い円錐台形で、平坦な頂部には偏平の宝珠形のつまみが付く。内外面ともナデ仕上げされるが、外面の上部はヘラ調整される。内面には銘書が記されている。

3は分類ＩＢの蓋で変形しており、製作時の形態はみられない。本来は鍔の直径より高さの低い円錐台形になるもので、宝珠形つまみの付く頂部には段が2段ある。内面に銘書が記されている。

4は分類ＩＣに属する身の資料で、採集資料の中では胴径の最も大きいものである。平口の口縁部は頚部から緩やかに外反し、肩部は張り、底部へ若干の丸みを持って移行する。器面には水挽きと回転ヨコナデによる痕跡を残し、内面には粘土帯の継目が認められる。外底面の角は斜めにヘラケズリされる。

第3表　2-1号墓　蔵骨器観察表

図版番号	採取地点	蔵骨器			サイズ（cm）					文　様	銘　書	銘書西暦
		分類	蓋	身	a	a'	b	c	c'			
7－1	墓室	ＩＢ	○		28.0		14.8					
				○	27.8		54.5	22.2		胴中央部には屋門を貼付し、その左右に蓮華文。肩部は波状文と葉状文。胴下部は横位の沈線と波状文。		
－2	墓室	ＩＣ	○		34.0		18.5			2段屁の上段は半裁竹管状工具で瓦屋根を表現し、4ヶ所に獅子頭のつく降棟を配する。3ヶ所の獅子頭直下の下段外面に孔を穿つ。	辛カ　廿カ 大清咸豊元年 □亥七 □ 八日 新屋敷之男まつ	1851年
				○	29.5		62.2	23.0		肩部の屁は瓦屋根を描き、その中位に横位の刺突文を施文する。4ヶ所に先端の肥厚する降棟を配する。胴部には2層構造の屋門を貼り、その両側に凸帯と沈線からなる僧侶像を貼る。胴下部は鋸歯文と横位沈線を施す。		

第4表　2-2号墓 蔵骨器観察表

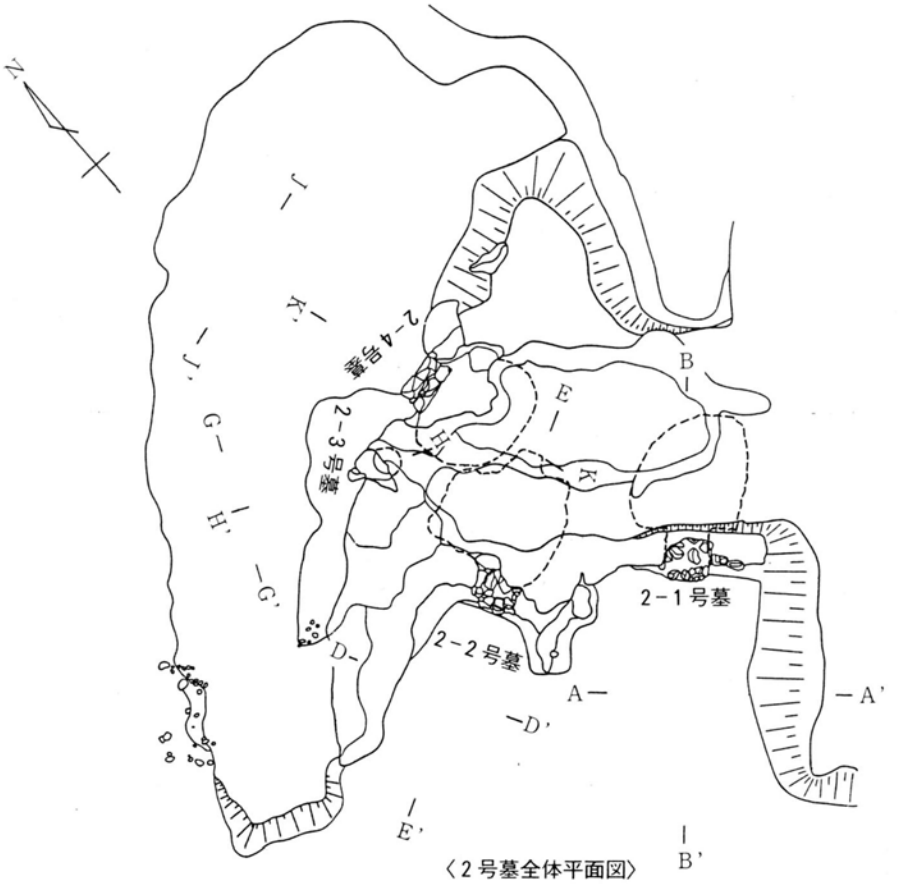
図版番号	採取地点	蔵骨器			サイズ（cm）					文　様	銘　書	銘書西暦
		分類	蓋	身	a	a'	b	c	c'			
8－1	墓室（右側）	ＩA	○		29.0		14.1			外面に櫛描きの縦位沈線を等間隔に5条施す。		
				○	29.5		62.2	23.0		口縁部直下は2条の横位沈線。同上部は長方形に凸帯を貼り、孔を穿つ。その両側は蓮華文を線彫りする。		
－2	墓室（奥側）	ＩB	○		24.0		12.5					
				○	18.0		29.5	14.0		肩部に3枚1組からなる葉文。胴部には屋門を貼り、その両側に蓮華文。胴下部は波状文と横位沈線文。		
－3	墓室（右側）	ＩB	○		26.0		14.9					
				○	21.0		40.3	16.5		肩部は有軸羽状文。胴部は屋門を貼り、その両側に蓮華文を施す。胴下部は櫛描きの波状文と横位沈線を施す。		

第5表　2-3号墓 蔵骨器観察表

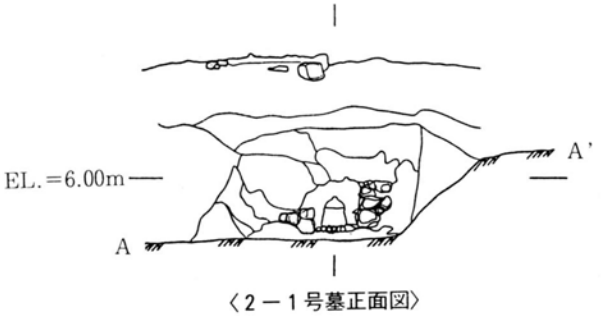
図版番号	採取地点	蔵骨器			サイズ（cm）					文　様	銘　書	銘書西暦
		分類	蓋	身	a	a'	b	c	c'			
9－1	墓室	ＩA	○		25.5		10.1					
				○	25.5		48.0	22.0		頸部に2条の沈線。胴上部は凸帯を家型に貼り、その中に3孔を穿つ。家型凸帯の上下に器面をめぐる沈線を施す。肩部に沈線による　　の印。		

第6表　2-4号墓 蔵骨器観察表

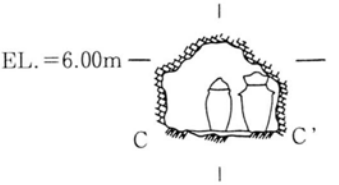
図版番号	採取地点	蔵骨器			サイズ（cm）					文　様	銘　書	銘書西暦
		分類	蓋	身	a	a'	b	c	c'			
10－1	墓室	ＩB	○		26.5		15.0				〈内面〉 小様又吉道光二十二年壬寅十二月二十二日死咸豊三年癸丑十一月十九日洗骨	1842年 1853年
				○	26.0		47.4	19.5		肩部は3ヶ所に蝶形沈線文、その間は曲線文を描く。胴部は屋門を貼り、その両側に蓮華文を施す。胴下部は波状文と横位沈線を描く。		
－2	墓室	ＩB	○		31.0		16.4				〈内面〉 光緒十四年寅十二月十二日三男嶺子又吉筑登之童名嘉真死同十一年酉七月七日洗骨	1888年 1885年
				○	29.5		54.8	21.0		肩部はラマ式蓮弁文と花文。胴部は2層構造の屋門を貼り、その両側に蓮華文を施す。胴下部は波状文と横位沈線文を施す。		
－3	墓室	ＩB	○		32.0		13.3				〈内面〉 道光十八年申戌七月	1838年
－4	墓室	ＩC		○	29.5		66.0	24.5		頸部から屈は半裁竹管状工具で瓦屋根を描き、その中位に2条の刻文を横位に施す。また、4ヶ所に獅子頭の付く降棟を配する。胴部は2層構造の屋門を貼り、両側面と裏面は縦位凸帯で区画し、区画内に蓮華を貼付する。胴下部は唐草文を貼付。		



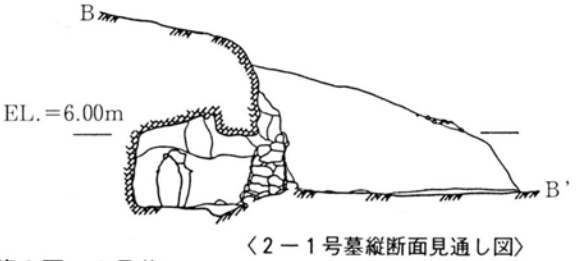
〈2号墓全体平面図〉



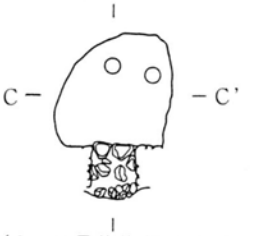
〈2－1号墓正面図〉



〈2－1号墓墓室平面図〉



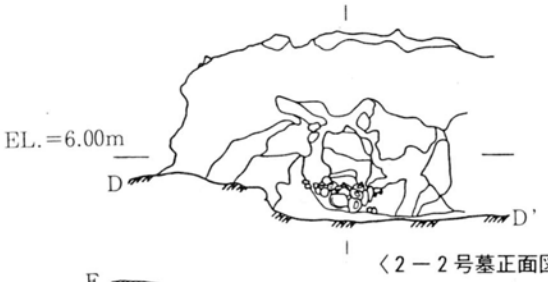
〈2－1号墓縦断面見通し図〉



〈2－1号墓墓室正面図〉



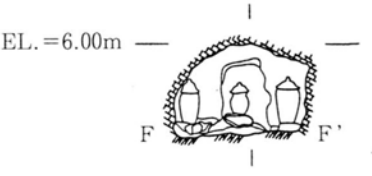
第9図　2号墓



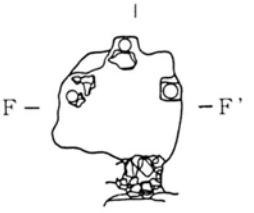
〈２－２号墓正面図〉



〈２－２号墓縦断面見通し図〉



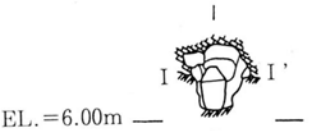
〈２－２号墓墓室正面図〉



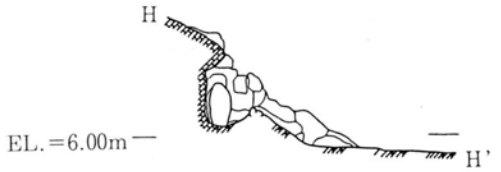
〈２－２号墓墓室平面図〉



〈２－３号墓正面図〉



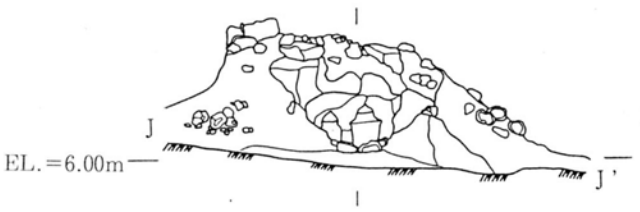
〈２－３号墓墓室正面図〉



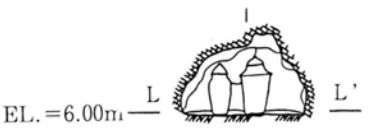
〈２－３号墓縦断面見通し図〉



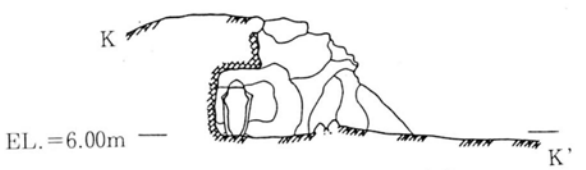
〈２－３号墓墓室平面図〉



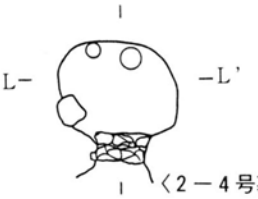
〈２－４号墓正面図〉



〈２－４号墓墓室正面図〉



〈２－４号墓縦断面見通し図〉



〈２－４号墓墓室平面図〉



第10図　２号墓

(3) 第3号墓

丘陵の尾根筋から裾に至る小道沿いに構築された墓である。墓庭の奥行きは狭く、したがって墓庭は墓口に対し横長につくられている。また、墓室と墓庭は道より低く掘り下げられ、墓庭の入口は道と同じ高さになる西側に設けられている。墓庭内の西側には方形の板石を載せる野面積みの仮墓がある。

構　造

平葺形式の墓で、墓室と墓庭の平面観は「L」形をなす。屋根は方形で二重の石積みがめぐる。外側の石積みは地面を掘り込んだ壁面に礫を野面に積み、内側の石積みは約40cm幅の石列でなされる。墓庭に向かって傾斜する平坦な屋根は石灰岩の細礫で整えられ、部分的に漆喰が残っている。墓口上部の軒の正面幅は広く、下部に比較的大きな切石を置き、その上に切石を積み上げている。墓口正面は大きな切石で組まれ、隅石は岩盤上に切石を積み上げている。

墓庭は地面を長方形に掘り込み、入口を西側に開ける。道と接する右袖は岩盤を併用して石垣を構築し、隅石から道沿いにカーブを描いて墓庭入口まで続く。石垣の中央部は乱れており、構築後に崩落し、積み直されたことが分かる。墓口左側に袖垣はなく、軒の高さから墓庭の西端まで段が2段造られ、その上段の壁面には石が積まれていたが、一部を残して大部分は崩落している。墓庭の下部壁面の石積みは西側へ直線的に伸び、その後北側に折れ墓庭入口に至る。

墓室は墓口上部で高く、奥壁に向かって傾斜する。平面観は方形で、側壁は垂直に削りだされ、天井の横断面は弧を描く。木棺を取り囲むように蔵骨器を置く棚を左右に1段、奥に3段が切石でつくられている。

墓庭内の西側には板石を載せる仮墓がある。かなり雑な作りで、奥壁と両側壁は礫を野面に積み上げ、上部には方形の板石を被せている。中からは蔵骨器の破片が多数採集された。遺骨はなく、移転時に蔵骨器を破砕し、中に捨てたものと考えられた。

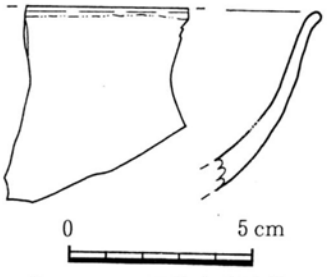
遺　物

採集された遺物は陶器・磁器・ガラス製品・鉄製品で、第7表に示すとおりである。陶器製の香炉と花瓶は墓に伴うもので、香炉は白色の胎土に飴釉を施すものである。

第11図に示す碗は内外面に発色の異なる釉を掛け分けるもので、外面は飴釉、内面は白化粧を掛けた後に透明の釉を施釉する。

第7表　3号墓　出土遺物一覧

施釉陶器					磁器		ガラス製品	鉄製品	合計
碗	香炉	花瓶	蔵骨器		蓋付壺	湯呑	瓶	鋏	
			蓋	身					
1	1	1	6	7	1	2	4	1	25



第11図　3号墓出土遺物
（写真図版12）

蔵骨器は墓庭で1点、仮墓で3点、墓の周辺から4点が得られ、分類ⅠB・ⅡB・Ⅲの各種がある。サイズや文様等の個別観察は第8表に示した。

分類ⅠBに属するものは写真図版13－1～4の4点である。

1は身の資料で、口縁部は外反し、胴上部で張る。器の最大径が胴上部にある等の全体的な器形は他の同種資料と類似するが、頚部が「く」字形に屈曲せず、口縁部が緩やかに弧を描いて外反する点で異なる。

2～4は口縁部が緩やかに外反し、胴上部で膨らんだ後、径を減じながら底部に至る。胴の最大径は胴の中頃からやや上位にあり、全体として均整のとれた器形である。いずれも水挽き後、ナデ仕上げされるが、内面には水挽き痕を残す。

2と3は小型の厨子甕で、2は口径と胴の最大径がほぼ同じものである。蓋は鍔の直径に比べ高さの低い円錐台形で、鍔は外傾する。頂部には逆台形の偏平のつまみが付く。外面上部はヘラ調整され、下方及び内面は回転ヨコナデで仕上げられる。

3は胴の最大径より口径の大きいもので、口縁部の外反は2より強い。底部は13.0cmと小さく、頚部以下の器形は分類ⅠBの典型的な器形である。蓋は2の蓋と同じ器形で、鍔は外傾し、頂部には偏平のつまみがつく。内外面ともナデ仕上げされる。

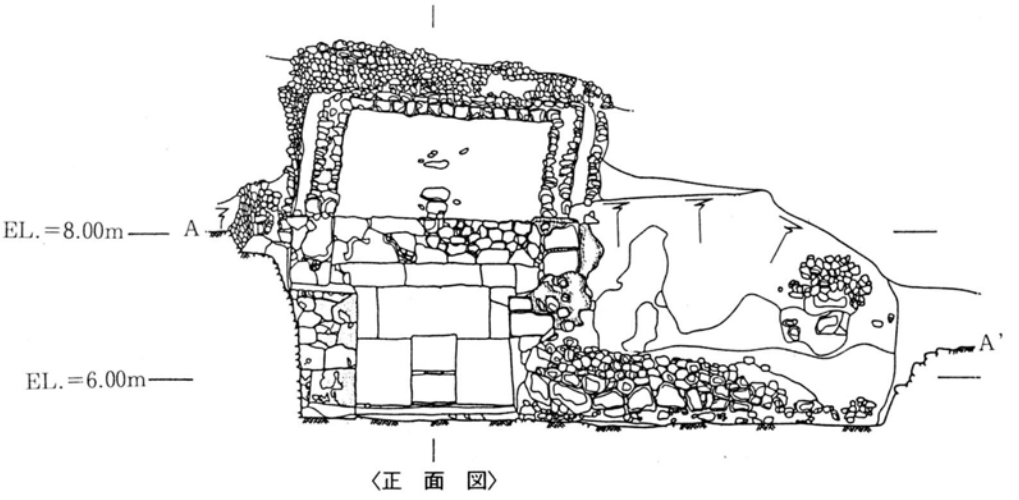
4は採集資料の中で器高の高いものである。内外面とも水挽き後ヨコナデされるが、内面には水挽き痕を明瞭に残す。内面の胴上部には粘土帯の継目と見られる段がある。文様もかなり簡素化している。

5は陶製の家型厨子甕である。胎土は粗く、全体に白化粧を施し、透明釉で仕上げられる。本種製品は限られた窯の中を最大限に利用するため、屋根部と軒角部に他の陶器を置く3本1組みの先端水平の突起がつけられている。また、瓦屋根を描く面には碗等の底部熔着痕がある。

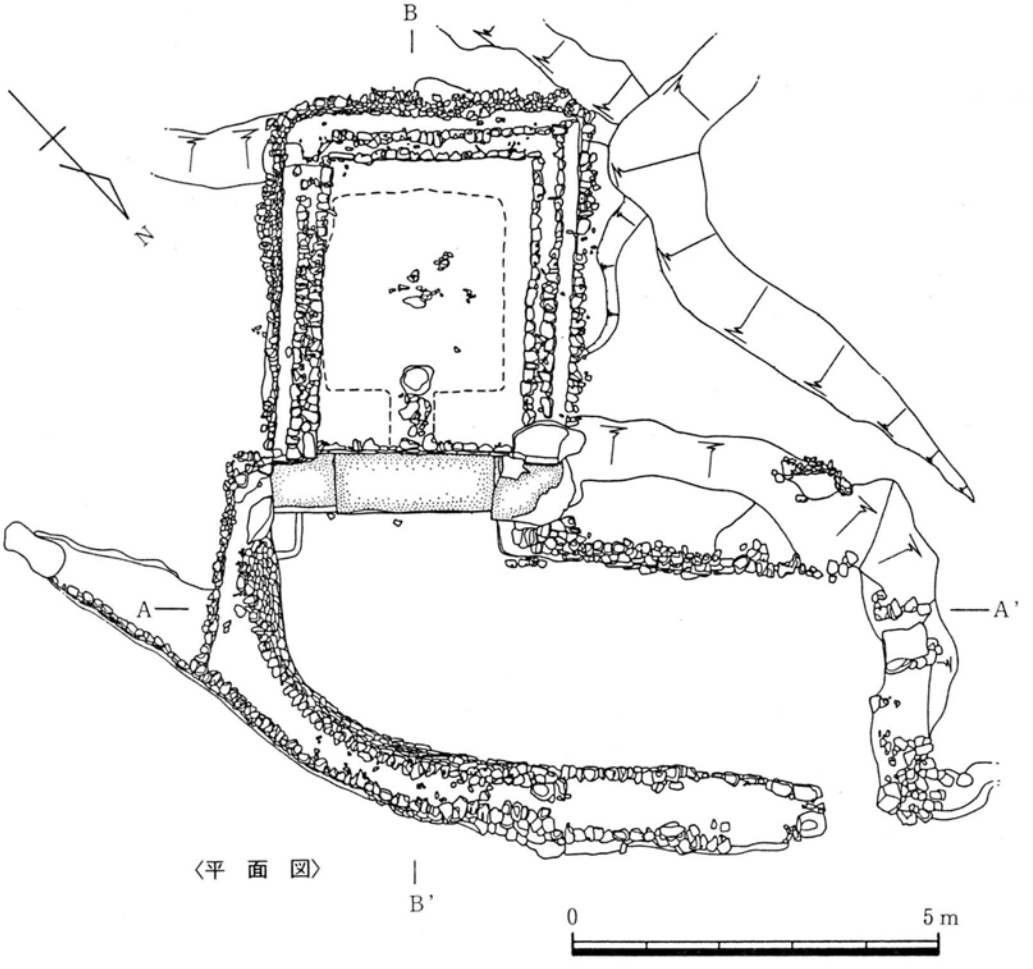
6と7は円筒形の蔵骨器で、7にはつまみが付けられている。身の内面には水挽き痕を残すが、外面は回転ヨコナデが徹底し、水挽き痕は見られない。蓋は高さの低いもので、内外面ともヨコナデが徹底している。本種製品は一度素焼きを行なった後に、6は青色、7は黒色の塗料を塗り、金色・銀色・緑色の塗料で文様が施される。

第8表　3号墓 蔵骨器観察表

図版番号	採取地点	蔵骨器 分類	蔵骨器 蓋	蔵骨器 身	サイズ(cm) a	a'	b	c	c'	文様	銘書	銘書西暦
13－1	仮墓後方	ⅠB		○	21.0		37.9	15.0		肩部は正面と裏側にラマ式蓮弁様の文様、その間に波状文を施す。胴部は沈線で屋門を描き、内部に孔を穿つ。胴下部は波状文横位沈線を施文する。		
－2	仮墓	ⅠB	○		22.0		9.2				〈鍔下面〉 昭和十三年旧七月十日長女利子死亡日 昭和三十二年旧八月二十一日戸主 □ □ 三郎四女米子洗骨日 〈内面〉 昭和二十四年旧八月十二日米子死亡日（年令三才）	1938年 1957年 1949年
				○	18.0		32.6	13.0		肩部から胴下部にかけて櫛描きの横位沈洗と波状文を交互に施す。		
－3	仮墓	ⅠB	○		20.5		9.0				〈鍔下面〉 九カ 昭和十五年旧一月 □ 日洗骨伊舎カ 波字□西リ伊波小ノ三男 〈内面〉　国カデカ 二人共ブラジル □ □ 死亡 婦カ 共カ 同カ 妻カメ　（夫□ □ □ ）	1940年
				○	21.4		36.8	13.0		肩部、胴中央部、胴下部に櫛描きの波状文と横位沈線を各1組施す。		
－4	墓庭	ⅠB	○		34.4		13.2				〈内面〉 没昭和五十一年十一月十日 カミー長男四代　伊波秀雄 昭和六0年十二月一日（洗骨）	1976年 1985年
				○	34.0		75.0	25.5		肩部は沈線による波状文と簡略化した蓮弁文。胴部は屋門を貼り、その内側にマジックで銘書を記す。胴下部は横位沈線と波状文を施す。	〈屋門内部〉 伊波秀雄	
－5	墓庭入口	ⅡB	○		48.0	36.0	47.0			屋根にシャチホコ、獅子頭、異形の鳥頭様の飾りを施す。また、3本1組の突起を屋根に4組、軒の4隅に各1組がつくられる。	〈下面縁辺＝身との合わせ面〉 月カ　日カ □ 廿七 □ 死亡歳七十七才 月カ 廿カ 日カ 骨カ □ □ 七 □ 洗 □ 年カ 明治三十七年辰十月四日死亡□ 五十四歳賀摩妻ウト ○カ □ 四十二年酉旧十二月十五日洗骨	1904年
				○	43.0	36.3	43.4	38.5	28.5	文様は凸帯でなされ、正面に屋門を貼り、その両側に蓮華文を施す。側面は合掌僧侶立像と蓮華文。	〈屋門内部〉 〔 〕年五十 □ 歳 洗カ骨カ 〔 〕 □ □ 賀摩妻ウト	
－6	墓庭	Ⅲ	○		16.0		3.5			緑色を主体に金色と銀色の塗料で蓮華文を描く。	〈内面〉 昭和五十八年 六月十五日卒 金城春江　行年七十六才	1983年
				○	16.0		25.8	15.5		胴上部は歯車状に凸帯を貼り、口縁下は、乳頭を等間隔に施す。胴部は屋門を貼り、その両側に開いた蓮華文と裏面に閉じた蓮華文を描く。文様は緑色、金色、銀色の塗料を使用する。	〈屋門内部〉 金カ 城カ □ □ 春江	
－7	墓庭	Ⅲ	○		13.0		4.4			金色の塗料で外面に蓮華文、縁側に緑色塗料で円を描き、その間に鋸歯文を施す。	〈内面〉 故 金城 □ □ 月カ 昭和二十四年四 □	1949年
				○	12.5		22.3	10.7		胴部は上・下部に櫛描きの沈線で3分割し、上部に簡略した蓮華文、中央部は屋門を貼り、蓮華文を施す。		

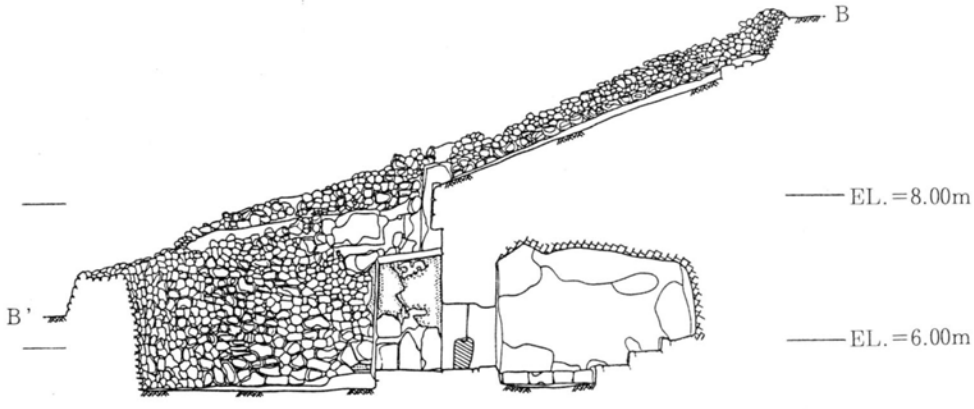


〈正　面　図〉

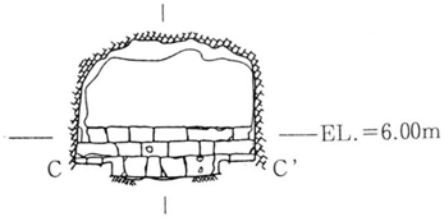


〈平　面　図〉

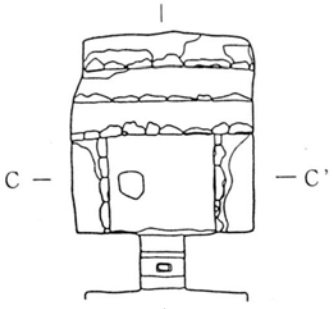
第12図　3号墓



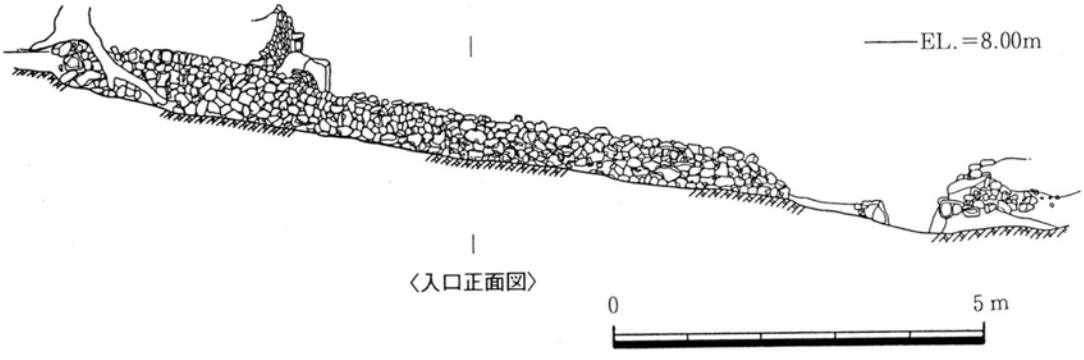
〈縦断面見通し図〉



〈墓室正面図〉



〈墓室平面図〉



〈入口正面図〉

第13図　3号墓

(4) 4号墓

3号墓から西方へ約25mいったところの斜面（標高4～5m）に造られた掘込墓で、伐採作業の途中で新たに見つかった古墓である。墓口は北西向き。

今回の調査で同墓は去る沖縄戦中、防空壕に使用されていたようすがうかがえた。サンミデーから汁ヒラシにかけて掘り込まれた深さ約80cmの溝や、墓庭中央に構築された石垣などは戦時中の所産と考えられる遺構である。石垣は目隠しや爆風避けと解され、墓庭からは薬莢なども採集されている。こうした戦時中の掘削や構築物によるほか、墓口上部の崩落などもすすんでおり、墓としての保存状態は良くなかった。また、調査開始時は墓庭には倒木や現代の生活用品などが捨てられ、荒れた状態であった。

構　造

墓室は棚と汁ヒラシから成るが、汁ヒラシについては前述の戦時中の掘削で大部分が壊されていた。この掘削によって墓室の平面形も一部変形しているが、本来は方形に近い形で、面積は5㎡前後だったとみられる。棚は正面と右に1段ずつ設けられており、正面の棚は右棚より約40cm高く、幅広に造られている。いずれの棚も岩盤を削り出して形造っているが、右棚には縁石として切石も使用している。正面棚の中央部は奥壁を削りさらに広いスペースをつくりだしている。ここからは石厨子の細片が採集された。

墓庭は墓室に対して縦長で、縦が約4.3m、横幅最大約3.3mである。サンミデーは土面仕上げで、縁石のみは切石を並べている。庭囲いの石積みは墓門と左側にわずかに残るのみで、全体としては残りは良くない。先述のように墓庭中央には戦時中に構築された石垣があり、墓庭を囲んでいた石積みは、大部分がこれを造るために取り外されたとみられる。残っている部分の石積みをみると、墓門だけは四角形の切石が使われ、他は野面に近い雑な面調整の石灰岩が積まれている。

遺　物

墓室内からは正面の棚から採集された家型石厨子の細片（身）のほか、陶磁器やガラス小瓶（薬瓶?）、金属製のコップ、乾電池などがあった。しかし、石厨子片以外は戦時中に掘り込まれた溝状遺構内からの出土であり、戦時中に持ち込まれたものと考えられた。

墓庭からは沖縄産陶器の碗や、墓移転の際に遺棄されたとみられる厨子甕が、銃弾や薬莢、近年の磁器片などとともに採集された。墓の外側からも同墓に伴うものとみられる厨子甕が得られている。

以下、採集遺物のうち蔵骨器と陶磁器について記述する。

写真図版15－1・2はボージャー厨子の蓋と身の破片で、胎土やサイズなどから両者は一対とみられる。身は口縁が内側へ湾曲し、上端は丸く膨らむ。器面は回転ヨコナデで仕上げられるが、内面は不徹底。蓋は笠に似た器形で、頂部は平坦に成形され、裾へゆるやかに開いていく。外面ではナデ調整のほか上部にヘラケズリもみられる。いずれも墓庭で表採。

3は家型石厨子の蓋で、墓室正面の棚から採取した身の細片と一対になるものと考えられる。素材は琉球石灰岩。屋根部の形態は入母屋式で、前面および両側面には垂木が表現されている。器面には

筋状の加工痕が無数に観察される。墓庭表採。

写真図版16－1はマンガン掛け甕型厨子甕で、やや細身の器形。頸部から口縁部にかけてはゆるやかに外反する。器面調整は大部分が回転ヨコナデによるが、外面下部にはヘラケズリも認められる。底部3ヶ所に小さな脚がついている。墓庭表採。

同図版2・3は4号墓の外側から採集されたもので、いずれもマンガン掛け甕型厨子甕に分類される。両者とも器高30cm前後の小型蔵骨器で、3は径も小さく細身である。2点とも口縁部はゆるやかに外反する。器面は回転ヨコナデによって仕上げられているが、3の内面には水挽きの痕が明瞭に残っている。

蔵骨器のサイズや文様については第9表に示した。

第9表　4号墓　蔵骨器観察表

図版番号	採取地点	蔵骨器 分類	蓋	身	サイズ(cm) a	a'	b	c	c'	文様	銘書	銘書西暦
15－1	墓庭	ⅠA	○		28.6	－	7.6	－	－			
－2	〃	ⅠA		○	24.0	－	－	－	－	口縁外面と肩部に横位の凹線が認められる。		
－3	〃	ⅡA	○		80.0	62.5	30.0	－	－	4面とも屋根の裾に垂木を表現。		
16－1	〃	ⅠB		○	29.8	－	55.2	－	－	胴中央部に屋門を貼り付け、その左右と肩部に線描きの蓮華文を施す。胴下部には凹線と沈線波状文を描く。肩部の蓮華文は簡略化している。		
－2	墓道	ⅠB		○	22.3	－	28.9	12.5	－	肩部から胴下部にかけて凹線と櫛描き波状文を密に施す。屋門はない。		
－3	〃	ⅠB		○	18.0	－	30.3	9.7		肩部から胴下部にかけて凹線と櫛描き波状文を施す。屋門はない。	〈内面〉昭和十年旧七月三十日洗骨	1935年

第10表　4号墓　出土遺物一覧

遺物／地点	沖縄産陶器 蔵骨器 ⅠA 蓋	ⅠA 身	ⅠB 蓋	ⅠB 身	ⅡA 蓋	ⅡA 身	施釉陶器 碗	杯	急須	不明	焼締め陶器 壺	摺鉢	不明	軟質陶器 鍋	急須	不明	本土産磁器 碗	皿	急須	不明	その他 コップ	鉄	薬瓶	乾電池	軍靴	薬莢	鏃	金属片	計
墓室						1							2				2	1	1	1	1	1	5	1	2	1	5		24
墓庭	1	1		1	1		4		1				26	1	1	1										10		2	50
墓周辺				2				1		1	1	4							1							1			11
計	1	1		3	1	1	4	1	1	1	1	4	28	1	1	1	2	1	2	1	1	1	5	1	2	12	5	2	85

第15図1～6は4号墓の墓庭から採集された沖縄産陶器である。(写真図版16－4～9)

1は灰釉碗の底部で、釉薬はつけ掛けによって腰部まで施されている。高台脇からの立ち上がりは直線的である。底径5.8cm。

2は内面に灰釉、外面に鉄釉を施す、かけ分けの碗の底部資料である。釉薬は外面が腰部まで施され、内面は総釉のあと見込みにおいて蛇の目状に釉剥ぎが行われている。腰部はやや丸みを帯びている。底径4.0cm。

3は小碗の底部で、白化粧土のあと透明釉を施すものである。外面は15面体に面取りされている。底径3.6cm。

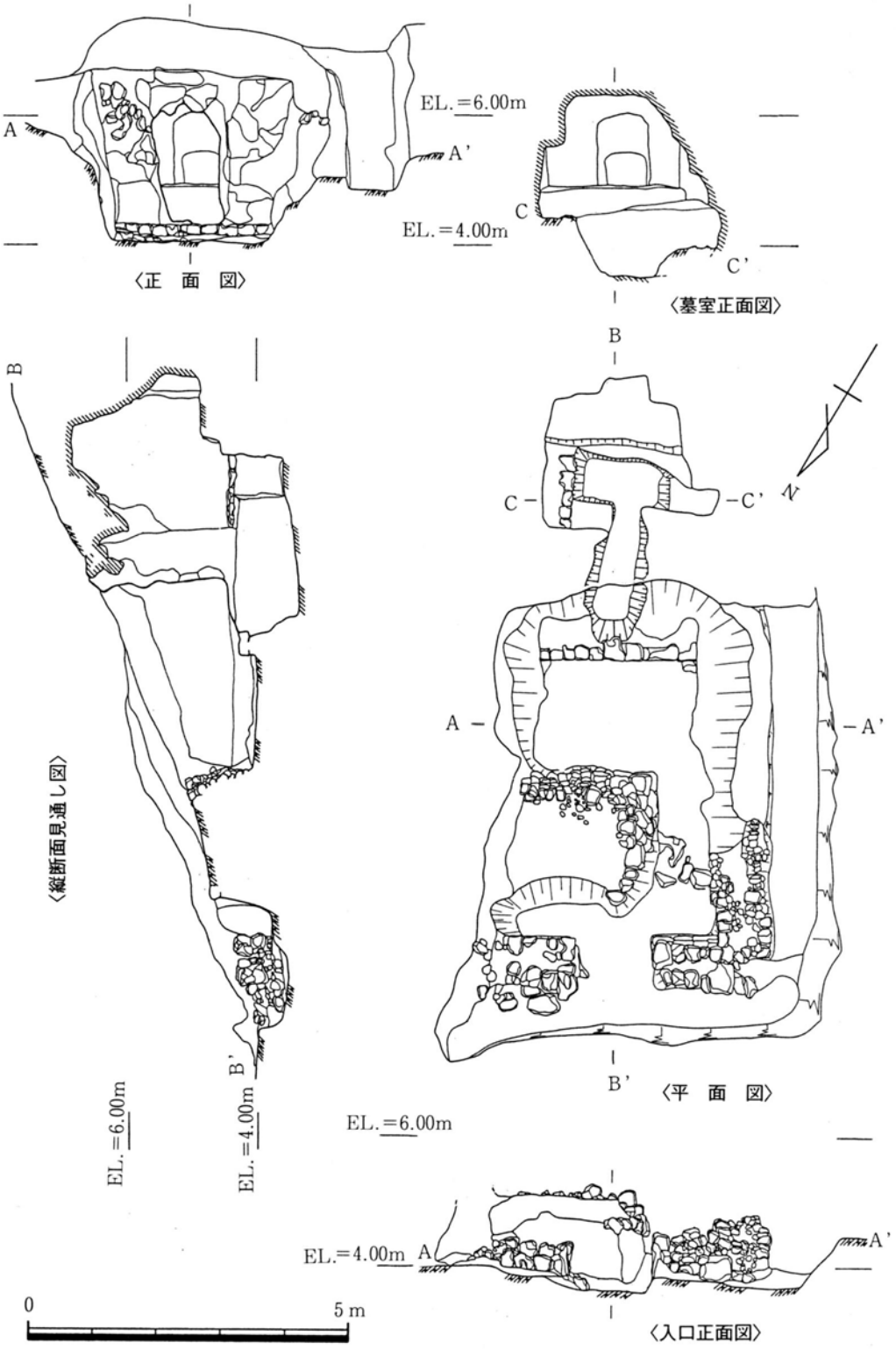
4・5は摺鉢の口縁部資料である。4は口縁上部がくびれ、胴部との境に断面三角形の凸帯を貼り付けている。口縁は開きが大きく、注口がついている。内面のかき目は間隔をあけて施している。5は口縁上端を水平に屈折させるものである。4に比べ口縁の開きが弱く直口に近い。口縁上面には1本の沈線を巡らしている。かき目は間断なく全体に施されている。器面は4・5とも回転ヨコナデによって仕上げられ、口縁内面のかき目はなで消されている。図上復元によると口径は4が28.4cm、5は24.8cm。

6は器高16.0cmの小型壺で、最大径が胴下半部にある安定した器形である。頚部はしまり、口縁部は強く外反する。器面は回転ヨコナデによって仕上げているが、胴部には水挽きの凹凸がわずかに残っている。胴下部はヘラケズリ。肩部には浅い凹線が3本めぐる。口径5.2cm、底径8.4cm。

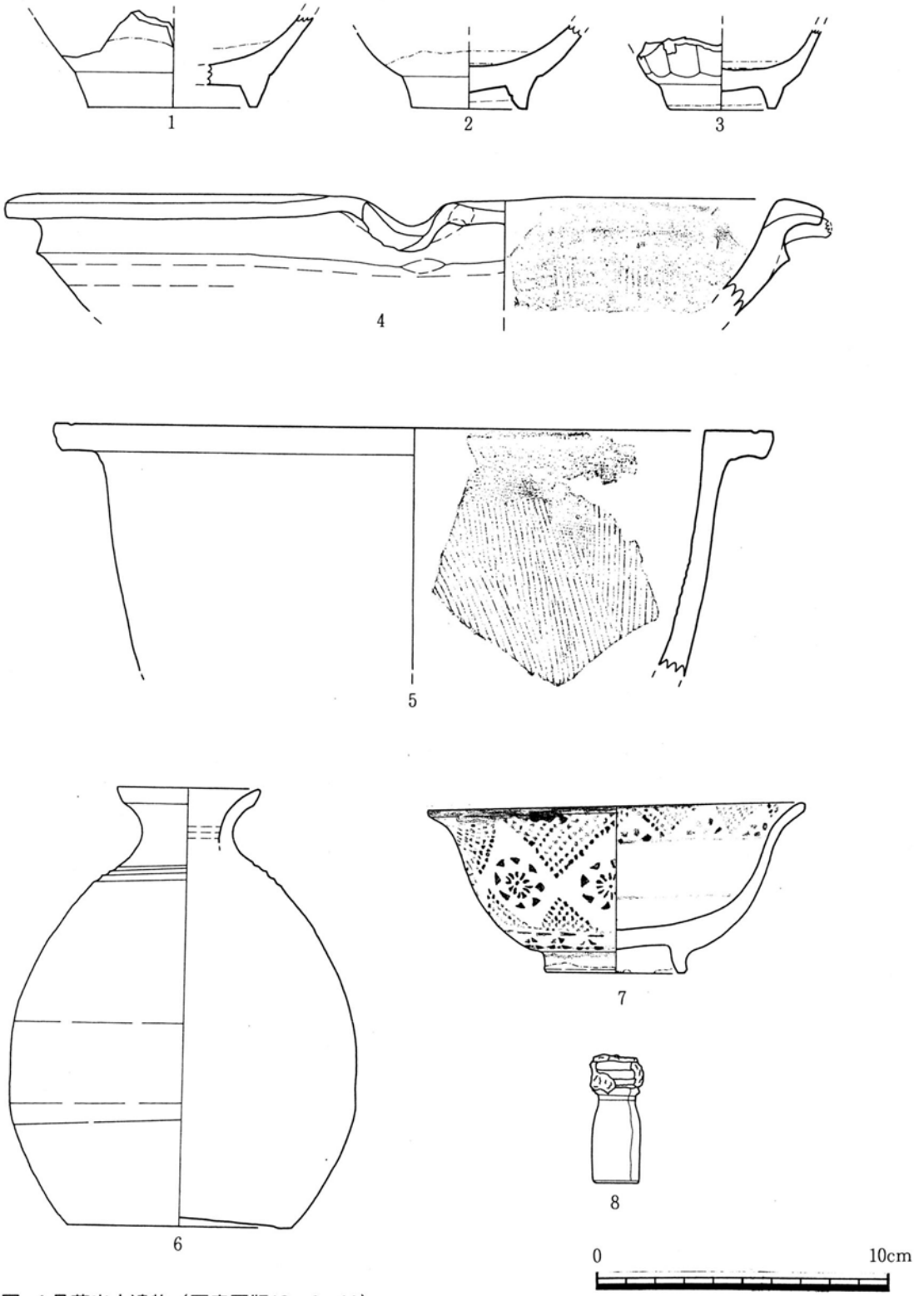
7・8は戦時中に掘り込まれた溝状遺構から出土したものである。(写真図版16－10・11)

7は近代の本土産磁器で型紙刷りの碗である。点集合による三角形と円形との組み合わせ文様を描いている。同種のものが他に1点出土している。本資料は口径13.8cm、器高6.0cm、底径5.0cm。

8は緑色の小型ガラス瓶で同種のものが他に4点出土している。蓋は金属製。器高4.6cm、底径1.6cm。薬瓶であろう。


EL.=6.00m
A
A'
EL.=4.00m
〈正 面 図〉
C
C'
〈墓室正面図〉
B
B'
〈縦断面見通し図〉
EL.=6.00m
EL.=4.00m
C
C'
N
A
A'
〈平 面 図〉
EL.=6.00m
EL.=4.00m
A
A'
〈入口正面図〉
0
5 m

第14図　4号墓



第15図　4号墓出土遺物（写真図版16—4～11）

(5) 5号墓

今回の調査で確認された唯一の亀甲墓である。西面する斜面に構築される墓で、墓口正面は比較的大型の切り石で組み、それ以外は粗調整された切石で積み上げている。墓室の天井は地面を縦に掘り込み、切石でアーチ形に石組みする。俗にマチバカと称されるつくりの墓である。墓庭の袖は掘り込んだ壁面に石積みし、墓庭入口には石垣がつくられる。亀甲墓ではあるが、屋根を取り囲む石積みの一つであるヤジョーマーイが欠落する。遺物は蔵骨器分類ⅡBの破片1点、沖縄産施釉陶器碗の口縁部と胴部の破片が得られている。

構　造

墓室は平面方形に掘削し、棚が左右に1段、正面に3段造られている。両側壁と奥壁は丁寧に面調整された切石を積み上げ、天井は曲面をなす石灰岩を1列3枚の3列でアーチ形に構築されている。垂直な側壁の目地は漆喰で被覆される。汁ヒラシは石敷きで、2箇所に長方形の穴が設けられている。

屋根は石灰岩を破砕した砂礫で亀甲形に整えられる。大部分は石灰岩の砂礫が露呈するが、部分的に漆喰が残っていることから、屋根全体が漆喰で覆われていたと考えられた。屋根を取り囲む石列は1条で、墓庭の袖の石垣上部まで連なる。ウーシは礫を円錐形に組んで設けられ、漆喰が部分的に付着する。眉は2枚の波形に成形された石灰岩をカガンイシ上に置く。墓庭は地面を方形に掘削し、墓口と墓庭両側壁の石積みは岩盤上から積み上げられる。前者は墓口左右の隅石は切石で組み上げるが、隅石の正面は墓室側に傾き、上面は墓庭側へ傾斜している。墓庭を囲む石積みは、粗調整の切石で「あいかた」に積み上げている。墓口を塞ぐ蓋石と香炉石は有孔虫からなる石灰岩で製作されたものを用いている。

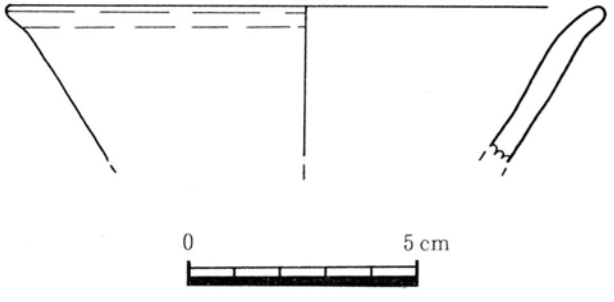
遺　物

沖縄産施釉陶器の碗の口縁部1点と器種不明の胴部1点、蔵骨器は分類ⅡBの陶製家型厨子甕1点が得られた。

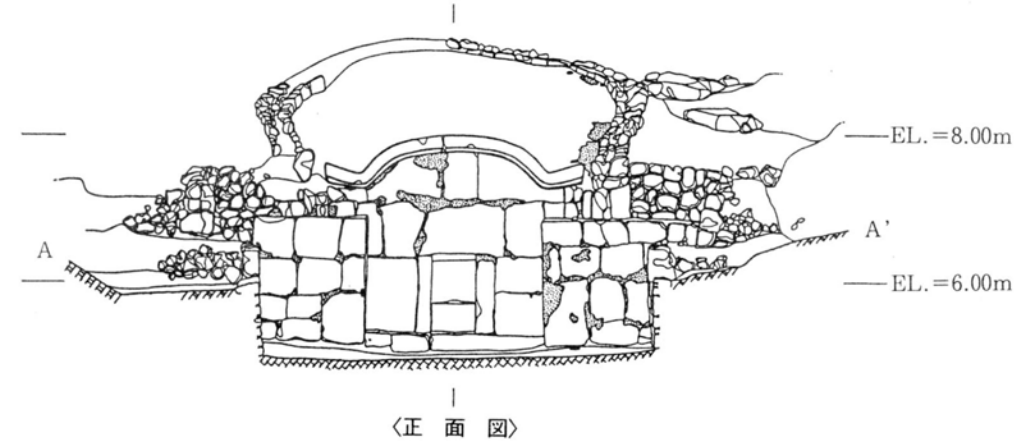
第16図に碗を図示する。口縁部が僅かに外反するもので、内外面に白化粧を施し、透明の釉が施釉される。

器種不明品は壺等の袋ものの破片で、外面に飴釉が施されるものである。

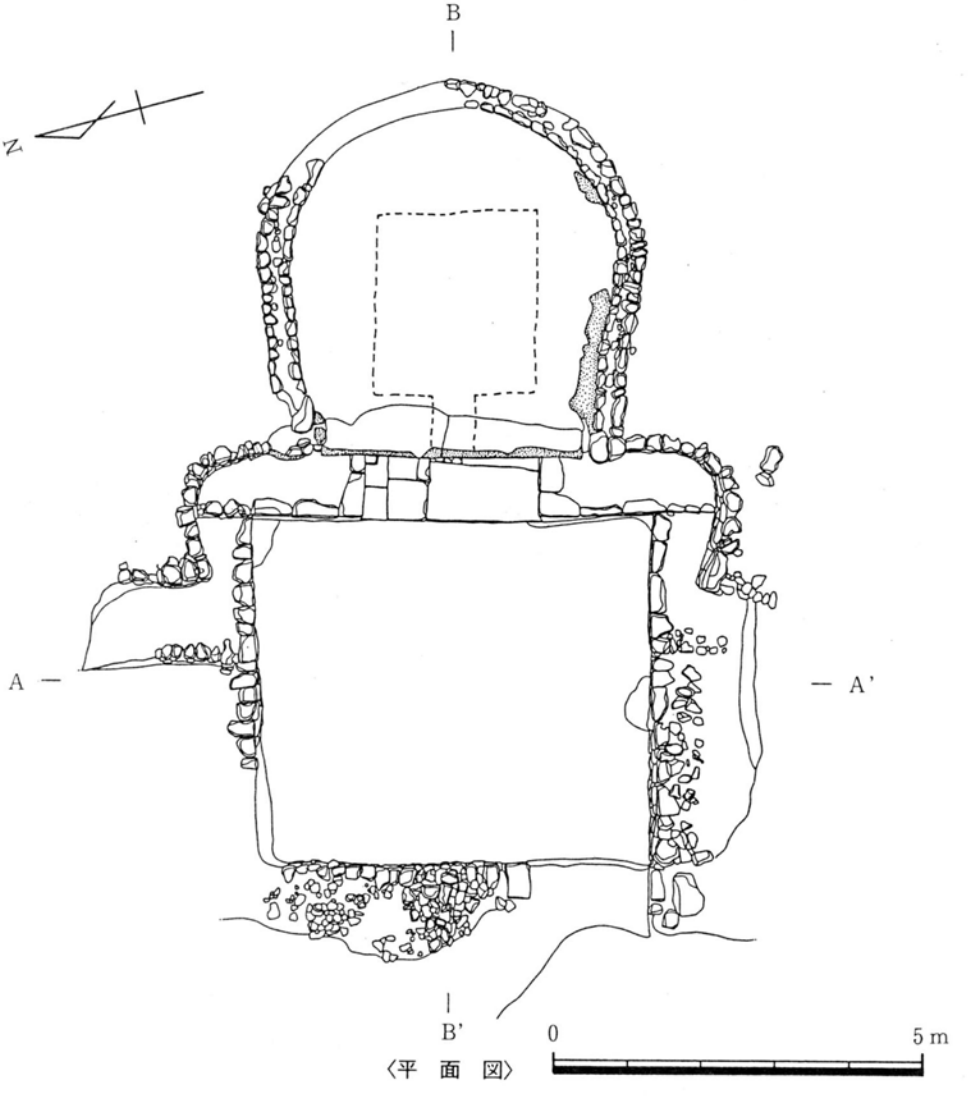
陶製家型厨子甕は蓋の破片である。先端が平坦な3本の角状突起をなすもので、呉須（コバルト）と飴釉が施釉されるが、突起先端は露胎である。胎土は粗く、混和材として多量の籾殻が見られる。



第16図　5号墓出土遺物（写真図版18）

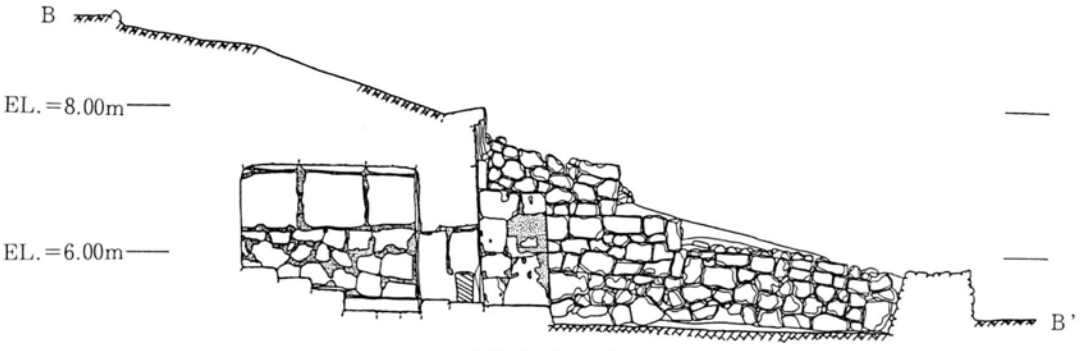


〈正　面　図〉

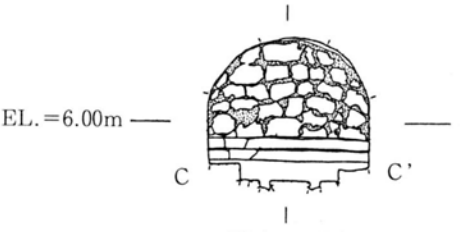


〈平　面　図〉

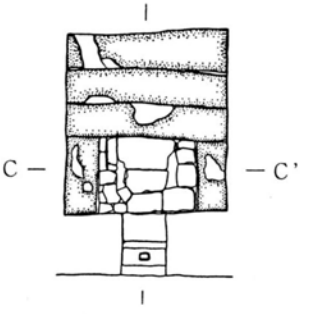
第17図　5号墓



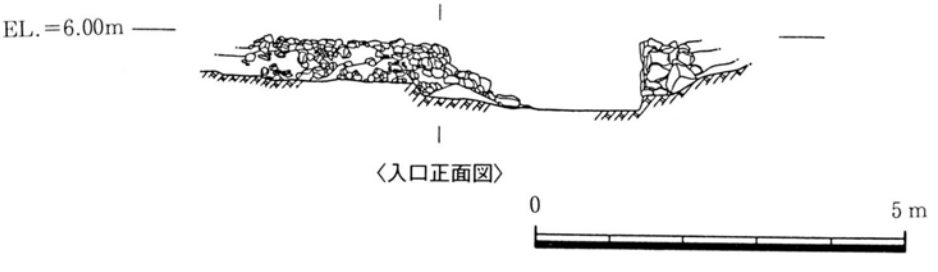
〈縦断面見通し図〉



〈墓室正面図〉



〈墓室平面図〉



〈入口正面図〉

第18図　5号墓

(6) 6号墓

古墓群の所在する小丘の頂上近く、標高11～12mの岩盤露出部に造られた掘込墓である。

6号墓は隣接する二つの墓室が一つの墓庭を共有するもので、向かって右側（南東側）のものを6－1号墓、左側（北西側）を6－2号墓と枝番号を付した。墓口はいずれもほぼ南西に向く。調査時点にはすでに空墓となっていた。

構　造

6－1・2号墓の両方とも、墓室は琉球石灰岩の岩盤を掘り込んで造られている。いずれも小規模の墓で、1は墓室面積約2.7㎡、天井高約1m、2は墓室面積約1.6㎡、天井高約70cmである。

床面は、1は全体に平坦仕上げだが、2の場合は墓室の奥に直径約55cm、深さ約15cmの円形のくぼみが設けられている。おそらく、厨子甕を安定させるためか、もしくは厨子甕を置く際の高さ調整のためといった性格のものだろう。天井は両墓室ともほぼ水平に整えられている。

墓室入口についてみると、1は石灰岩の切石を組んで墓口をつくる方法で、石積みの目地には墓室側から土を埋め込んでいる。2の墓口は崩壊し、岩盤が露出した状態だったが、1と同様の石積みが行われていたものと思われる。

墓庭は琉球石灰岩を被う赤土を掘り込んで造成されており、これによってできた高さ約1mの土手がそのまま墓庭の囲いとなっている。南西土手（墓口の正面）の外側だけは高さ20cm～60cmの野面積みが行われているが、他は赤土のままである。屋根は小礫混じりの赤土がマウンド状に盛られている。盛土には墓庭造成時に掘り出された赤土や石灰岩礫が利用されたと推察される。墓庭は墓室に対して横長で、大きさは6－1号墓の中軸線上で約3.5m、6－2号墓中軸線上で約2.5m、横幅は約4.5mである。

調査中、墓庭に露出した岩盤に円形（断面U字形）の落込みが確認された。この小穴が人為的な掘り込みか否かについての識別が困難だったため、地質学研究者の大城逸朗先生に観察していただいたところ、自然のものと判明した。参考のためにこれについての先生の所見を後頁（P.38）に掲載した。

遺　物

遺物は墓庭を囲む南西側土手の上や、墓の周辺からの表採が多かった。近くには他に古墓が存在しないことから、本墓に伴う可能性が高かったためここで扱うことにした。墓庭からは陶磁器のほか、プラスチック製の櫛、鋏、薬瓶とみられる透明ガラス瓶なども出土している。

以下、蔵骨器と陶磁器について略述する。

写真図版20－1～8は蔵骨器の資料で、すべて墓の周辺から採取したものである。

1・2はマンガン掛け甕型厨子甕の蓋で、2点とも平坦な頂部に、円盤状のつまみがつく。1は頂部から鍔にかけて丸みをもちながら移行するが、2は直線的である。両者とも水挽き後、回転ヨコナデを施すが、外面上部ではヘラケズリが行われている。

3～6はマンガン掛け甕型厨子甕の身である。これらの器形を概観すると底部から直線的に立ち上がり、胴上部で張りをもたせて頸部へ移行し、口縁部で外反するのが基本的な形状である。器面調整

は回転ヨコナデによって仕上げられているが、内面は徹底せず、凹凸を残している。

3は他に比べ胴部の張りがやや強いものである。口縁上端は内側へ張り出しているため、同部断面はT字形に近い形状を示す。外面下端はヘラケズリが行われている。4は3に比べ細身の資料である。口縁の断面は三角形状。5は本墓採取資料の中では中型のサイズである。頚部で屈折部をつくりだす点は他資料と異なっている。口縁の断面形はバチ状。6は小型の厨子甕で、内面下部には水挽きによる凹凸が明瞭に残っている。口縁の断面は三角形。

7は円筒形の小型蔵骨器で火葬用と考えられる。表面は蓋に黒色、身に濃紺色の塗料が塗られ、さらにその上から緑色や白色で文様の色づけが行われている。内面は白色の塗料が満面に施されている。

8は鉄釉の四耳壺を蔵骨器に転用したもので、口縁部から胴中央部まで欠いている。

第11表　6号墓　蔵骨器観察表

図版番号	採取地点	蔵骨器 分類	蓋	身	サイズ(cm) a	a'	b	c	c'	文様	銘書	銘書西暦
20－1	墓の周辺	ⅠB	○		28.5	－	10.2	－	－		〈内面〉 大正十五年旧十二月廿八日死去 当□□□ 昭和八年旧七月□六日洗骨 當間ナビ	1926年 1933年
－2	〃	ⅠB	○		21.0	－	7.9	－	－			
－3	〃	ⅠB		○	27.0	－	52.4	23.0	－	胴中央部に屋門を貼り付け、その左右と肩部に線描きの蓮華文を施す。肩部の蓮文はかなり簡略化している。胴下部には凹線と沈線波状文を巡らす。		
－4	〃	ⅠB		○	28.0	－	52.6	19.0	－	胴中央部に屋門を貼り付ける。肩部および胴下部には凹線と櫛描き波状文を施すが、肩部にはさらに格子沈線文を描いている。		
－5	〃	ⅠB		○	21.6	－	39.0	16.0	－	胴中央部に屋門を貼り付け、その左右と肩部に蓮華文を施す。胴下部には凹線と波状沈線文を巡らす。		
－6	〃	ⅠB		○	18.0	－	29.5	13.0	－	胴中央部に線描きの屋門を施し、肩部には簡略化したは葉文を線描きする。胴下部には凹線と波状沈線文を巡らす。		
－7	〃	Ⅲ	○		12.5	－	4.5	－	－	獅子を模した貼り付け文が3ヶ所につく。白色と緑色の塗料で、頂部平坦面に葉文を、鍔上面には波を表現したと思われる文様を描いている。	〈内面〉 昭和□□卒　當間〔　〕年 六十四才 當間ナビ享年六十五才	
				○	11.0	－	17.4	9.0	－	胴中央部に屋門を貼り付け、その裏側胴部には沈線および緑色塗料によって葉文を描く。胴上部には凸帯を巡らし、これに瓦を描いている。口縁外面には蓋と同種の獅子の貼り付け文と線描きの葉文を施す。屋門の右には蓮とみられる文様が貼付されているが、破損のため不明。	〈屋門内部〉 故　當間仁王	
－8	〃	Ⅳ		○	15.0×22.0	－	28.7	14.0	－	肩部に浅い沈線が2本巡る。		

第12表　6号墓　出土遺物一覧

遺物＼地点	沖縄産陶器 蔵骨器 ⅠB 蓋	ⅠB 身	Ⅲ 蓋	Ⅲ 身	Ⅳ 蓋	Ⅳ 身	施釉陶器 碗	瓶	不明	焼き締め陶器 鉢	擂鉢	大型壺	小形壺	赤瓦	不明	軟質陶器 火炉	鍋	不明	磁器 本土産近代 小碗	小杯	不明	産地不明 小碗	染付碗	その他 鋏	櫛	薬瓶	計
墓庭										1	1	1	1		8			2		1				1	3	1	20
南西土手							8		5		4	1		1	16	1		5			1						42
墓周辺	2	4	1	1		1		1				1			14	1	1	1	1			1	1				31
計	2	4	1	1		1	8	1	5	1	5	3	1	1	38	2	1	8	1	1	1	1	1	1	3	1	93

陶磁器は約80点の破片が採集され、そのうち８点を掲載した。

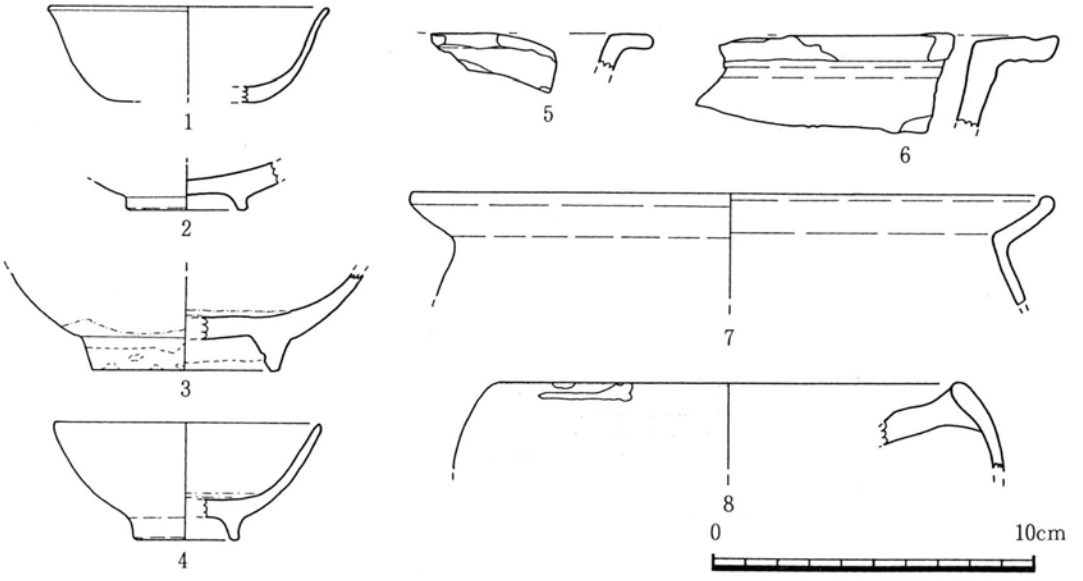
第19図１・２は白釉の磁器で、いずれも小碗とみられる。１は口縁部から腰部にかけての破片で、腰部は丸みを帯び、口縁部は外反する。全体に細かい貫入がはしる。２は底部資料で、畳付は露胎となっている。２については近代の本土産磁器と考えられる。

３～８は沖縄産陶器で、そのうちの３～５は施釉陶器である。３は鉄釉碗の底部で、釉薬は腰部まで施され、見込みには円形状に灰釉を施している。高台には白土が熔着している。

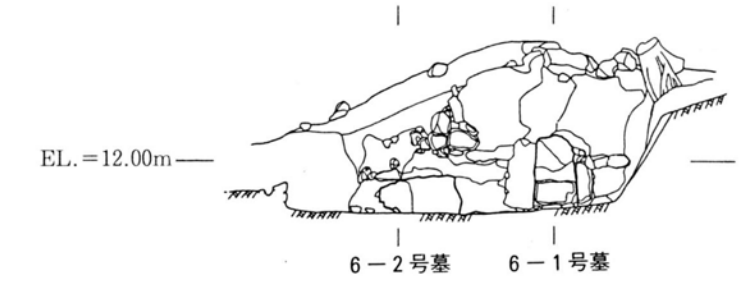
４は白化粧土＋透明釉の小碗である。高台脇から丸みを保ちながら口縁部へ移行する。口縁部は直口。畳付は露胎で、見込みは蛇の目状の釉剥ぎが行われている。５は鉢の口縁部資料で上部は外側へ屈折している。外面には鉄釉、内面には白化粧土＋透明釉を施す。

６は無釉焼き締め陶器である。鉢形の口縁部資料で上部はほぼ水平に折れる。口縁上面に一本の沈線がめぐる。

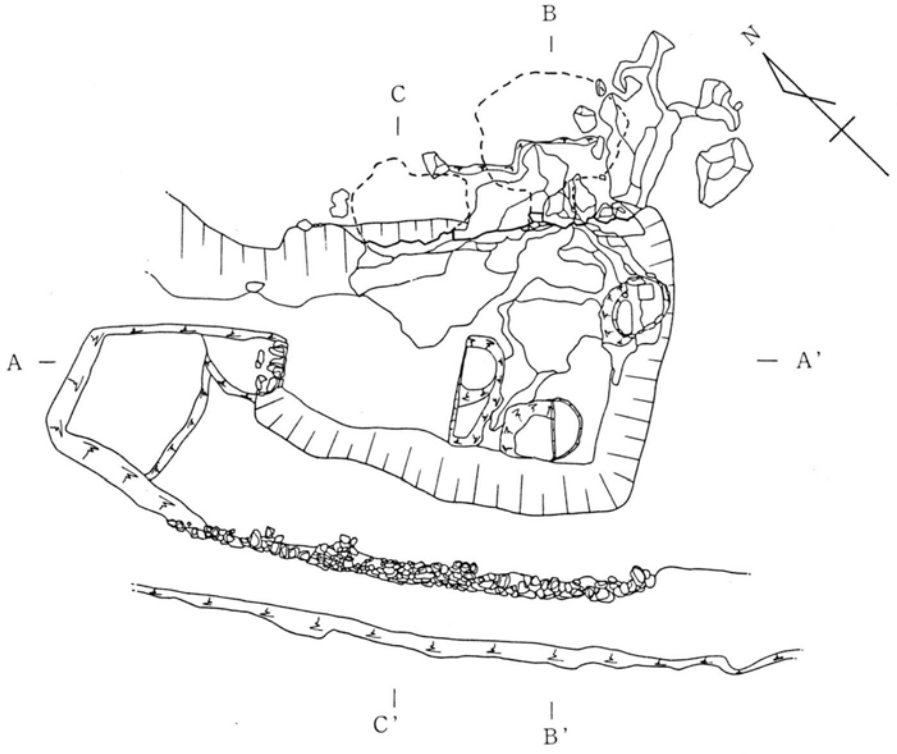
７・８は「アカムヌー」と呼ばれる軟質陶器である。７は鍋の口縁部で「く」の字形に屈折する。８は火炉の口縁部資料で、内湾器形をしめす。内側に三角形状の突起を有する。



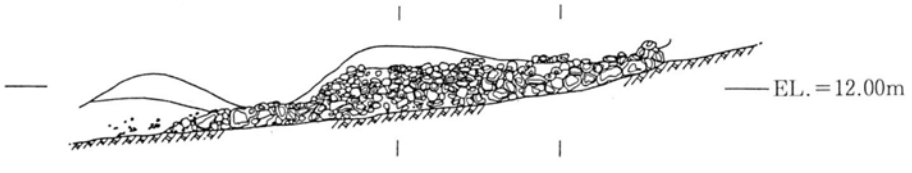
第19図　６号墓遺物（写真図版20－9～16）



〈正　面　図〉



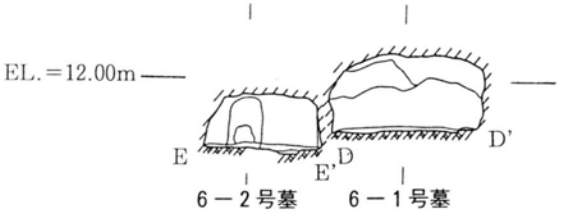
〈平　面　図〉



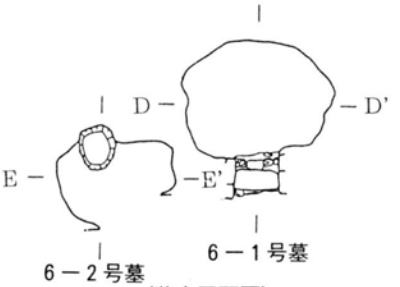
〈南西側石積正面図〉



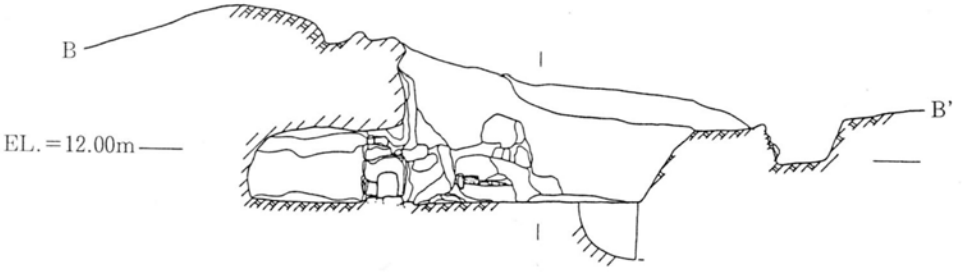
第20図　6号墓



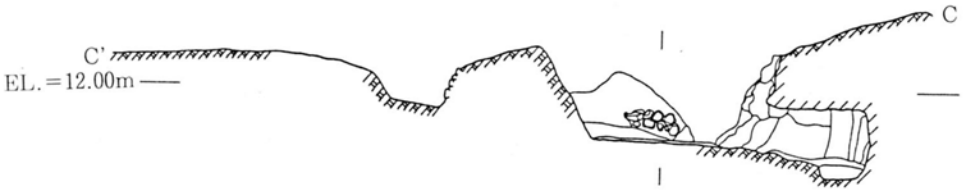
〈墓室正面図〉



〈墓室平面図〉



〈縦断面見通し図（6－1号墓）〉



〈縦断面見通し図（6－2号墓）〉



第21図　6号墓

(7) 6号墓庭における縦状小穴の調査メモ

大城逸朗（沖縄県立教育センター）

調査地の地質は、サンゴや貝化石を含む黄白色の砂質石灰岩からなる。岩層は固結した部分と未固結の部分が互層になり、層状構造が認められる。しかし、全体的に風化作用が進み、大変脆弱である。

6号墓庭の石灰岩小穴は、平面は円～楕円形を示し、深さは80㎝～1ｍで断面U字形をしている。U字形の底には水の吸い込み穴も認められ、侵食作用は進行中である。なお、小穴には土壌が厚く堆積している。

この小穴が人工か、自然のものかを判断するため周辺を含め調査を実施した。その結果、この一帯は石灰岩の風化面に赤土が堆積するという関係にあり、両層の境目は凹凸に富み不規則である。特に凹部になったところでは、穴の壁面は石灰岩が溶けてできるフローストーンによりおおわれてなめらかになり、人工的である。また、その中に埋積した土壌は細かい未固結の黄褐色の砂や赤褐色の粘土である。石灰岩との境目付近には10㎝程の厚さで黒い斑点状のものが含まれている。これは穴の壁に沿ってのびてきた木の根や層状マンガンなどである。このように石灰岩が溶けたあとの窪みに赤土が詰まった関係は、この一帯では普通に観察でき、穴の大きさも大きいもので直径数メートルである。大きい窪みは、石灰岩地域に特有のドリーネとよばれるものに相当する。つまり、石灰岩は水に溶食されやすく、長い間に凹凸地形ができる。これが平面から見た小穴であり、さらにこの小穴同志がつながり発達したものがドリーネである。

6号墓庭の小穴は、近くの別の地域で観察したものと形態的に類似し、自然にできた溶食穴に土壌が堆積したものである。細かい砂は、砂質の石灰岩に由来するものや赤土に含まれていたものである。穴の中に赤土を含む水がたまり、粘土粒子は溶脱し、残った細かいものが砂層として堆積したものと思われる。

以上のことから、6号墓庭の小穴は石灰岩地域に特有な侵食地形の一種のポットホールとよばれるもので、自然のものと結論する。



▲ 6号墓庭のポットホール（屋根上から撮影）



▲ 第二次調査地北側の地層断面
（U字形の凹部がポットホール）

第2節 第二次調査

(1) 7号墓

第二次調査地区で最も北側に位置する掘込墓である。比較的造りの丁寧な墓で、石積みの保存状況も良い。南側には8号墓が隣接している。

構　造

石灰岩の岩盤を断面L形に掘削したあと、横穴を穿って墓室を造り出している。墓室は面積が約6.3㎡で、平面形は長方形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、天井へ向かってしだいにせばまっている。天井は所々崩落し、凹凸がある。棚は正面に3段、左右に1段ずつ切石によって組まれている。下段の棚には赤く変色したところや、煤が付着している部分がみられる。

墓の正面石積みはあいかた積みによるが、墓口のみは四角形の切石を組んでいる。あいかた積みの上方には長方形の切石を水平に並べた庇が設けられ、これを境に上部には野面に近い粗雑な石積みが行われている。上部の石積みは屋根上の土の崩壊を防ぐための土留めであるとともに、正面からみた見栄えの良さを考慮したものであろう。あいかた積みの目地には小石や土が詰められ、漆喰が施されている。墓口の大きさは90cm×62cm。サンミデーにブロック形の切石が数個散乱していたことから、墓口の蓋石にはこれらを使用していたと考えられる。

隅石は右側のみにある。左側は岩盤が張り出し、隣接する8号墓との境となっている。

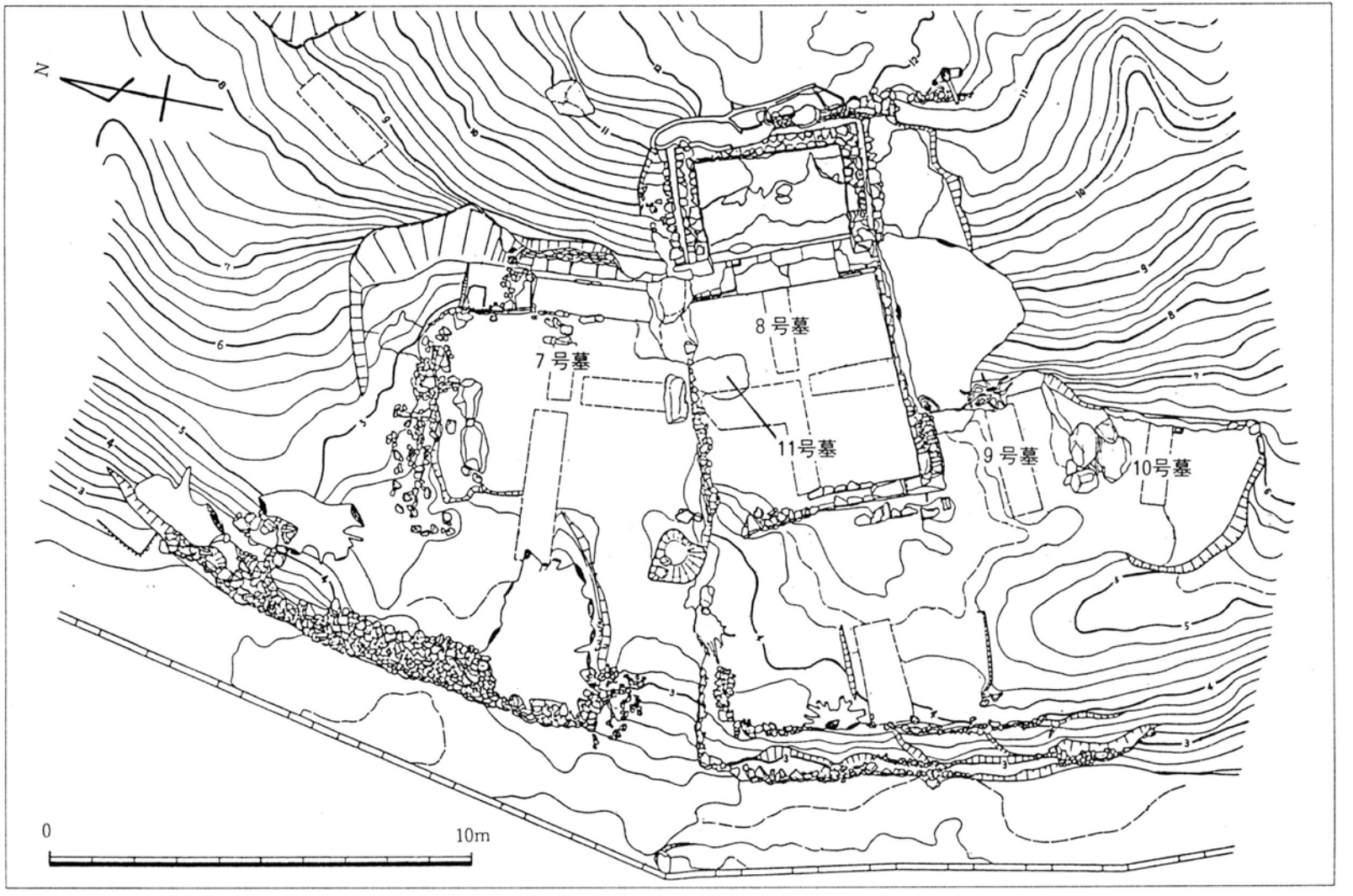
サンミデーは混礫土で造成し、縁石として石灰岩を並べて墓庭との境を造っている。

右隅石に隣接して小さな仮墓（仮墓1）が造られている。仮墓の屋根はコンクリート製の筒を縦に割ったものを転用しており、後に構築したものと考えられた。墓庭を囲む北側石垣にも赤土を掘り込んだ仮墓（仮墓2）がある。

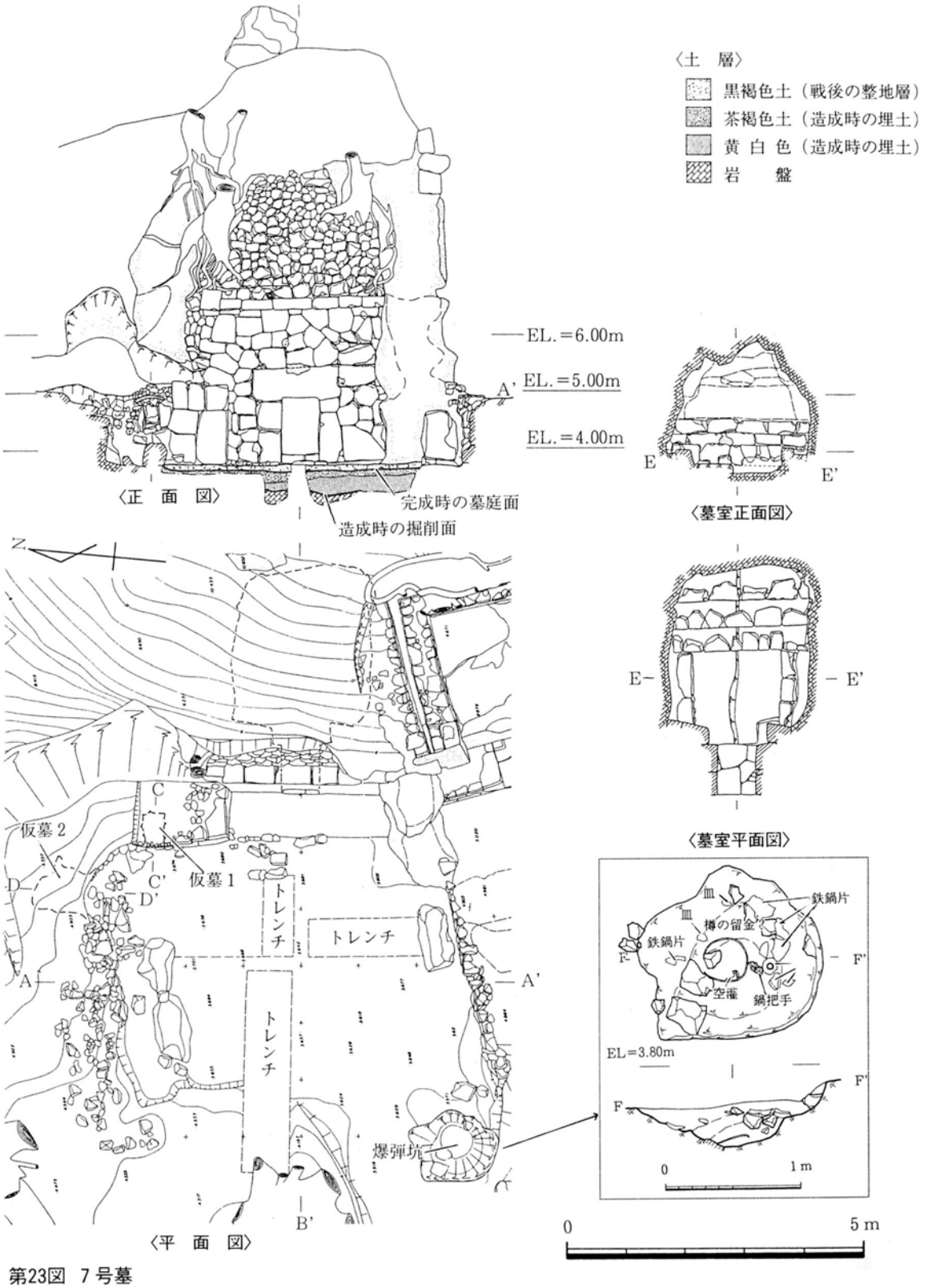
墓庭の造成状況をみると、墓庭部分は岩盤に至るまで掘削され、その後に土砂を入れて仕上げている。完成面の層は茶褐色混礫土で、同層直上から薬莢や銃弾が出土していることから同層面は戦時中まで使用されていた庭面と考えられる。茶褐色混礫土の上に黒褐色土が堆積しているが、出土遺物から戦後整地したものと考えられた。つまり、同層上面は戦後の墓庭面であると解される。

墓庭南西隅（墓の出入口付近）に直径1.2m前後、深さ約40cmの鍋底状のくぼみがあり、鉄鍋の破片や皿、炭等が出土した。墓庭から砲弾の破片とみられる金属片が出土していることや、隣接する8号墓の石積みが一部崩壊していることなどから、爆弾坑と推察された。出土遺物から、この爆弾坑を利用して一時的に調理を行っていたことが考えられた。戦後の墓庭整地の際、同時に埋められたのであろう。

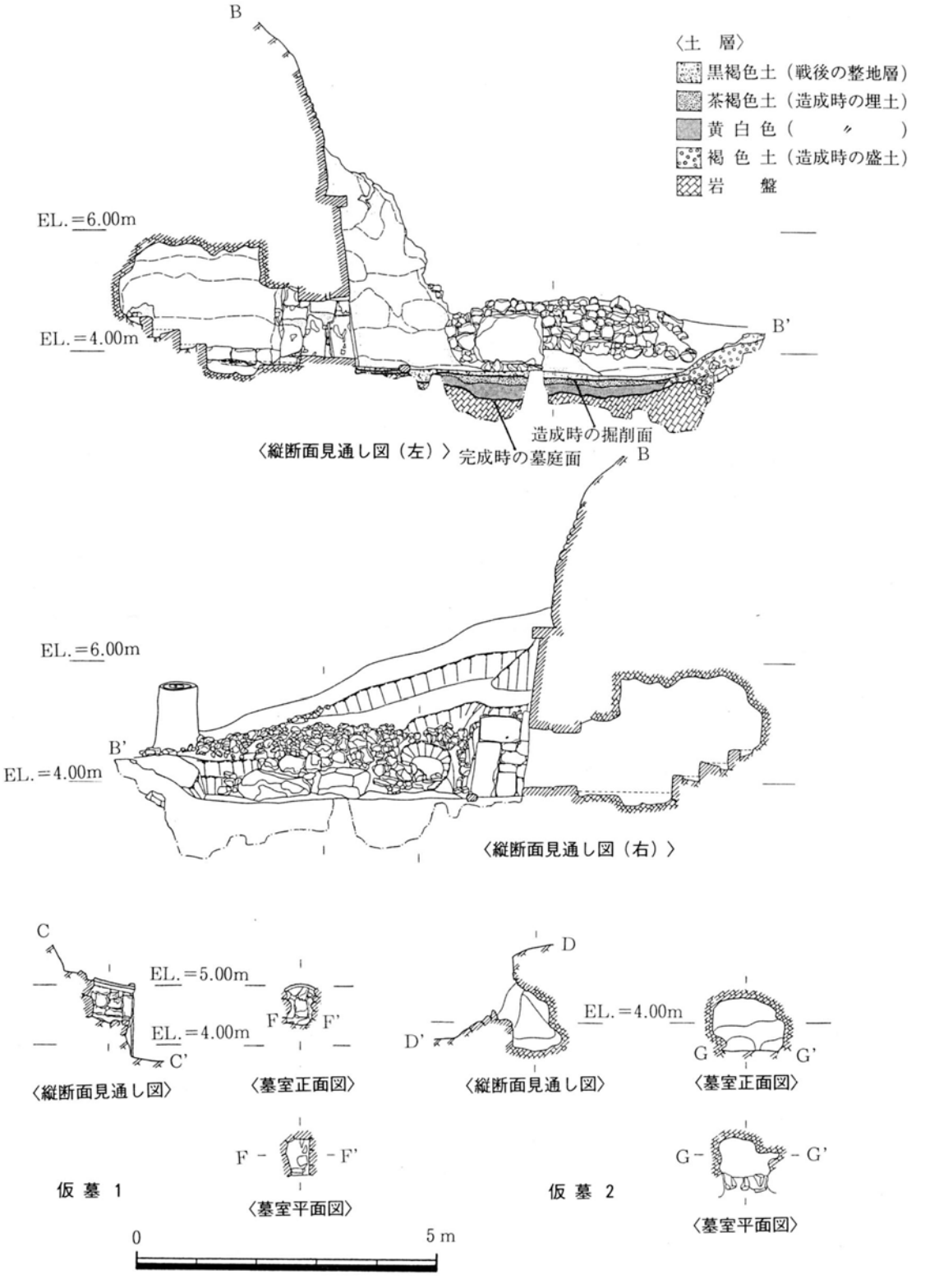
調査の終了間際に墓本体の北半分を断ち割り、正面石積みの断面観察を行った。石積みは垂直に削られた岩盤に合わせてほぼ垂直に積み上げられ、両者の間には裏込めとして拳大ほどの石灰岩礫が詰められていた。この状況からすると石積みの構築方法は、切石をある程度積んだあと、裏込め石を詰めるという作業の繰り返しによって仕上げられたと推察される。



第22図　7～11号墓全体平面図


〈土　層〉
黒褐色土（戦後の整地層）
茶褐色土（造成時の埋土）
黄 白 色（造成時の埋土）
岩　盤
EL.＝6.00m
EL.＝5.00m
EL.＝4.00m
A'
〈正　面　図〉
完成時の墓庭面
造成時の掘削面
E
E'
〈墓室正面図〉
〈墓室平面図〉
N
C
C'
仮墓 2
仮墓 1
D
D'
A
A'
B'
トレンチ
トレンチ
トレンチ
爆弾坑
〈平　面　図〉
鉄鍋片
鉄鍋片
樽の留金
空灌
鍋把手
F
F'
EL＝3.80m
0
1 m
0
5 m

第23図　7号墓


〈土　層〉
黒褐色土（戦後の整地層）
茶褐色土（造成時の埋土）
黄白色（　〃　）
褐色土（造成時の盛土）
岩　盤
B
B'
EL.＝6.00m
EL.＝4.00m
造成時の掘削面
完成時の墓庭面
〈縦断面見通し図（左）〉
〈縦断面見通し図（右）〉
C
C'
EL.＝5.00m
EL.＝4.00m
F
F'
〈縦断面見通し図〉
〈墓室正面図〉
D
D'
G
G'
仮　墓　1
仮　墓　2
〈墓室平面図〉
0
5 m

第24図　7号墓

遺　物

遺物は墓室内、墓庭、南西部盛土から出土した。出土遺物の一覧を第13表に示し、そのうち10点を図示した。なお、南西部盛土からは蔵骨器の資料も出土したが、小破片のため、記述を割愛した。また、爆弾坑とみられる墓庭の小穴から出土した資料は一括して写真（写真図版26）のみで紹介した。

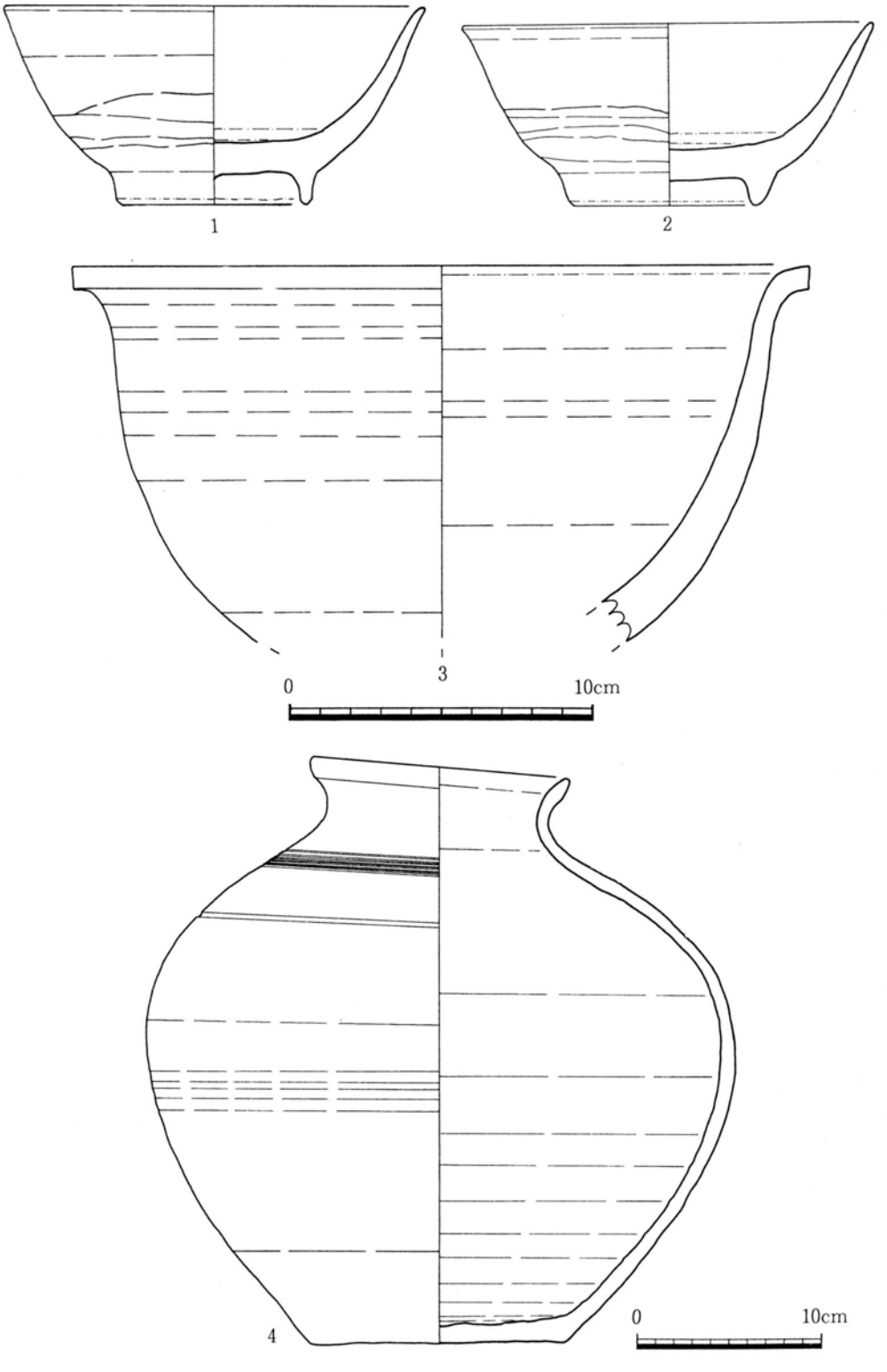
第13表　7号墓出土遺物一覧

遺物＼地点	沖縄産陶器						本土産近代磁器					その他										計
	蔵骨器 ＩＢ		施釉陶器		き締め無釉焼		碗	皿	茶碗	急須	小型容器	石製香炉	金属キセル	ガラス瓶	板状鉄片	管状鉄片	鉄製鍋	ジュラルミン片	空缶	モルタル塊	丸釘	
	蓋	身	碗	鉢	壺	不明																
墓室							1			2	5		2		2							12
墓庭			2	1		1	1		2			1		1	2							11
サンミデーの隅					1																	1
南西部盛土	1	1		1	1			1	1													6
墓庭爆弾坑								4							8	4	1	7	1	1	2	28
計	1	1	2	2	2	1	2	5	3	2	5	1	2	1	12	4	1	7	1	1	2	58

第25図１・２は施釉陶器の碗で、高台から腰部にかけてゆるやかに立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。胴下半部にはヘラケズリがみられる。内外面とも素地に白化粧土を施し、その上から透明釉を掛けている。畳付は露胎で、見込みは蛇ノ目状に釉剥ぎを行っている。１は口径13.8cm、底径6.2cm、器高6.6cmで、墓庭４区から、２は口径13.4cm、底径6.4cm、器高6.0cmで、墓庭の中央よりやや南東側から出土した。いずれも戦後の整地層（暗褐色混礫土）から出土。

３は施釉陶器の鉢である。腰部から丸みを保ちながら口縁部へ移行する。口縁上部は外側へ折り曲げている。器面全体的に水挽きの痕が残っている。外面は鉄釉が施され、内面は素地に白化粧を施した後に透明釉を掛けている。口縁上面は釉を剥ぎ取っている。推定口径24.4cm。墓庭の南側、戦後の整地層から出土した。

４は無釉焼き締め陶器の壺である。口縁部は外反し、頚部でくびれて胴部に移行している。水挽き成形後、器面は回転よこなでによって仕上げられるが、内面はなでが徹底せず、水挽きの痕が明瞭に残っている。外面立ち上がり部はヘラケズリが行われている。頚部近くに６条の凹線、肩部に１条の凹線が巡っている。口径14.4cm、胴径32.5cm、底径14.2cm、器高31.5cm。隅石の横から採取した。



第25図　7号墓遺物（写真図版25－1～4）

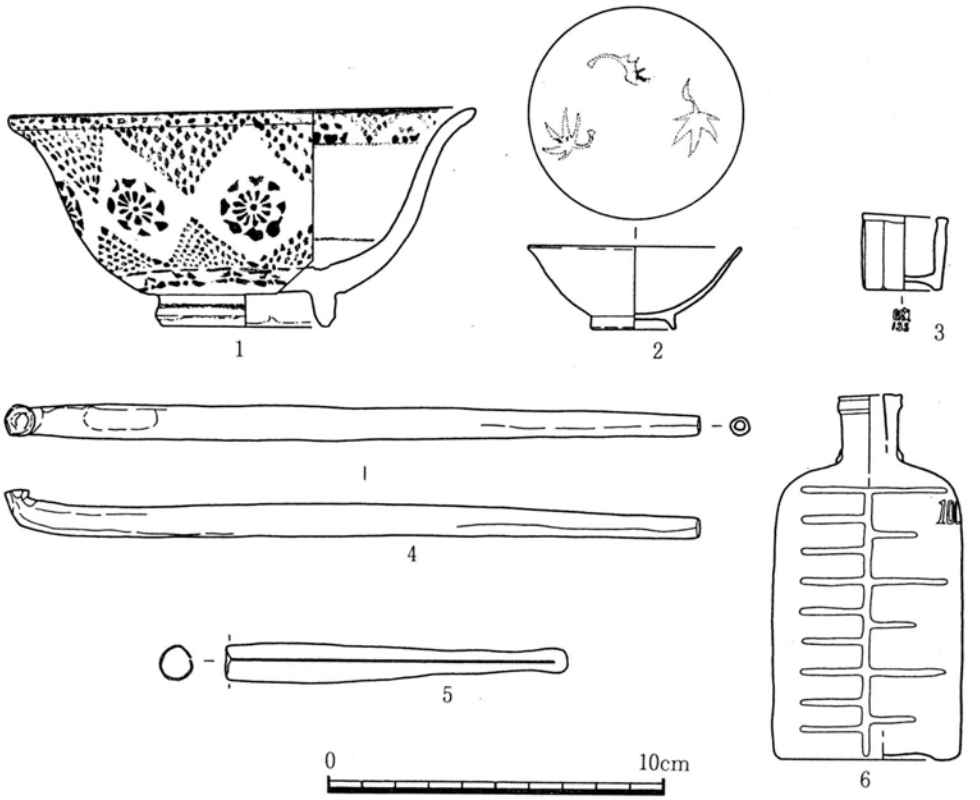
第26図１～３は本土産の近代磁器である。１は型紙刷りの碗で沖縄ではスンカンマカイと呼ばれている。腰部から丸みをもって立ち上がり、口縁は外反する。口径14.1cm、底径5.0cm、器高6.5cm。２は杯で、素地に透明釉を掛け、その上から赤い顔料でカエデの葉を描いている。口径6.4cm、底径3.0cm、器高2.8cm。墓庭中央部、戦後の整地層から出土した。３は外側面が六面体の小型磁器製容器で、５点出土した。外底には「岐」とみられる文字と「155」の数字が浮彫されており、型成形と考えられる。白色を呈する。５点の容器の中にはそれぞれ赤・茶・緑・青・桃色の顔料（絵の具？）が入っていた。すべて墓室内から採取したが、おそらく戦時中に避難壕として使用されていた際に持ち込まれたものだろう。口径2.6cm、底径2.4cm、器高2.2cm。

４は金属製のキセルで、単管から作られている。火皿の首部は若干湾曲しており、そこからまっすぐのびる。長さ20.8cm、重量48g。

５はキセルの吸い口で、薄い金属板を巻いて作られている。長さ10.2cm、重量13g。

６はガラス製の瓶で、表面には目盛りがある。前記２とほぼ同じ場所、戦後の整地層から出土した。

写真図版26－１は石製香炉である。石灰岩をブロック形に加工し、上面中央部を彫りくぼめている。長辺約33cm、短辺約17cm、高さ約19cm。サンミデーと墓庭の境から出土した。



第26図　７号墓遺物（写真図版25－5～10）

(2) 8号墓

今回調査した墓の中で最も大きく、造りの丁寧な平葺墓である。保存状況は良好。北側に7号墓、南側には9号墓が隣接し、本墓と7号墓とは1mほどの高低差がある。

構　造

墓室の平面形は長方形で、正面に3段、左右に各1段の棚がある。正面棚には構築時のものと考えられる墨壺の黒線や、鑿によるはつり痕などがみられる。墓室の床面積は約6.7㎡。

墓の正面石積みは布積みによる。墓口のサイズは84cm×62cmで、蓋石は石灰岩を薄く板状に加工したものである。香炉も石灰岩製で、蓋石の支えも兼ねている。

屋根は岩盤を墓庭側へ斜めに削り、周囲には切石を巡らせて溝を設けている。屋根の奥には面取りされた石灰岩が積み上げられている。これは前記7号墓にもみられる石積みで、土留めとしての役割のほか、正面からの見栄えも兼ねたものと考えられた。

隅石は左右に造られ、あいかたに組む。サンミデーは切石によるもので、墓に向かって右隅には紙銭を燃やす場所が四角形に掘り込まれている。

墓庭の造成は7号墓と同じように岩盤まで掘削し、後に石灰岩粉砕土や赤色土などを入れて仕上げている。

墓庭を囲む石垣についてみると、右側石垣（北側）は荒加工の石灰岩が使用されており、隣接の7号墓庭から積み上げられ、7号墓と共有したかたちになっている。一方、左石垣（南側）は丁寧に面調整された切石を積んでおり、9号墓との境を造っている。墓庭の出入口には切石の階段が二段設けられている。

遺　物

蔵骨器1点、本土産近代磁器5点（碗3点、小皿1点、鉢1点）、沖縄産陶器1点のほか、砲弾片とみられる鉄片7点を採取した。

写真図版29－1は墓庭から採取した家型陶製厨子甕で、素地に白化粧を施し、その上から青色釉や緑色釉で文様を書き、透明釉を掛ける。正面には屋門や蓮華の花文を、左右側面には蓮華の花および葉、法師像が貼り付けられている。サイズは口縁部の長辺47.5cm、短辺35.5cm、底部は長辺39.0cm、短辺27.0cm、器高43.5cm。口縁上面には下記の銘書がみられた。なお、本資料は、銘書から後述の8号墓前の墓道表採資料（写真図版33－5）の蓋と一対になることが明らかになった。

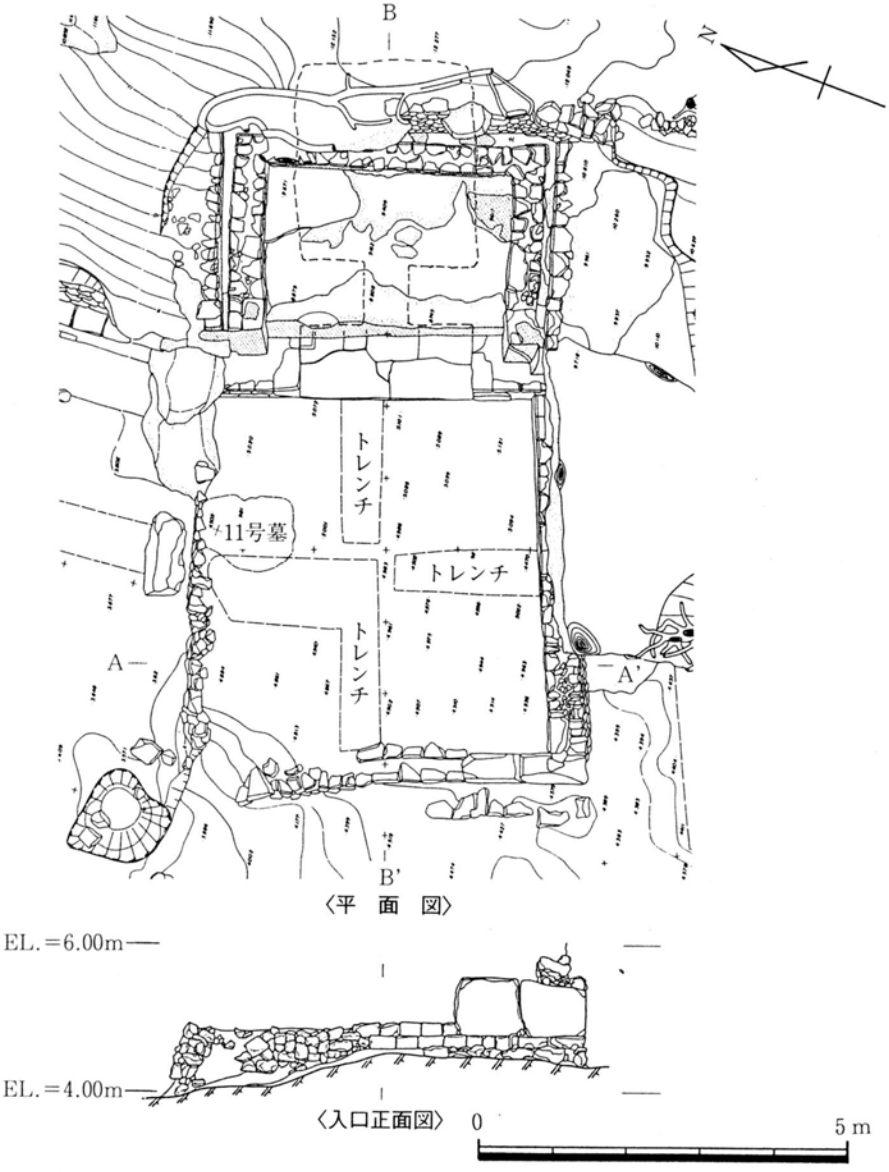
「一□　明治三十二年十一月一日死亡○三十八年十一月十二日洗骨當間加那　○人三女ウシ七□○□真カ歳六□　六女マカ小　上新屋ヨリ分家□」。

第27図1・2は前記した7号墓出土（第26図1）と同様型紙刷りの碗で文様構成が異なるものである。1は推定口径13.6cm、推定底径4.4cm、器高6.0cm。2は推定口径12.4cm。

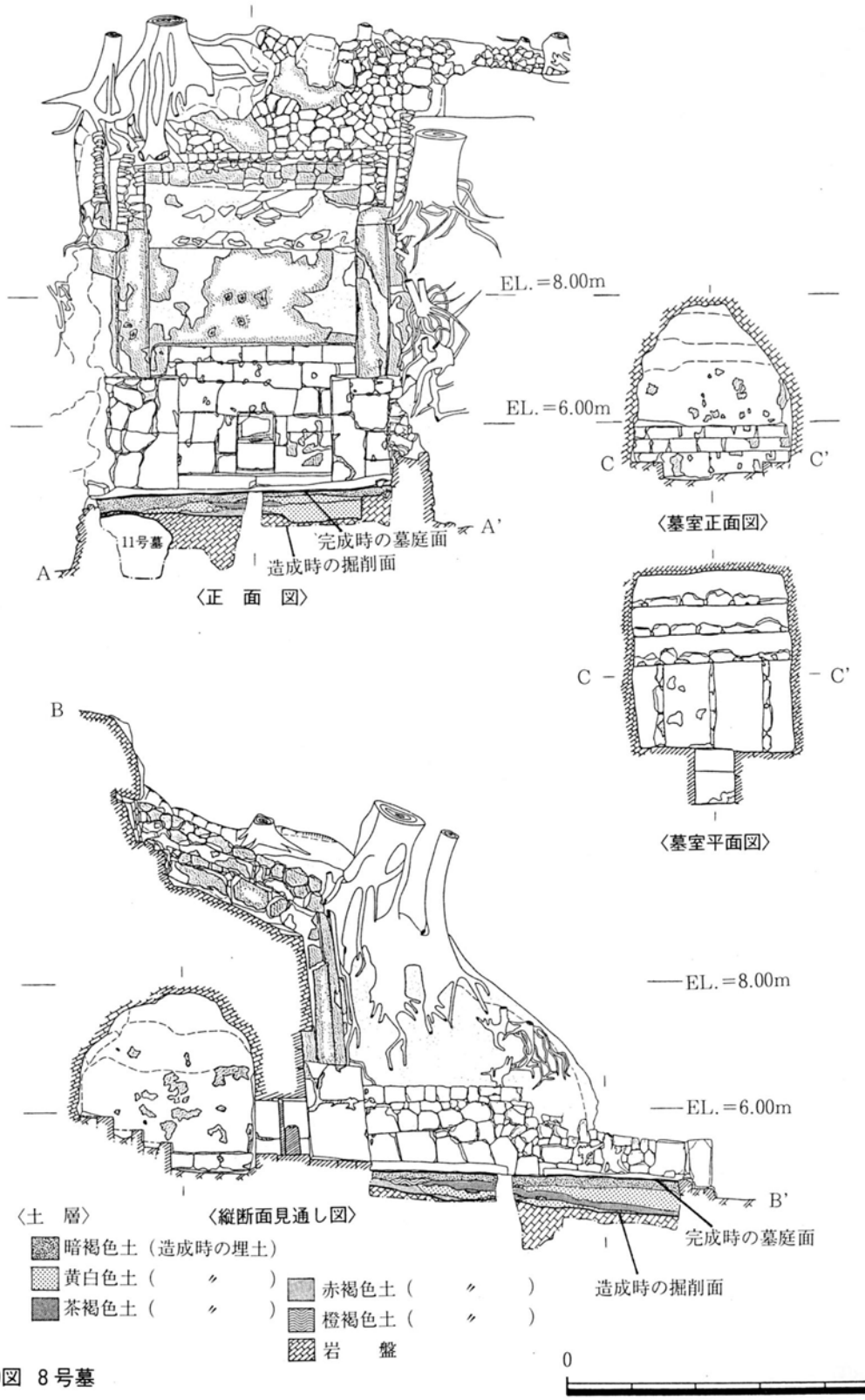
3は鉢とみられる破片で、内面に模様がみられるが、破損しているため模様種は不明。以上、1～3は墓庭から採取。



第27図　8号墓出土遺物（写真図版29—2～4）



第28図　8号墓


EL.＝8.00m
EL.＝6.00m
A
A'
11号墓
完成時の墓庭面
造成時の掘削面
〈正　面　図〉
C
C'
〈墓室正面図〉
〈墓室平面図〉
B
B'
EL.＝8.00m
EL.＝6.00m
〈縦断面見通し図〉
〈土　層〉
暗褐色土（造成時の埋土）
黄白色土（　〃　）
茶褐色土（　〃　）
赤褐色土（　〃　）
橙褐色土（　〃　）
岩　盤
完成時の墓庭面
造成時の掘削面
0
5 m

第29図　8号墓

(3) 9号墓

7、8号墓と比較すると造りの粗雑な掘り込み墓である。北側に8号墓、南側には10号墓が隣接する。

構　造

墓室の平面形は楕円形を呈し、壁面はほぼ垂直に立ちあがる。棚は岩盤を削り出したもので、1段造られている。左右、正面一連となっており、平面形は「コ」形状を呈している。墓室の幅は280cm、奥行き220cmで、床面積は約4.9m²。

墓の正面に石積みが認められるのは墓口周囲のみで、他は自然の岩盤が露出したままである。墓口の大きさは96cm×52cm。蓋石は石灰岩の切石を数個組み合わせたものと考えられる。墓庭の右（北）側石積みは、北接する8号墓庭南石積みの裏面にあたり、一つの石垣が表裏面で8号、9号の二つの墓の庭囲いとなっている。一方、南側には大きな石灰岩が置かれ、10号墓との境としている。

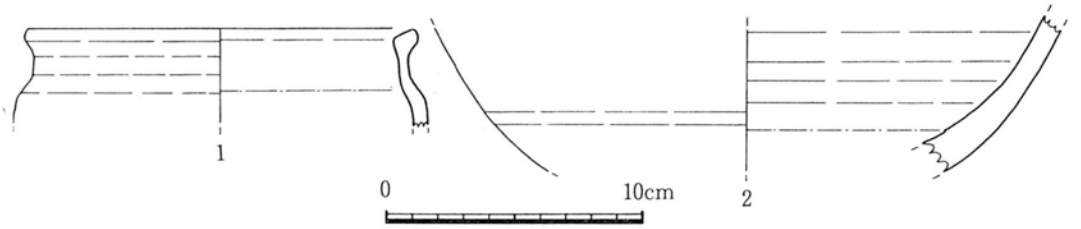
墓庭の造成についてみると、墓造営の際、岩盤まで掘削し、のちに土砂を入れて墓庭を仕上げている。完成面の層は橙色混礫土で、同層上位には薬莢や銃弾、厨子甕片、磁器片を含む茶褐色混礫土が堆積していた。出土遺物から同層は戦後整地したものと考えられた。なお、墓庭の発掘で、8号墓との堺をつくる石積みの根石を露出させたところ、根石は9号墓庭造成土の上位であったことから、9号墓は8号墓以前に造られた墓であることが判明した。

遺　物

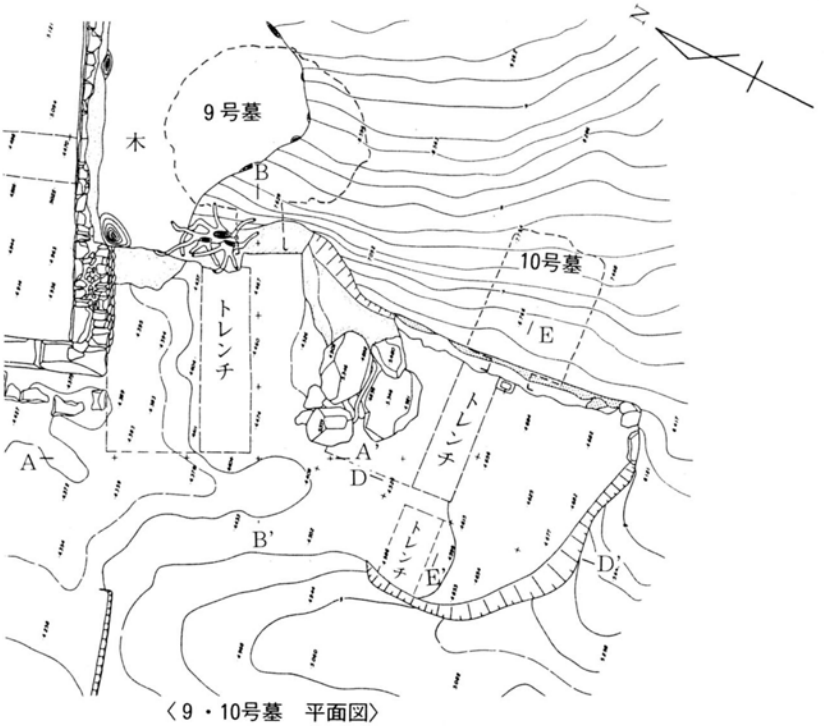
墓庭から陶製香炉1点、施釉陶製鉢1点、本土産近代磁器茶碗1点、マンガン掛け厨子甕底部破片1点、同胴部片11点のほか、弾丸や鉄片など6点が出土した。そのうち香炉と鉢の2点を図化した。

第30図1は陶製香炉の口縁部小片である。頚部はわずかにしまり、口縁上面は内側へ傾いている。器面には回転ヨコナデが認められる。口縁内面から外面にかけて紺色の塗料が塗られている。推定口径15.0cm。墓庭表土層出土。

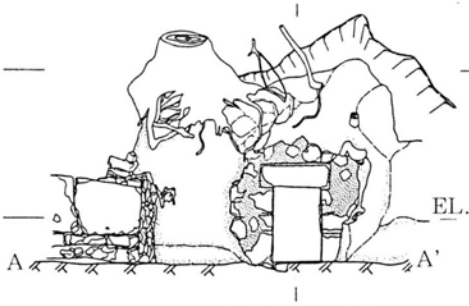
2は鉢とみられる腰部資料である。釉薬は内外面で異なっており、外面には鉄釉、内面は白化粧を施した後に透明釉を掛けている。内面見込みにおいては釉剥ぎが行われている。墓庭表採。



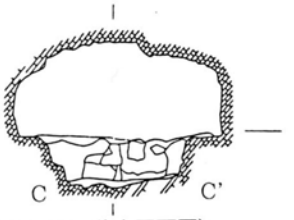
第30図　9号墓遺物（写真図版30—1・2）



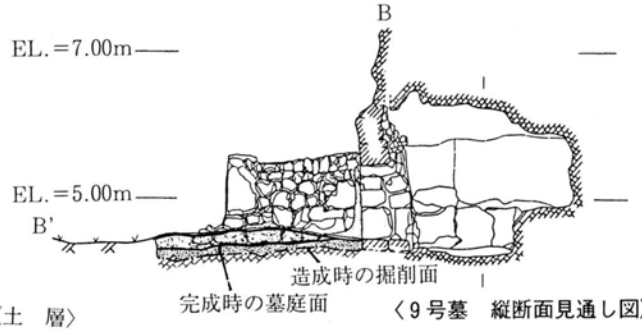
〈9・10号墓　平面図〉



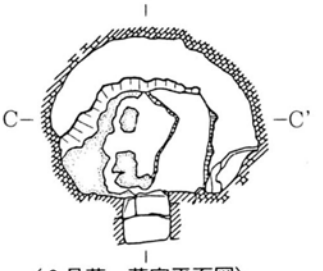
〈9号墓　正面図〉



〈9号墓　墓室正面図〉



〈9号墓　縦断面見通し図〉



〈9号墓　墓室平面図〉

〈土　層〉
茶褐色土（戦後の整地層）
橙褐色土（造成時の埋土）
岩　盤

0　5 m

第31図　9号墓

(4) 10号墓

9号墓に南接する規模の小さい掘込墓で、今回の発掘地区では最も南に位置する。聞き取りから、戦後まもなくして造られた墓であることが確認された。

構　造

墓室は他の墓と同様、石灰岩の岩盤を掘り込んで造られる。墓室奥壁は岩盤のままであるが、左右の側壁についてはブロック積みで仕上げている。墓室の平面形は長方形を呈し、棚は正面に1段設けられている。棚も側壁同様、ブロック造り。天井は波形トタンでアーチ形に仕上げている。墓室の大きさは幅が約1.4m、奥行き約1.9mで、面積約2.5㎡。

墓口も墓室内と同じブロック積みで、その直上には人頭大の石灰岩が2段積まれている。石灰岩の目地には漆喰を施している。墓口の蓋石は一枚の薄いコンクリートで、墓口にはブロックを利用した香炉が設置されている。

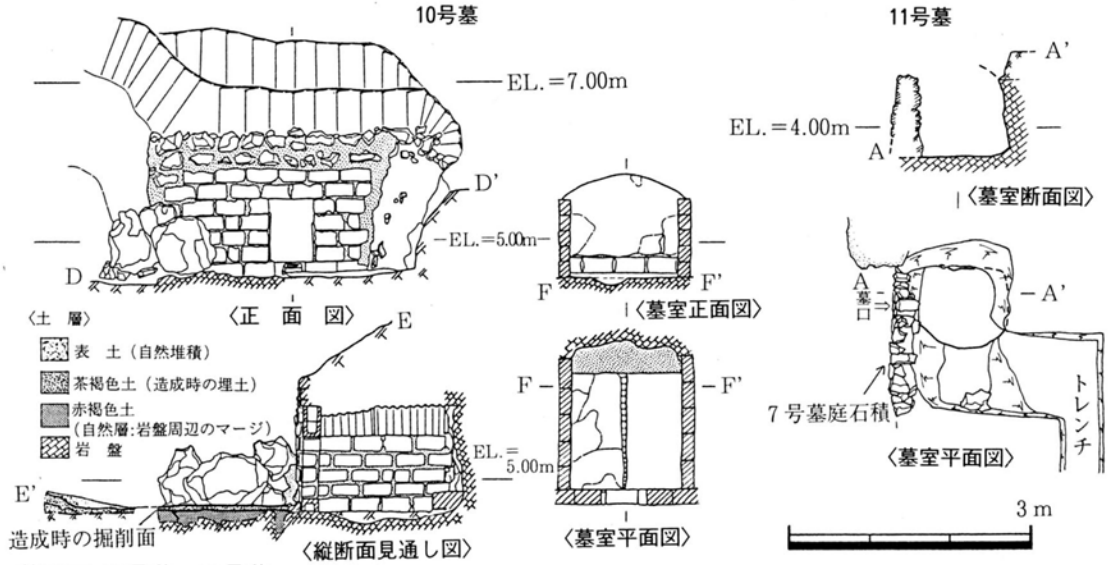
遺物は器種不明の焼き締め陶器胴部片を1点採取したが、小破片のため記述を省略した。

(5) 11号墓

8号墓庭の断ち割り中に新たに見つかった墓である。8号墓庭の北端に位置し、断ち割りによって墓室を半壊する形となった。

掘り込み式の墓で、墓口は7号墓庭側から開けられている。床面は平坦に整えられ、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。発見時には墓室内に拳～人頭大の石灰岩礫が満杯に詰め込まれていた。おそらく8号墓造成の際に墓庭が陥没したため、石灰岩礫を詰め込んだのであろう。墓室の床面積は推定1㎡前後とみられ、小規模の墓だったと考えられた。遺物はみられなかった。

7号墓では前記したように墓庭の北側石垣の下方で仮墓（仮墓2）が造られているが、本墓は規模や形がこれに類似しており、それからすると本墓も7号墓の仮墓の可能性も考えられる。



第32図 10号墓・11号墓

(6) 墓道表採資料

ここで扱う資料は8号墓前の墓道から採集したものである。採集品は陶磁器が中心で、これらは使用時に破損して捨てられたか、あるいは墓移転の際に遺棄されたものと考えられる。採集した個々の遺物が7号～11号墓のどの墓に所属するものか判別が困難な資料もあるため、ここで一括した。採集品には陶磁器のほか、ガラスコップや鉄片などもみられたが、今回は陶磁器についてのみ概略を記す。

陶磁器は本土産磁器と沖縄産陶器にわけられる。

本土産磁器は近代～現代に属するもので、碗（3点）、小皿（1点）、茶碗（19点）、花瓶（1点）の4種である。沖縄産陶器は花瓶と香炉がそれぞれ2点のほか、蔵骨器の破片が得られた。蔵骨器は全形のうかがえるものが蓋（3点）、身（2点）で、その他小片が蓋（3点）、身（12点）である。

写真図版33－1～4はマンガン掛け甕型厨子甕である。

1・2は蓋の資料で、2点とも平坦な頂部からゆるやかな曲線を描きながら鍔へ移行する。頂部のつまみについてみると、1は宝珠に近い形状を示しているが、2はやや丸みを帯びている。1はつまみの下位に段を有し、台座をつくりだしている。2点とも外面上部ではヘラケズリが行われている。

3・4は身の資料である。3は底部から肩部までほぼ直線的に立ち上がる器形で、最大径は肩部にある。頸部は屈折し、ほぼ直立の口縁部がつく。4は胴部が微弱に張るが、全体としてはスマートである。頸部はゆるやかなカーブを描き、口縁部は外反する。口縁上端は内側へ張り出すため、断面は「T」字に近い形状となっている。器面は回転ヨコナデが主体となるが、外面下端部ではヘラケズリも認められる。

5は家型陶製厨子甕の蓋で、屋根を象っている。器形や装飾の特徴、銘書などから8号墓庭で採集された家型陶製厨子甕の身（写真図版29－1）と対になる資料と判明した。

6は円筒形の厨子甕で、近年の火葬用骨壺である。濃紺色の塗料が塗られている。蓋は円盤状で、つまみはついていない。

第14表 墓道（８号墓前）採取蔵骨器観察表

図版番号	蔵骨器 分類	蓋	身	サイズ（cm） a	a'	b	c	c'	文様	銘書	銘書西暦
33－1	ⅠB	○		28.9	－	14.7	－	－		〈内面〉 〔　〕十年旧十月四日洗 □ □ 正八年旧七月廿四日洗骨 當〔　〕 当間加那次男亀 洗骨 旧十月四 □ 嘉 □ 長男 〔　〕	
－2	ⅠB	○		21.5	－	10.5	－	－		〈内面〉 〔　〕年旧 〔　〕月 □ 四日 〔　〕那	
－3	ⅠB		○	25.8	－	49.4	20.2	－	胴中央部に屋門、その左右に蓮華と法師立像を配する。蓮華文の茎のみ沈線で描き、他は貼り付けによる浮文。肩部および口縁外面には沈線波状文を描く。胴下部には3本の沈線を巡らしている。		
－4	ⅠB		○	27.8	－	54.2	19.2	－	胴中央部に屋門を貼付し、その左右に蓮華文を線描きする。肩部にも蓮華文を描くが簡略化している。胴下部には凹線と沈線波状文を巡らしている。		
－5	ⅡB	○		51.0	38.0	42.0	－	－	屋根の大棟左右のシャチホコをはじめ、獅子頭などで装飾を行い、呉須や鉄釉で着色する。4面とも瓦や垂木も表現している。	〈下面縁辺＝身との合わせ面〉 明治三十二年十一月一日死亡同卅八年十一月十二日洗骨当間加那 一世　上新屋ヨリ分家ス同人三女ウシ七歳同五女　真カ歳六ツ 昭和七年旧三月十九日洗骨 加那ノ妻カミ 大正十年旧十月四日死亡 □	1899年 1905年 1932年 1921年
－6	Ⅲ	○		17.8	－	2.5	－	－	外面に蓮華の簡略化した文様を施す。花は貼り付けによるが、茎は緑色の塗料で描いている。花は金・銀で着色する。	〈内面〉 昭和五十年二月二十五日 当間ウシ 享年八十六歳	1975年
			○	16.3	－	25.7	16.0	－	胴中央部に屋門を貼付し、その左右に線描きの蓮華文を施す。蓮華文は金・銀・緑の塗料で着色する。胴上部には横位凸帯を貼り付け、口縁外面に円粒を巡らす。	〈屋門内部〉 □ 当間ウシ	

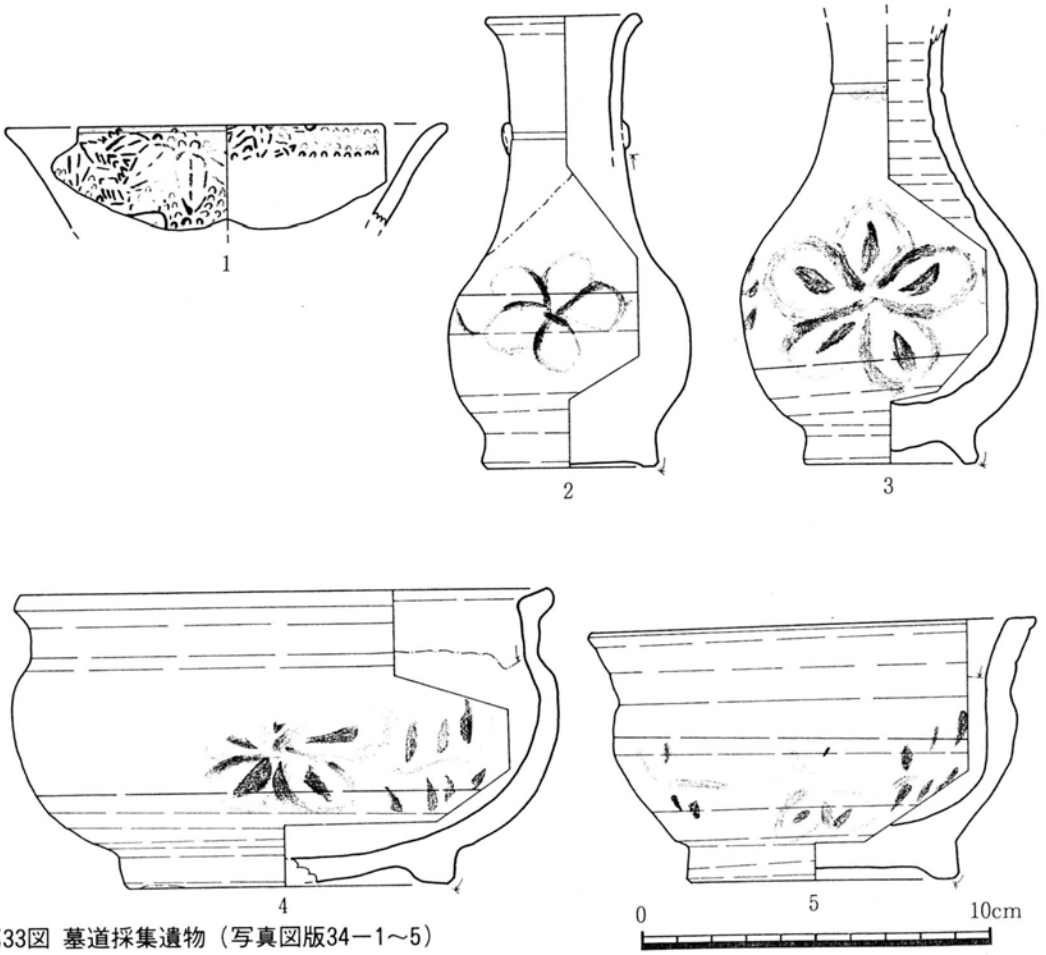
墓道から採取した陶磁器のうち、本土産磁器１点と沖縄産陶器４点を第33図に示した。

同図１は型紙刷りの碗で、外面および内面上部に笹の葉の文様が施されている。文様は紺色で発色は良い。

２～５は沖縄産陶器で、無釉の陶器に紺ないし黒色の塗料を施したあと、金色や銀色の塗料で花文様を描いている。

２・３は花瓶である。２は頚下部から高台にかけて黒色塗料を施す。胴部には銀色の花文様が描かれ、頚部には径８mmの円盤状の粘土粒が左右に一対張り付けられている。３は紺色の塗料を施すもので、胴部には花文様、頚部には横線が描かれている。花文様は銀と金の二色の組合せになっている。いずれも長頚で、丸く膨らんだ胴部に最大径がある。胴下半部には回転ヘラケズリが認められる。

４・５は香炉で、４は濃紺色、５は紺色の塗料が施される。４・５とも高台外面から口縁内面までを塗布対象としている。いずれも胴部には銀色および金色の塗料で花文様が描かれている。胴下半部は回転ヘラケズリ、他は回転ヨコナデによって器面調整している。



第33図 墓道採集遺物（写真図版34－1～5）

(7) 墓道石積み

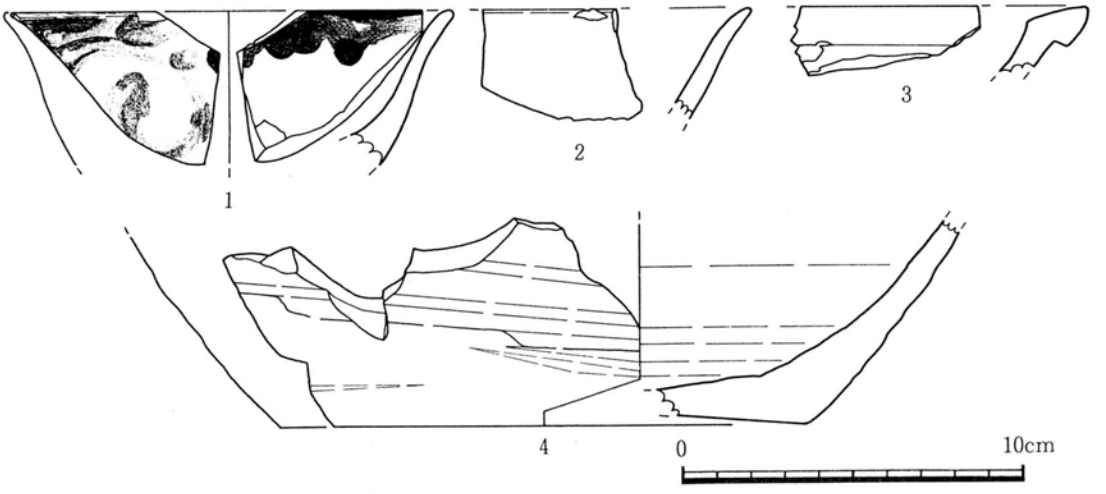
7号墓～10号墓の前面部（西側）に墓道が設けられている。その擁壁は野面積みの石垣で、ゆるやかな曲線を描きながら約25mにわたって構築されている。石垣の内側は墓庭と同様、茶褐色の混礫土や石灰岩の粉砕土などによって造成が行われており、その土留めとして石垣が構築されたと考えられる。石垣のすぐ外は、かつての道が石垣に沿って南北に走っており、この石垣によって墓地と外とが仕切られたかたちになっている。墓道は7号墓の前から入る。7号墓と外道とは2m弱の高低差があるため、進入部は外道から上り斜面となっている。同斜面部は3cm～5cmの小礫が敷きつめられ、この中から厨子甕の蓋や陶器の破片が出土している。進入部の南側の擁壁石積みは北側とは異なり、上下二段の構造となっている。上段の石積みは下段のものから60cmほど内側（北側）に積まれ、断面でみると階段状を呈している。北側の石積みに比べると崩壊が進み保存状態は悪い。

遺物は前記の墓道進入部から出土した。すべて沖縄産で、内訳は蔵骨器（蓋1点、胴部小片2点）、施釉陶器2点（碗1点、鉢1点）、無釉焼き締め（鉢2点、不明1点）、軟質陶器（不明2点）である。これらの中から5点を紹介した。

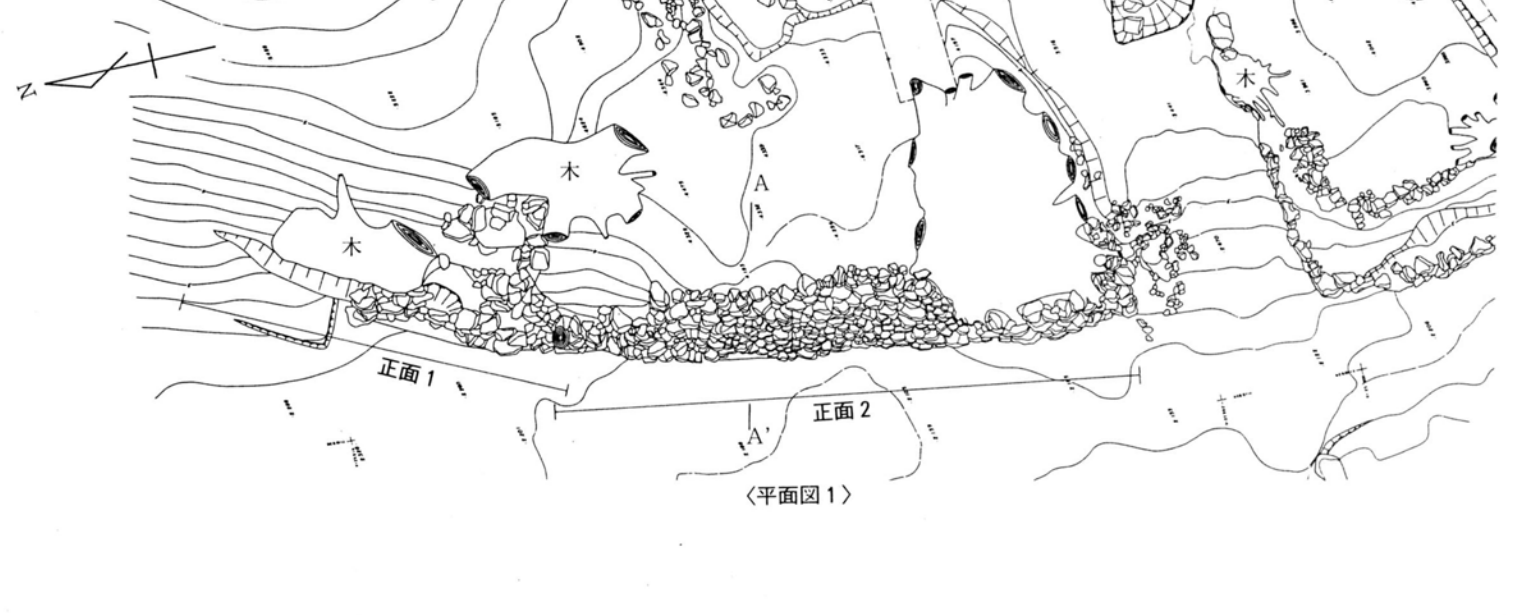
写真図版34－6はマンガン掛け甕型厨子甕の蓋で、鍔の直径が19.0cm、高さが10.0cmの小型資料である。頂部は平坦で段を有し、中央に宝珠状のつまみがつく。器面は主にナデ調整で仕上げているが、外面上部ではヘラケズリが行われている。銘書はみられない。

第34図1・2は沖縄産施釉陶器の碗である。いずれも口縁部の破片資料で、白化粧土のあと透明釉を施すものである。1の場合は外面および口縁内面に草とみられる文様が描かれているが、文様種は不明。文様の発色は濃紺。

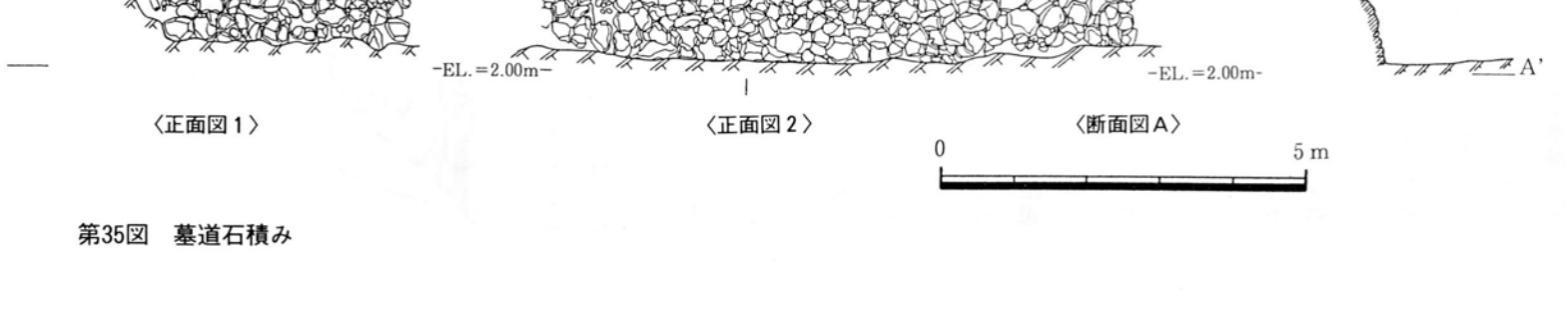
同図3・4は沖縄産無釉焼き締め陶器の破片である。3は摺鉢とみられる口縁部資料で、上端は外側へ屈折させる。4は鉢の底部資料である。内外面に水挽きによる凹凸が顕著にみられ、外面立ち上がりや底面にはヘラケズリも観察される。



第34図 墓道進入部採取遺物（写真図版34－7～10）

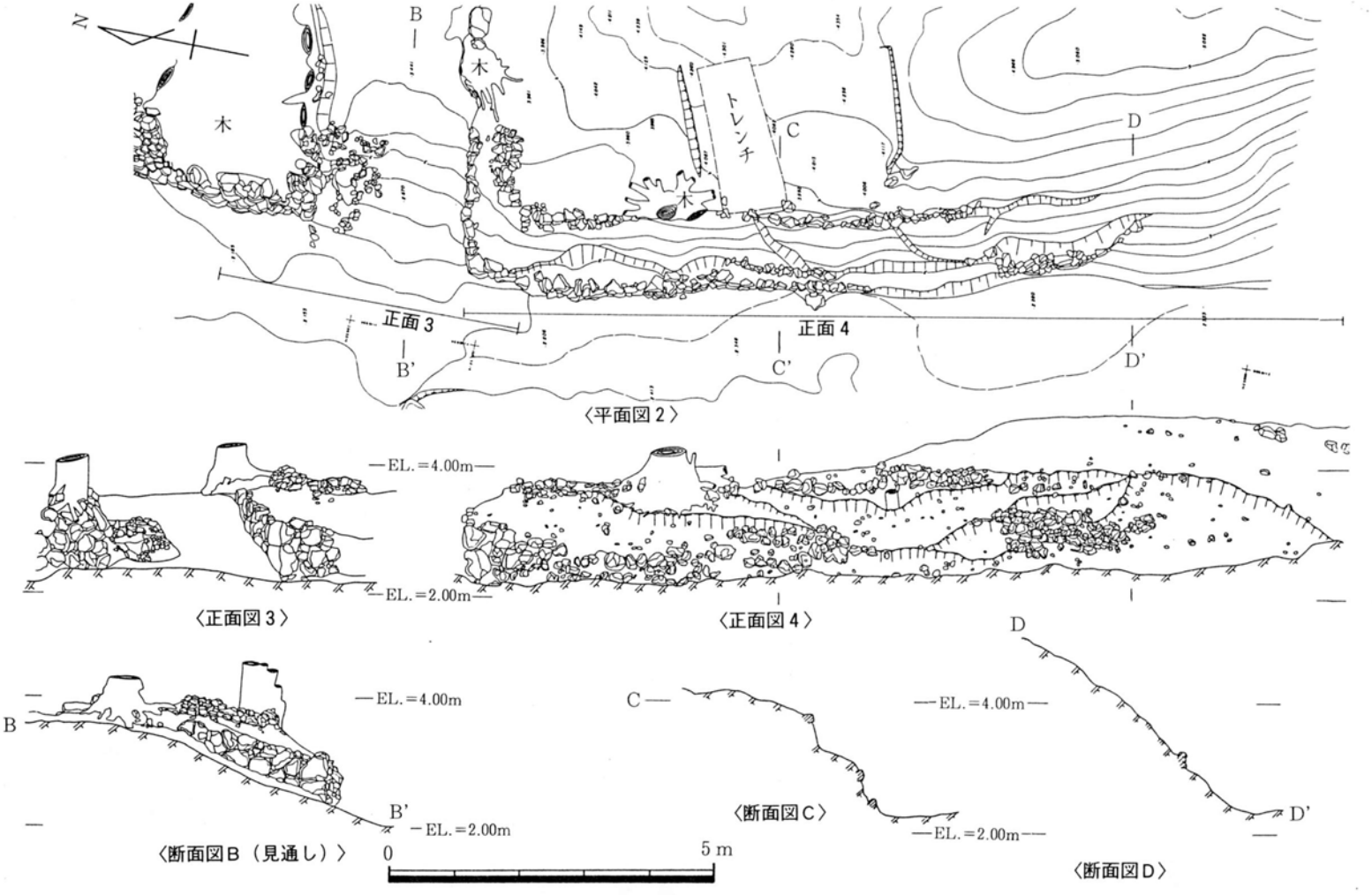


〈平面図 1〉



〈正面図 1〉　〈正面図 2〉　〈断面図 A〉

第35図　墓道石積み


N
B
木
木
木
トレンチ
C
D
正面3
B'
正面4
C'
D'
〈平面図2〉
—EL.=4.00m—
—EL.=2.00m—
〈正面図3〉
〈正面図4〉
B
—EL.=4.00m
B'
—EL.=2.00m
〈断面図B（見通し）〉
C
—EL.=4.00m—
〈断面図C〉
—EL.=2.00m—
D
D'
〈断面図D〉
0
5 m

第36図　墓道石積み

第Ⅴ章　ま　と　め

ここでは第Ⅳ章までに個別報告してきたことについて、全体的に整理してまとめとする。

墓の形態・構造について

今回、調査対象となった古墓は総数15基であった。いずれも横穴式の墓室をもつ墓で、墓の形態分類（註１）からすると掘込墓（11基）、平葺墓（３基）、亀甲墓（１基）の概ね３種類が確認できた。

1:掘込墓（２号-1･2･3･4・４号・６号-1･2・７号・９号・10号・11号）

2:平葺墓（１号・３号・８号）

3:亀甲墓（５号）

それぞれの墓について、主要部となる墓室の形態・構造に注目してみると、平葺墓と亀甲墓の場合は、平面形が四角形を呈し、棚は正面に３段、左右にそれぞれ１段ずつ設けられ、墓室面積は５㎡以上と比較的大規模であった。一方、掘込墓についてみると、７号墓だけは墓室の平面形、棚の造り、規模のいずれにおいても先の平葺墓や亀甲墓と類似しているが、他はほとんどが小規模で、平面形もいびつな形状であった。棚は岩盤を削り出して１段設けたものなどもみられたが、掘込墓についてはほとんどのものが棚は造られていなかった。

墓の造成について

墓　室

墓室の造成方法には概ね２とおりみられた。一つは石灰岩の岩盤に横穴を掘って墓室を造りだす方法である。ほとんどの墓がこの手法によるもので、この場合、岩盤を成形して天井や壁面を仕上げるものが一般的だが、築造年代の新しい10号墓は天井にトタンをはめ込み、壁をブロック積みで仕上げるものであった。

もう一つの方法は墓室内の壁を切石積みで仕上げ、天井は３枚の大きな切石を用いてアーチ形に造りだすものである。この場合、天井をアーチ形に組むのに際して、横穴の状態から施工するのは不可能と考えられることから、墓室造成の手順としてはまず、岩盤をＬ形に掘削した後、墓室の壁となる切石積みを行い、その後に天井のアーチを構築し、屋根を整地したことが考えられた。

墓　庭

第二次調査では墓庭の造成状況をみるため、７号から10号のそれぞれの墓庭において断ち割りを行った。土層観察の結果、墓庭の造成には数種の土砂が使用されていることがわかった。造成土は淡黄色の石灰岩粉砕土や赤土などで、仕上げは茶褐色の混礫土が用いられていた。７号墓については第Ⅳ章で述べたように、茶褐色混礫土の上位に黒褐色の土層が堆積していたが、同層中からは銃弾や薬莢などが出土していることから、戦後に再び整地したことが窺えた。

墓造りの手順はまず、自然の斜面地を岩盤に達するまで掘削して断面Ｌ形の地形を造り出し、そこへ横穴を掘って墓室を設け、最後に墓庭を造成という手順が考えられた。墓庭造成に使用された石灰

岩粉砕土は墓室の掘削時に搬出したものだろう。

遺物について

遺物は、厨子甕や香炉、花瓶など明かに墓に関わるもののほか、碗や皿、急須などの日常品も数多く採取された。しかし、後者の場合、副葬品など墓に関わるものなのか、戦時中の避難民が持ち込んできたものか判別が困難だった。ただ、後述のように西原一帯の古墓はほとんどが戦時中に避難壕として利用されており、『内間字誌』には「･･･食糧を主にその他の道具類も入るだけ運び込んだ」ともあることから、大部分は避難民の生活用具だったのではないかと考えられた。こうした碗や皿などは近代以降の本土産磁器が主体で、ほかに沖縄産施釉陶器や無釉陶器などがあった。

蔵骨器は上江洲 均氏の厨子甕分類（註２）によるボージャー厨子、マンガン掛け厨子、マンガン掛け庇つき、石製家型厨子甕、陶製家型厨子甕のほか、小型円筒形の火葬用骨壺、日用雑器の転用がみられた。蔵骨器の大部分は墓移転により、墓室外に遺棄されていた。蔵骨器全体を眺めてみると最も目だったのはマンガン掛け厨子甕であった。ボージャー厨子と石製家型厨子甕は２号墓と４号墓に限られており、上江洲氏の厨子甕編年や墓の構造などからみて、両墓は調査した他の墓に比べて古い時期に造営されたのではないかと考えられた。

遺物の中では２-2号墓の墓室内から採取したヒレジャコ（シャコガイ科）３点が注目される（写真図版８）。いずれも殻長８～９㎝の大きさで、うち１点は水磨のためか表面がなめらかになっている。３点ともとくに加工はみられない。葬送あるいは造墓等の儀礼に関する資料と考えられるが、詳細は明かでない。また、本墓には墓室内に厨子甕３点が収められていたが、採取した３点のシャコガイがそれぞれ個々の厨子甕に対応するものなのかについても今のところ判断し難い。

これまでにも県内の古墓調査で、こうしたシャコガイの出土例がいくつかあるが、シャコガイの性格等については、今後、民俗学の分野からも研究をすすめていく必要があるだろう。なお、これまでに近世古墓でシャコガイが出土した事例は、北谷町の上・下勢頭古墓群（註３）や宜野座村クジチ墓（註４）などがある。

墓の年代について

墓の築造年代については、後述の10号墓以外はいずれの墓においても明確にすることはできなかった。ただ、８号墓については、厨子甕の銘書からある程度は推察可能かと思われる。８号墓庭および墓道採取の厨子甕には「一世　明治三十二年十一月一日死亡〇三十八年十一月十二日洗骨当間加那上新屋ヨリ分家ス････」とある。これによると分家した一世の洗骨が明治38年（1905年）であることから、８号墓はこの頃（明治末頃）の造営と考えられる。10号墓については聞き取りによって戦後まもなくして構築されたものと判明している。

今回調査した古墓は、移転のためほとんどが空墓となっていたが、２号墓だけは手付かずの状態にあった。２号墓は孤立した石灰岩塊に小規模の掘込墓が４基築かれ、小さな群を成していた。それぞれに入っていた厨子甕のうち、記銘年の記されたものをみると、19世紀中葉～末で、銘書からすると今回調査した中では、この墓群の厨子甕が最も古い年代を示していた。他はほとんどが1900年代の記

銘であった。

以上のことから、調査対象の15基に限ってみると、それぞれの墓の使用年代は、銘書から推察すると、上限は古いものでは近世末から、新しいものでは去る沖縄戦直後から、今回の移転まで、という時間の範囲が考えられた。ただし、2-1・3号墓には無記銘のボージャー厨子がそれぞれ1個確認されており、また、4号墓では石厨子の破片も確認されていることから、上限はさらに遡る可能性が高いと考えられる。

戦争遺跡としての西原古墓群

内間西原古墓群は、古墓であると同時に戦跡という性格も合わせ持っている。

「内間字誌」(内間自治会.昭和56年)によると、内間西原古墓群一帯の墓は、去る沖縄戦時には内間住民を中心に避難壕として利用されていたようである。

今回の調査では、戦時中の遺物や遺構なども多く見つかった。遺物は、墓庭や墓の周囲から薬莢や銃弾、砲弾片とみられる鉄片などが数多く採取され、中には未使用の銃弾が束になったままのものもあった。また、採取した遺物のうち陶磁器類は、碗や皿といった日常品が多数を占めているが、これらのほとんどは避難してきた住民が持ち込んだものと考えられた。遺構についてみると、4号墓では第Ⅳ章で報告したように、墓庭には爆風避けと考えられる石垣が構築され、墓室内には塹壕のような溝が掘られていた。この溝からは軍靴とみられる靴底や薬莢、乾電池のほか、薬瓶、取手付金属製コップなどが出土している(写真図版16)。遺物の内容や構築物からすると住民が避難していたというよりも、日本兵が使用していた可能性が高いと考えられた。

7号墓では墓庭に直径約1.2mの鍋底状の小穴が見つかった。中からは炭片が鉄製鍋(アンダナービ)や空缶、皿などとともに出土しており、一時的にここで調理を行っていたことが考えられた。なお、7号墓には戦時中に墓主が避難していたことが聞き取りによって明かになっている。隣接する8号墓では墓口の上方に、銃弾を受けたとみられる痕跡が数カ所に確認できた。

去る沖縄戦で米軍の本島上陸後、浦添市では前田高地を中心に日米の激しい戦闘があったことは周知のとおりであるが、今回出土した上記の遺物や遺構は、内間一帯もまた、激しい戦禍に見舞われた地域の一つであったことを物語っている。

(註)

1:「浦添市史」第4巻資料編3 浦添の民俗 浦添市教育委員会 1983.3

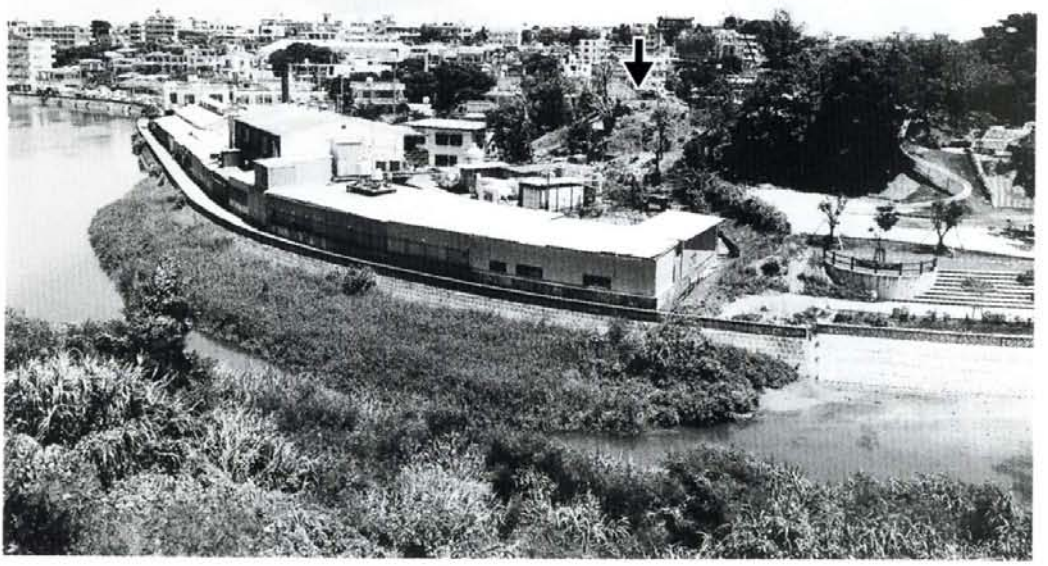
2:「日本民俗文化とその周辺」歴史・民俗 国分直一博士古稀記念論集編纂委員会 昭和55年

3: シンポジウム「南島の墓」-沖縄の葬制・墓制- 沖縄県地域史協議会編 1989.12

4:「宜野座村乃文化財(6)」-クジチ墓・クジチ原遺跡発掘調査報告書-宜野座村教育委員会 1988.3



▲ 北西から（写真中央の丘陵部が一次調査地区）



▲ 南から（写真中央の伐開部が二次調査地区）

図版１　内間西原古墓群遠景



◀ 伐開作業

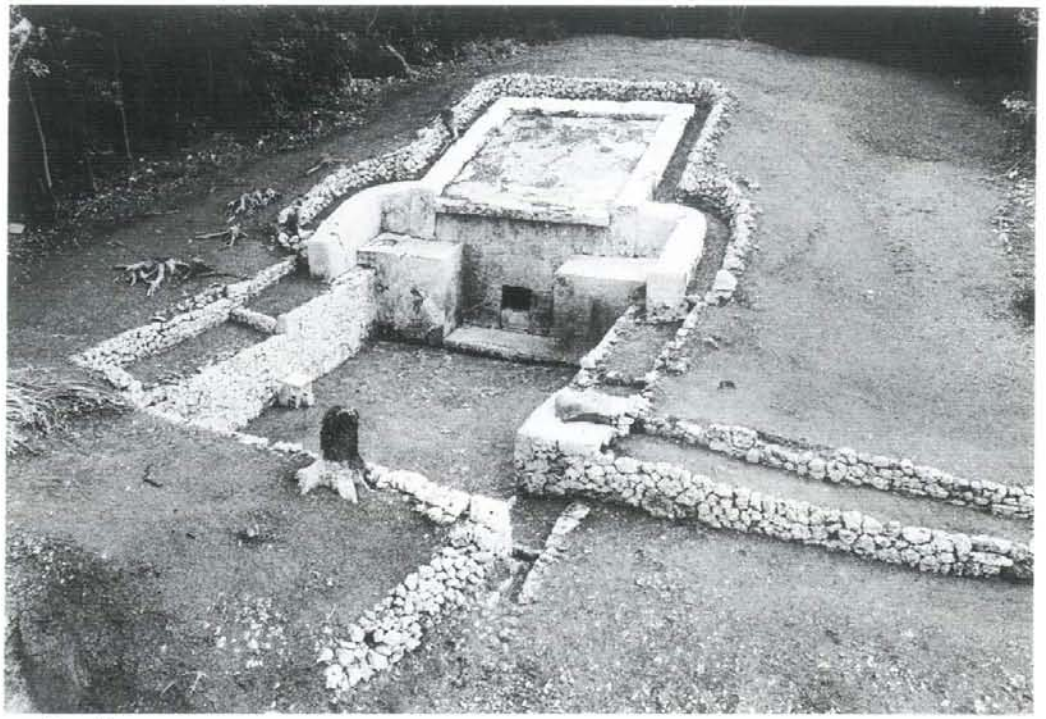


◀ 伐開後の清掃作業



◀ 発掘調査

図版 2　調査風景



▲ 全　景



▲ 正　面

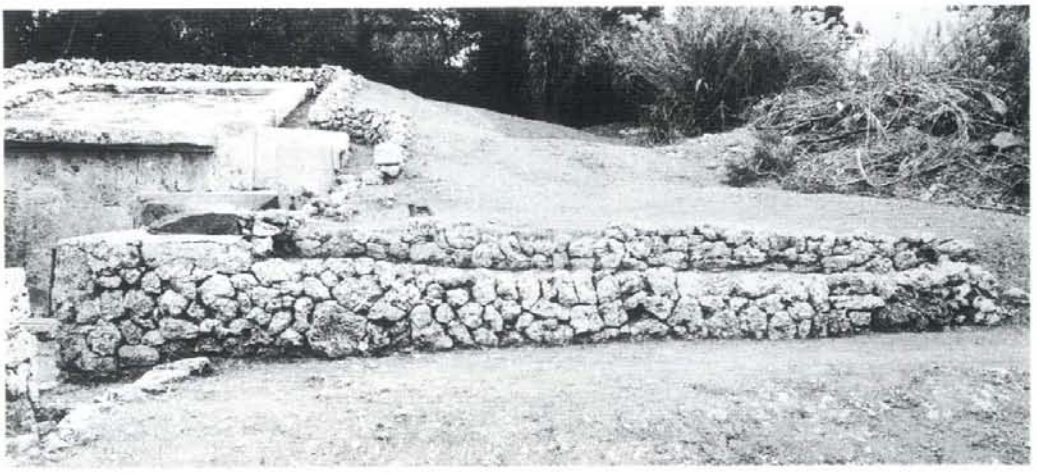
図版３　１号墓



▲ 右側面



▲ 左側面



▲ 墓道石積

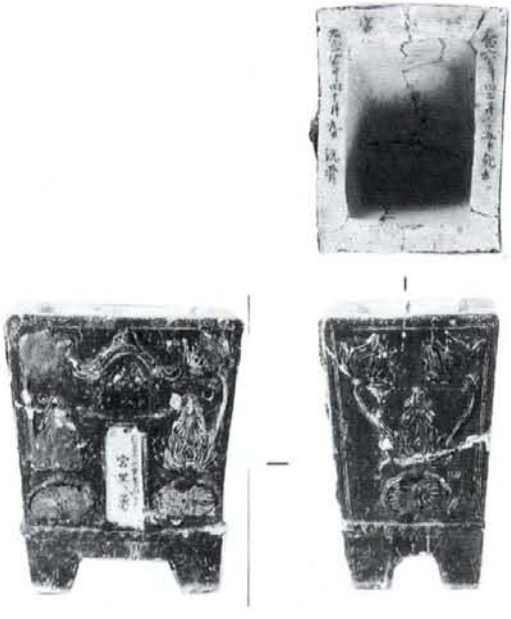
図版 4　1 号墓



▲ 墓　室



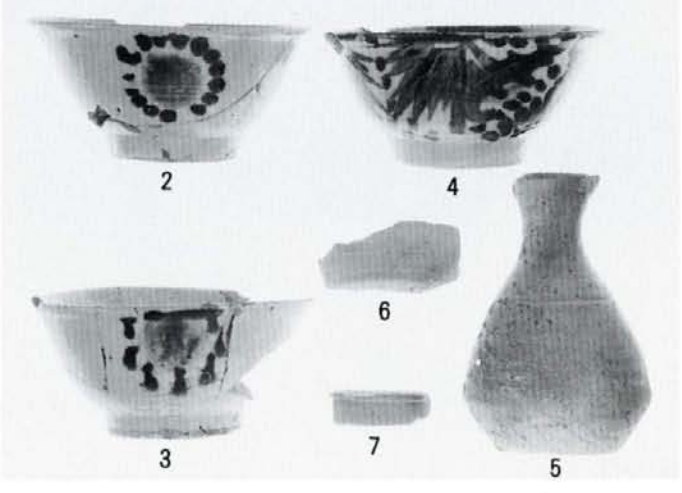
▲ 厨子甕片の散乱状況



1



▲ 銘書（屋門内部）



◀ 出土遺物

図版５　１号墓



▲ 2号墓全景（南西から）

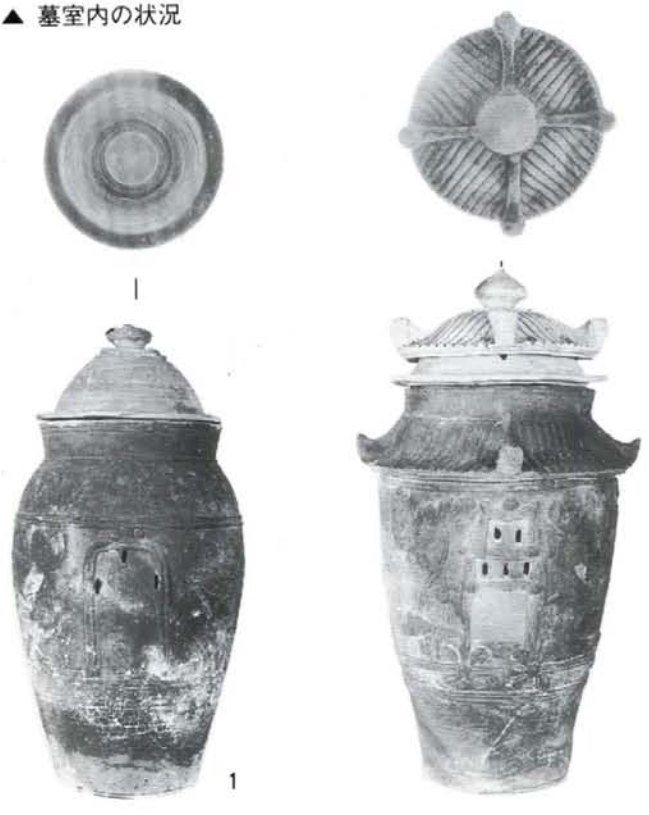


▲ 2－1号墓（右）・2－2号墓（左）

図版6　2号墓



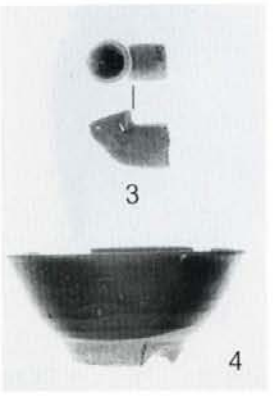
▲ 墓室内の状況



1



No. 2　厨子甕の銘書（蓋内面）



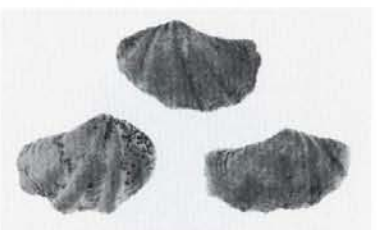
3

4

図版 7　2－1号墓



▲ 墓室内の状況



▲ 墓室内から出土したシャコガイ



1



2

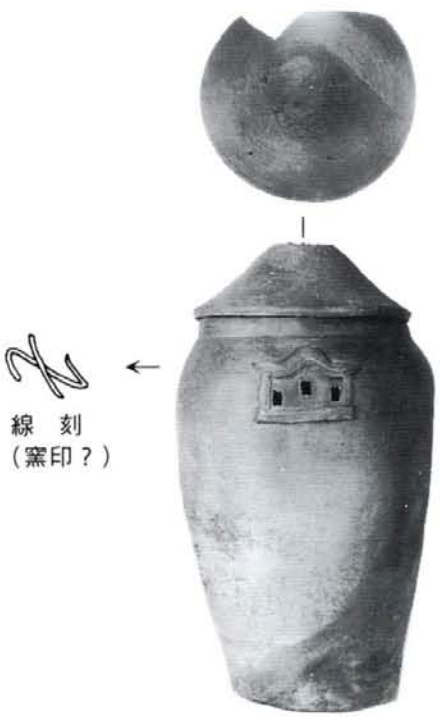


3

図版8　2－2号墓

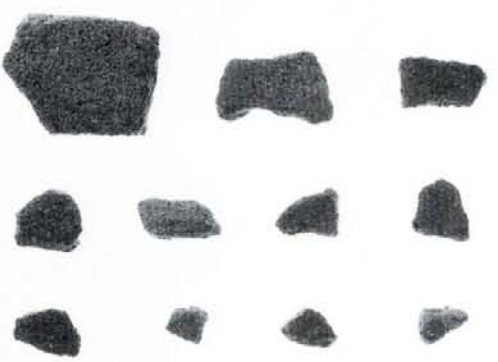


▲ 正　面



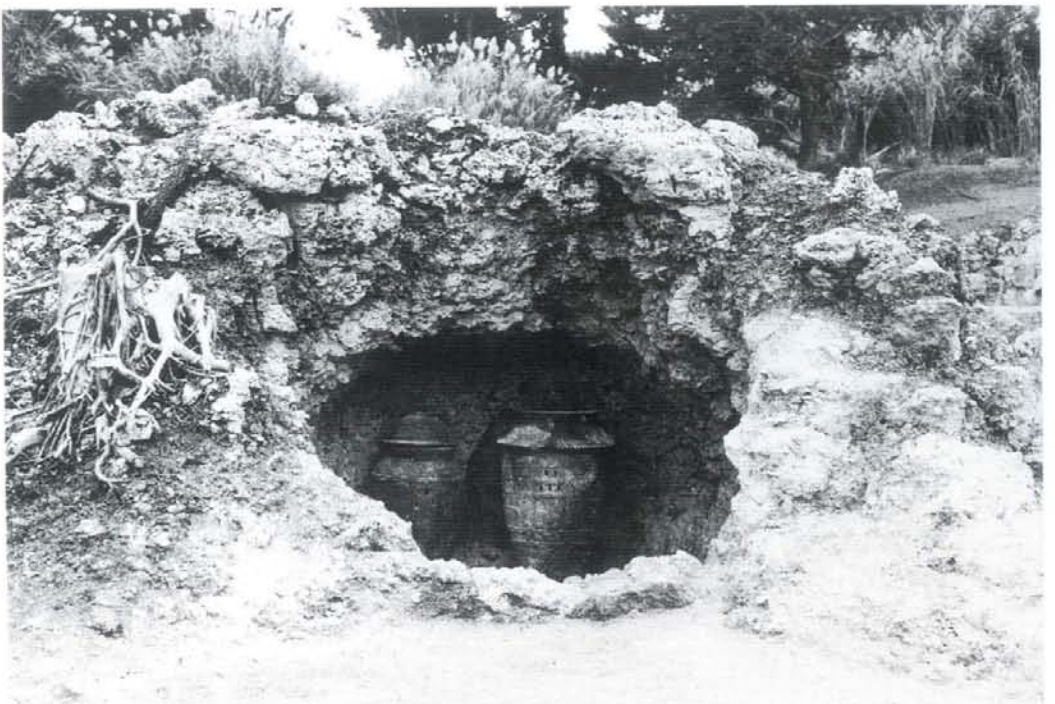
線　刻
（窯印？）

1



2　前庭から出土した宮古式土器片

図版９　２－３号墓



▲ 正　面



▲ 銘書（蓋内面）



▲ 銘書（蓋内面）



3



▲ 銘書（蓋内面）







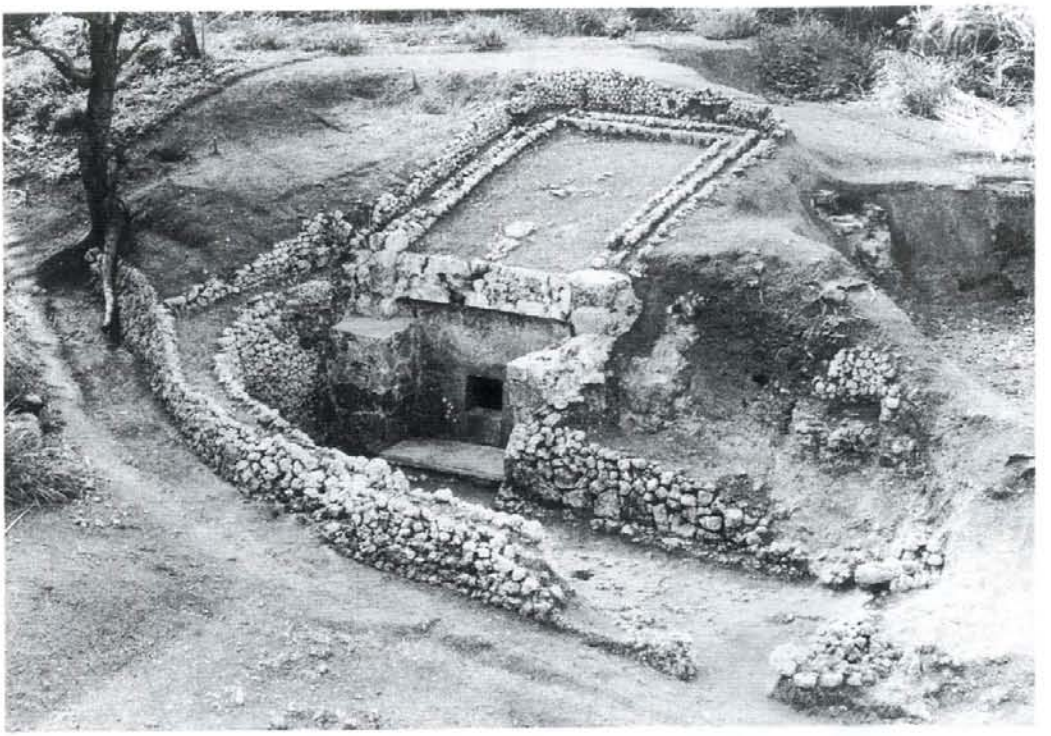
1



2



図版10　2－4号墓



▲ 全　景



▲ 正　面

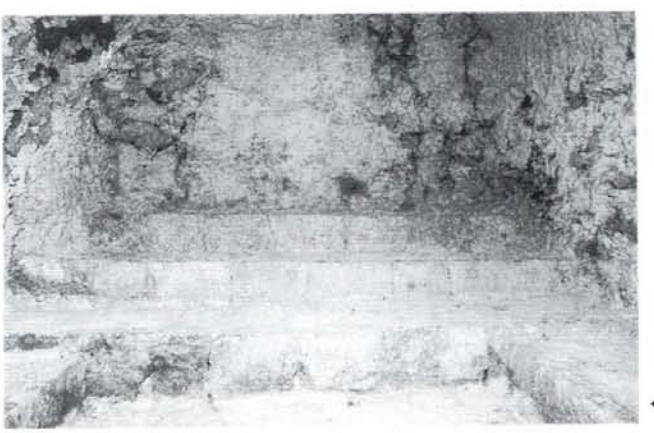
図版11　3号墓



▲ 右側面



▲ 左側面



◀ 墓　室



▲ 出土遺物

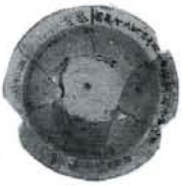
図版12　3号墓



1



2



▲ 銘書（蓋内面）



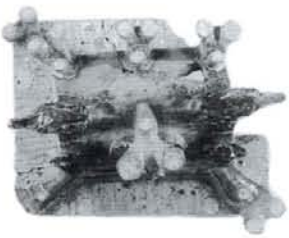
3



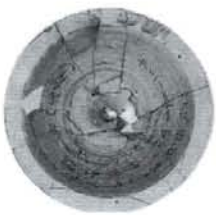
▲ 銘書（蓋内面）



▲ 銘書（蓋下面）







▲ 銘書（蓋内面）



4





5





▲ 銘書（蓋内面）

6

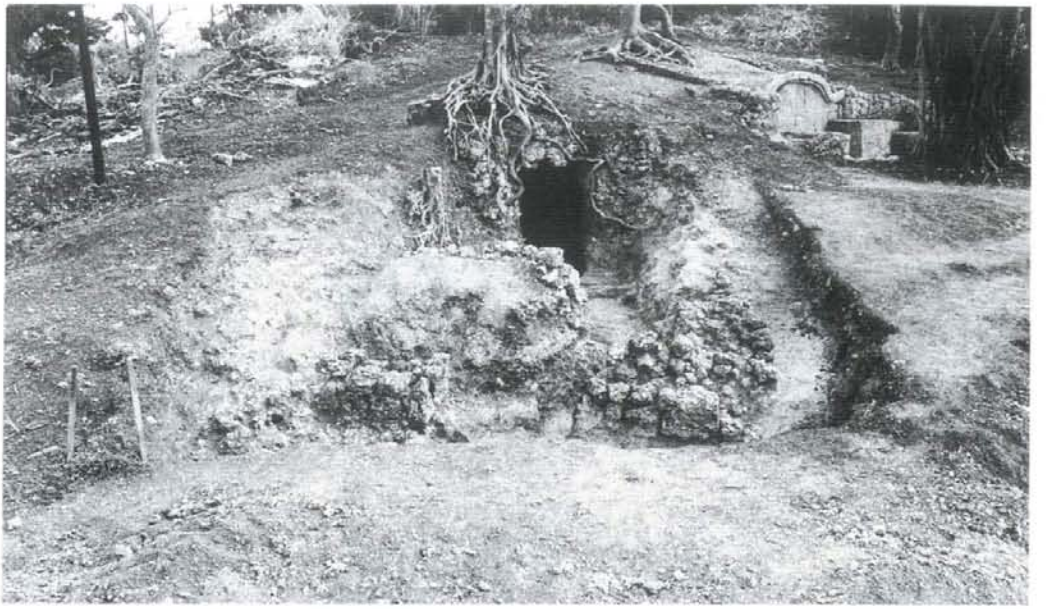




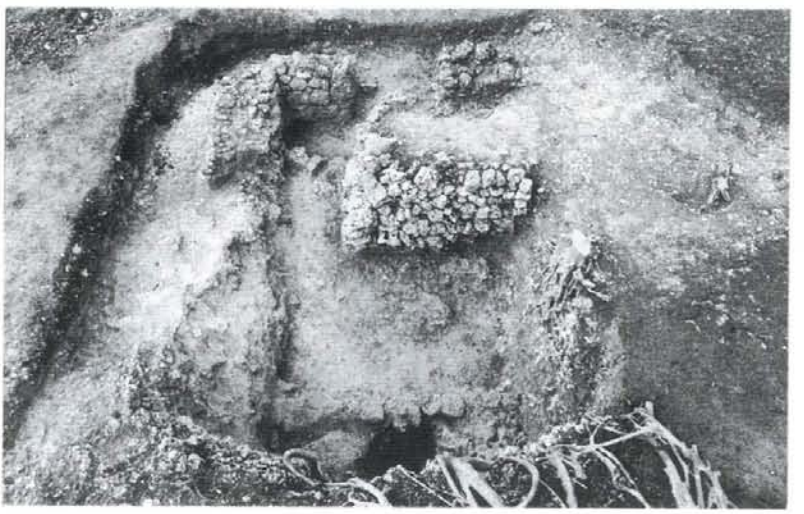
▲ 銘書（蓋内面）

7

図版13　3号墓



▲ 正　面



◀ 平面（屋根上から）

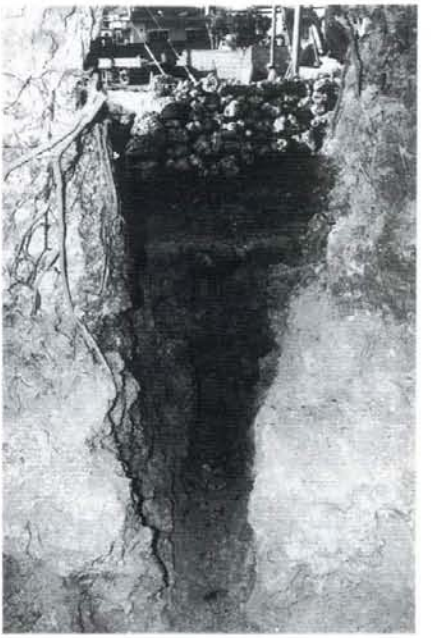


◀ 右側面

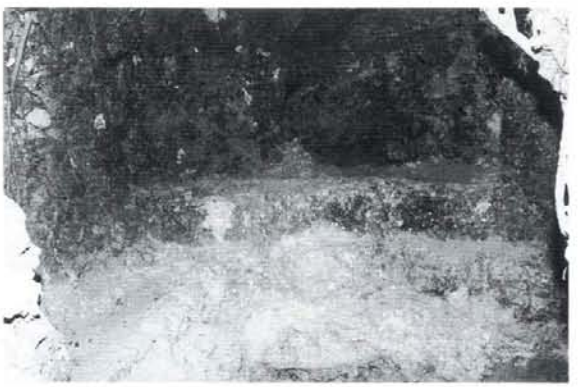
図版14　4号墓



▲ 正面（墓口）



▲ 墓室内からみた墓口



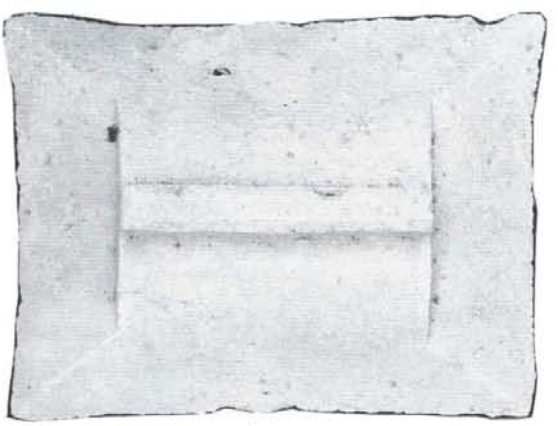
▲ 墓　室

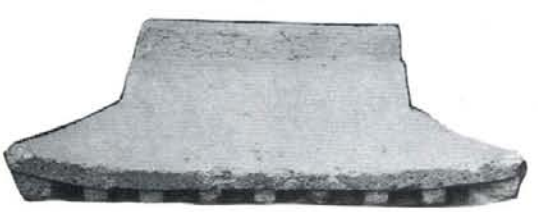


1

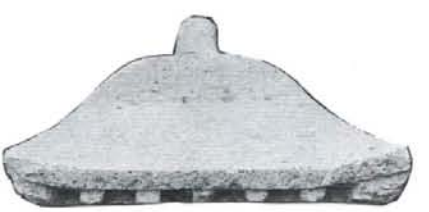


2





3



図版15　4号墓



1



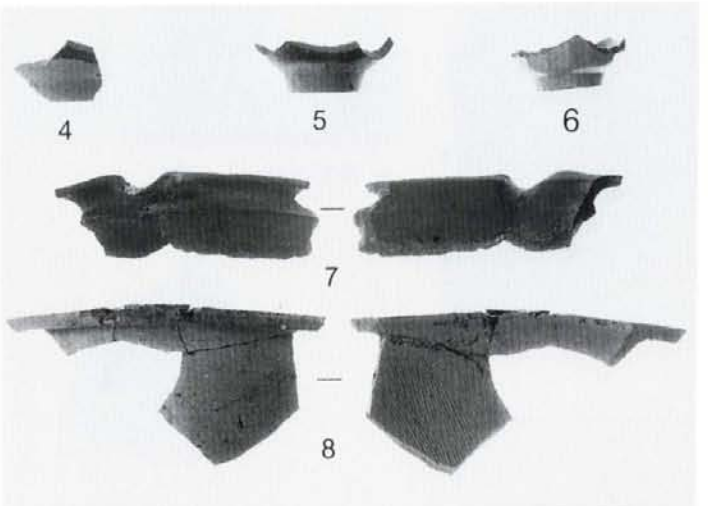
2



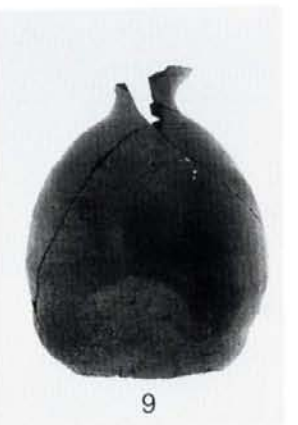
3



▲ No. 3 の銘書（身内面）

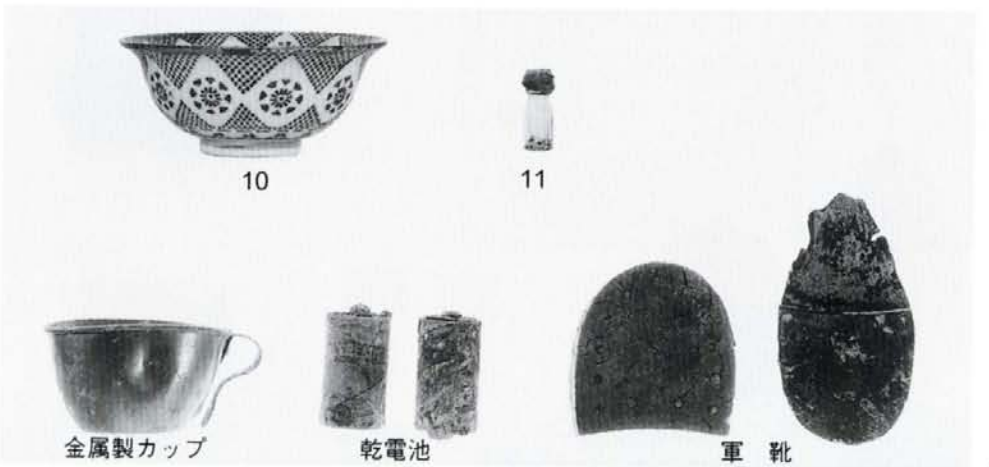


4　5　6　7　8



9

▲ 墓庭から出土



10　11

金属製カップ　乾電池　軍　靴

▲ 墓室の溝状遺構から出土

図版16　4号墓



▲ 全　景



▲ 正　面

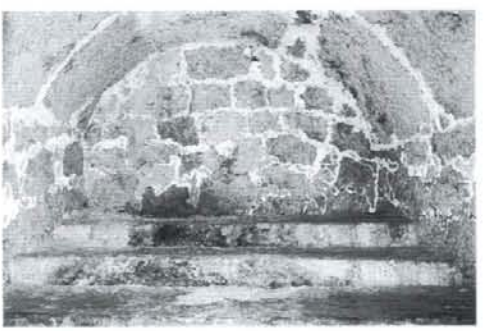
図版17　5号墓



▲ 右側面



▲ 左側面



▲ 墓　室



▲ 汁ヒラシに設けられた長方形の穴



◀ 出土遺物

図版18　5号墓



▲ 正　面（向かって右が６－１号墓、左が６－２号墓）



◀ 墓　庭（南東から撮影）



▲ ６－１号墓（墓室）



▲ ６－２号墓（墓室）

図版19　６号墓



1



▲ 銘書（蓋内面）



2



3



4



5



6





7



▲ 銘書（屋門内部）



▲ 銘書（蓋内面）



8



9



10



11



12



13



14



15



16

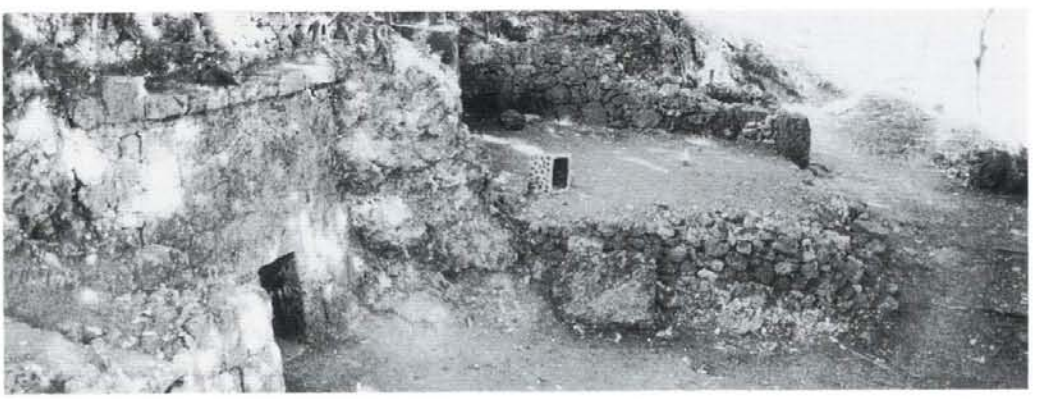
図版20　6号墓



▲ 正　面



▲ 右側面



▲ 左側面

図版21　7号墓



◀ 墓　室

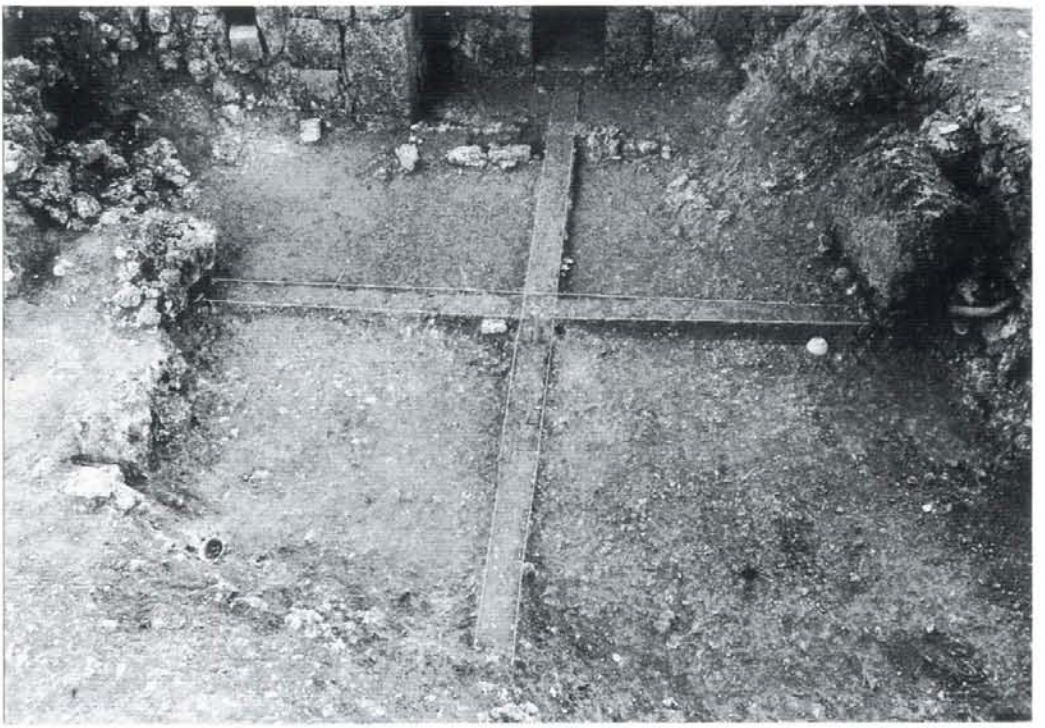


◀ 仮墓 1



◀ 仮墓 2

図版22　7 号墓

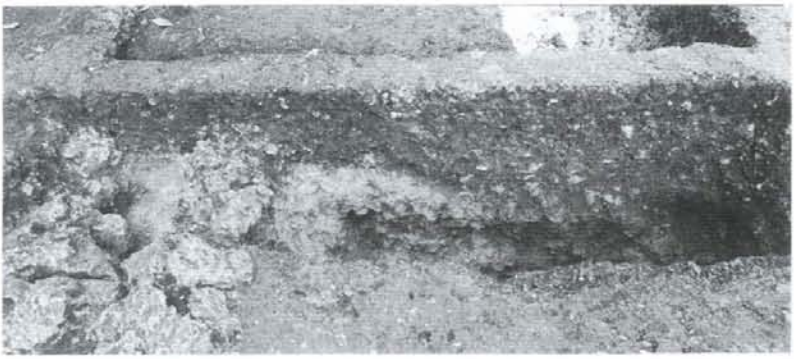


▲ 墓　庭（去る沖縄戦時までの墓庭面）

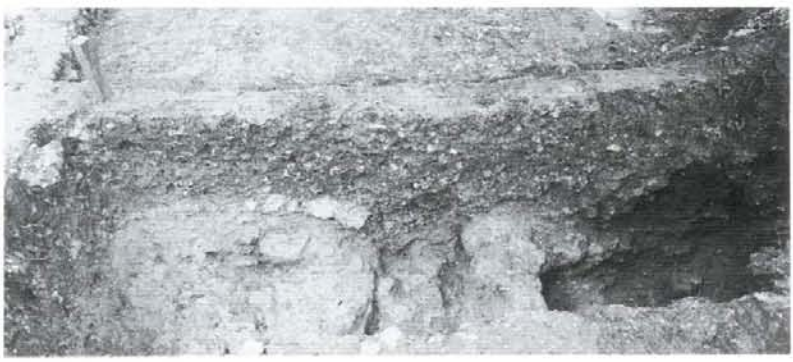


▲ 墓庭で見つかった爆弾坑とみられる小穴

図版23　7号墓



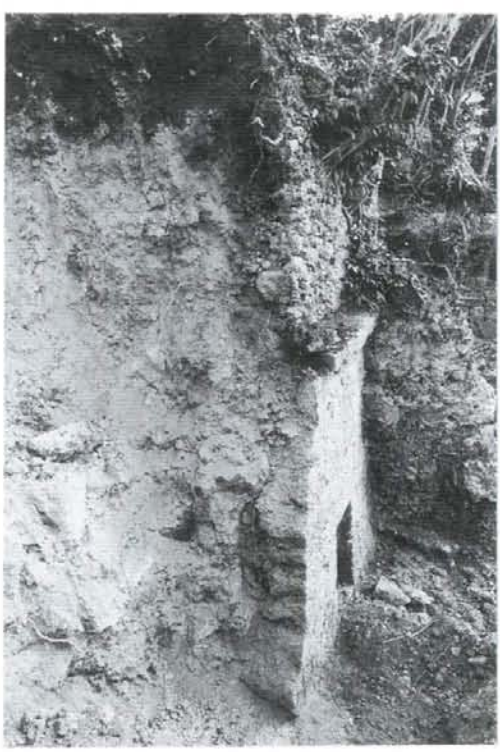
◀ 墓庭縦断面土層
（写真の左が墓口側）



◀ 墓庭縦断面土層
（写真の右が墓庭入口側



▲ 墓の断ち割り状況（正面）



▲ 正面石積みの断面

図版24　7号墓



1



2



3



4



5



6



7



8

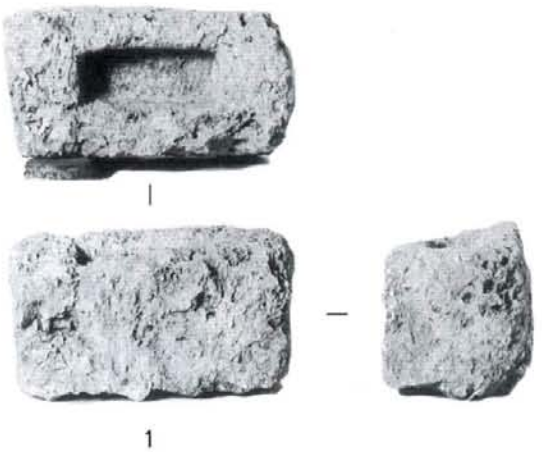


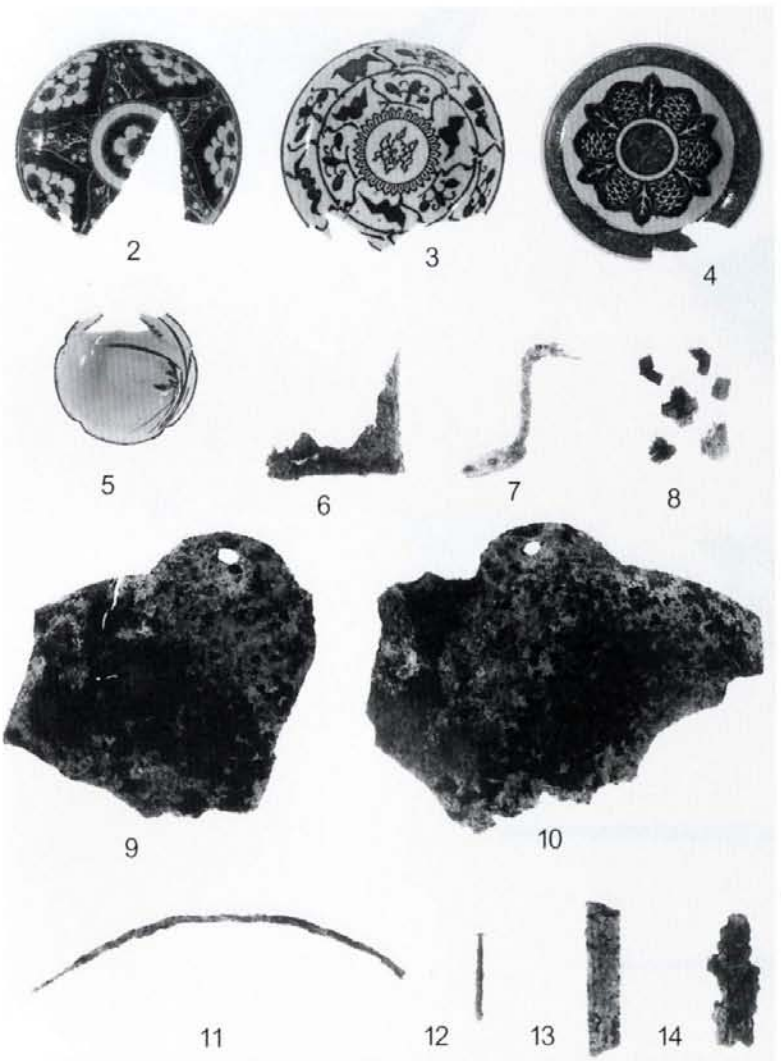
9



10

図版25　7号墓





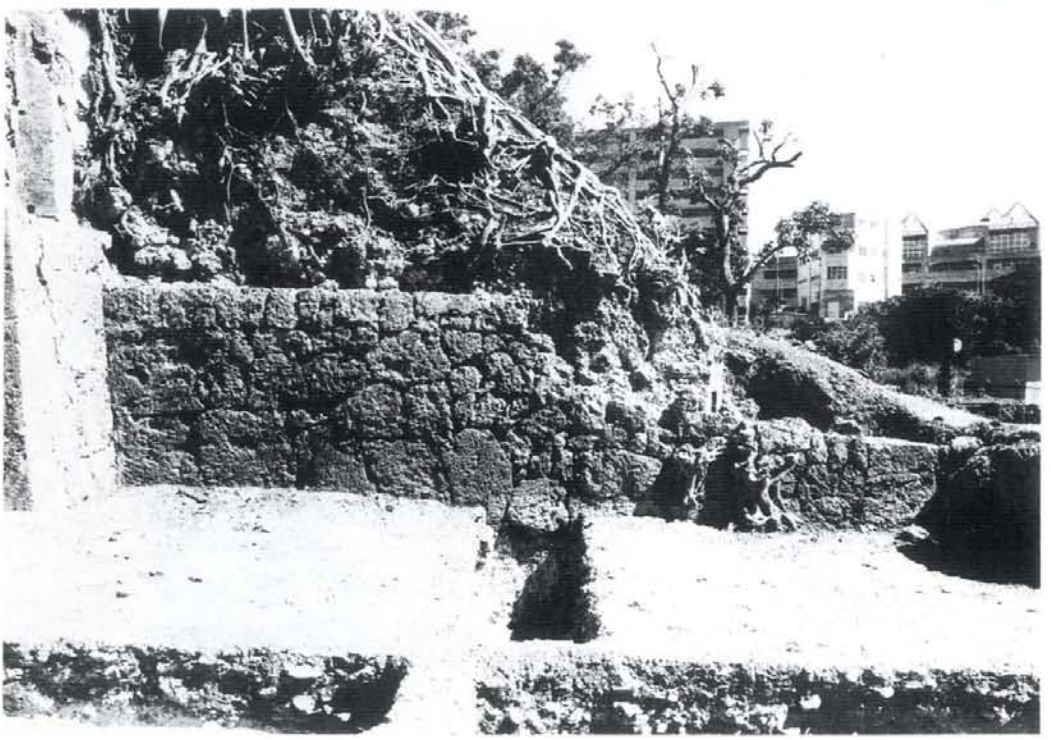
2～5　本土産磁器
6　空　缶
7　鍋の把手
8　炭
9・10　鉄鍋片
11　鍋の吊手（？）
12　釘
13・14　金属片

▲ 爆弾坑とみられる小穴からの出土遺物

図版26　7号墓

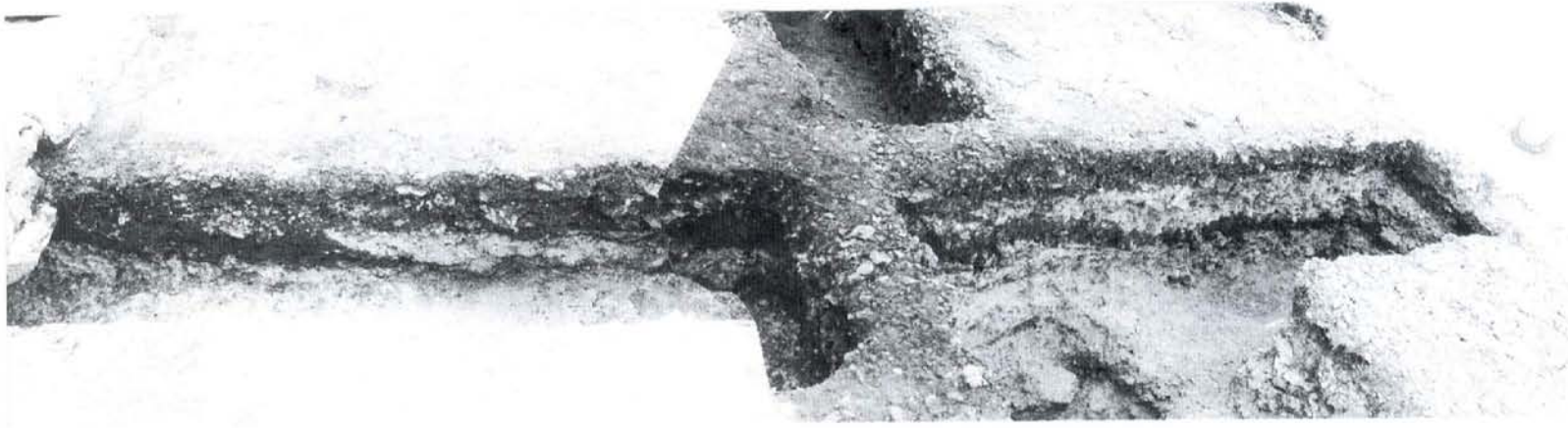


▲ 正　面



▲ 墓庭左（南）石積み

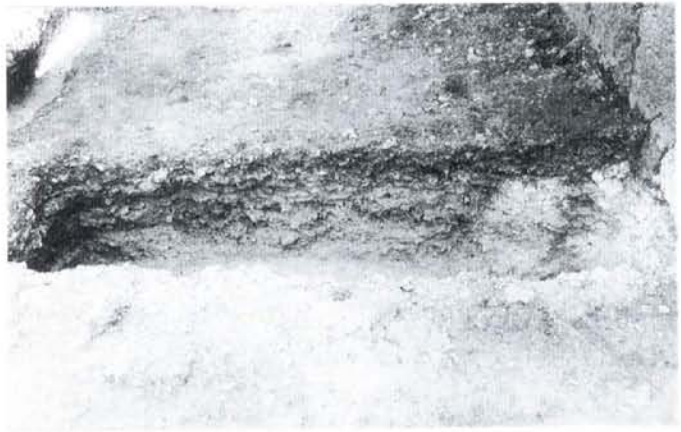
図版27　8号墓



▲ 墓庭縦断面土層（写真の左端はサンミデー）

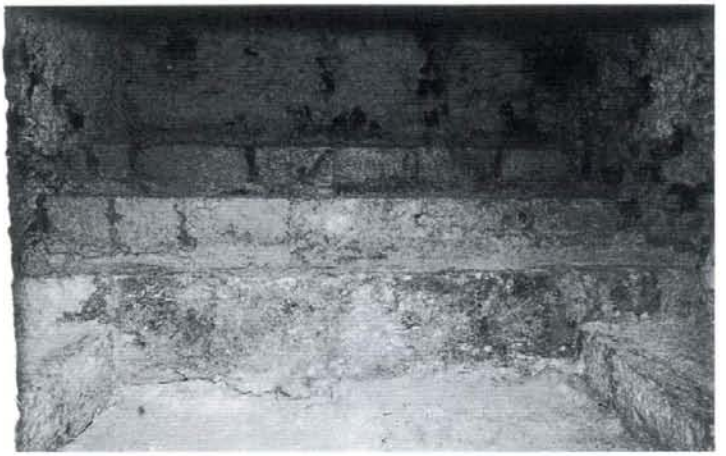


▲ 墓庭縦断面土層（写真の左が７号墓庭側）



▲ 墓庭縦断面土層（写真の右端は墓庭左石積み）

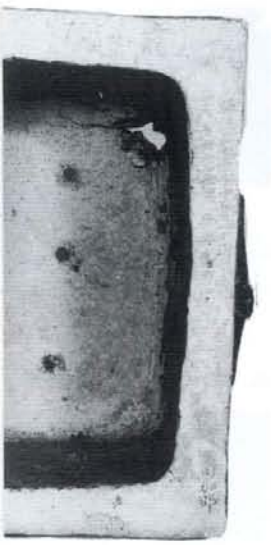
図版28　８号墓



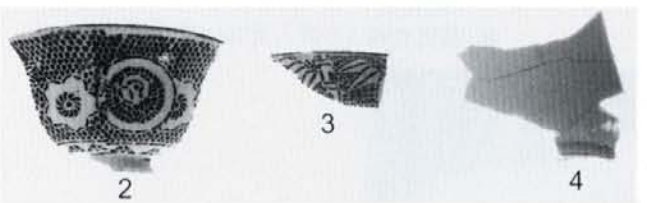
◀ 墓　室



◀ 墓室壁面の
加工痕

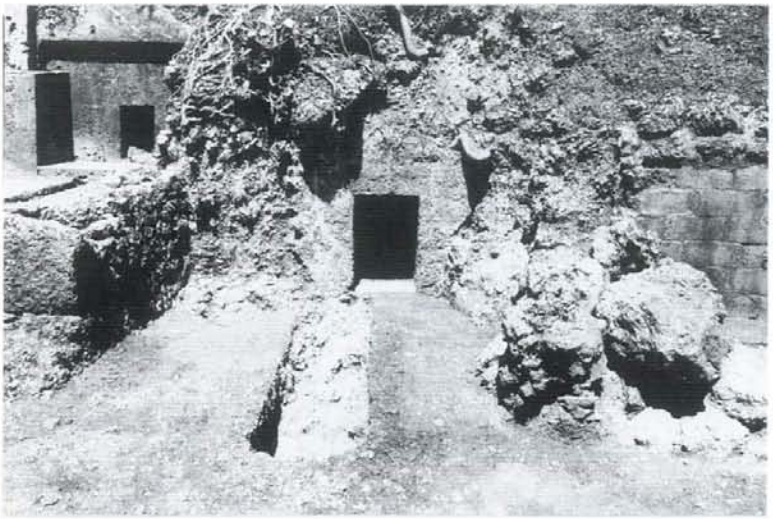


▲ 銘書（口縁上面）
↑





図版29　8号墓



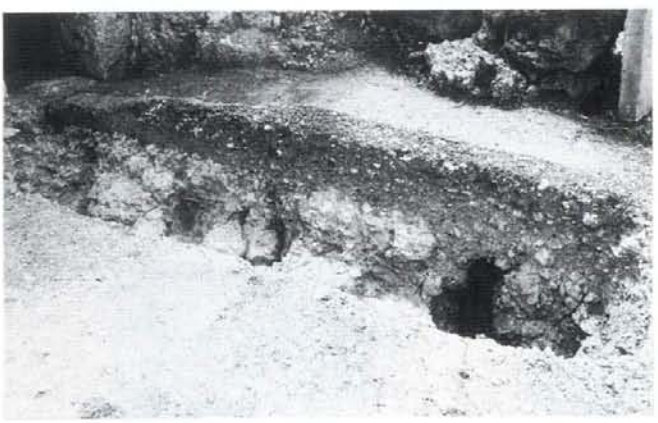
◀ 正　面



▲ 墓庭石（北）石積み



▲ 墓室右側（写真の左端は墓口）



◀ 墓庭縦断面土層
（写真の左端は墓口）



◀ 出土遺物

図版30　9号墓



▲ 正　面



◀ 墓　室



▲ 墓庭縦断面土層（写真の左端は墓口）



▲ 墓庭縦断面土層（左写真のつなぎ）

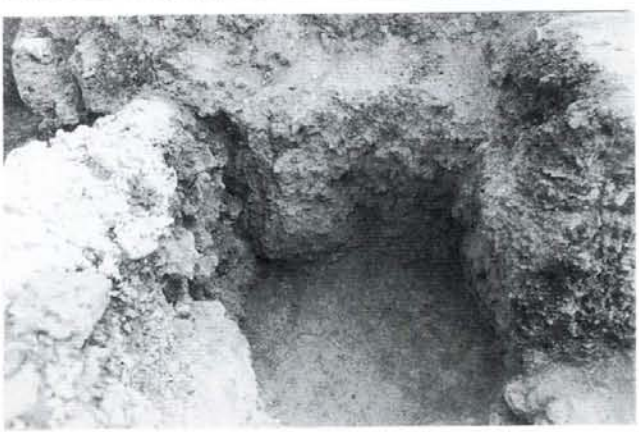
図版31　10号墓



▲ 8号墓庭で見つかった11号墓（墓室内には拳大～人頭大の石灰岩が詰められていた）



◀ 発掘後（墓室内からみた墓口）



◀ 墓　室（写真の左側は７号墓庭）

図版32　11号墓

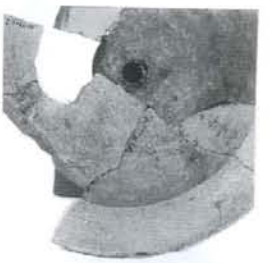




▲ 銘書（蓋内面）

1





▲ 銘書（蓋内面）

2



3



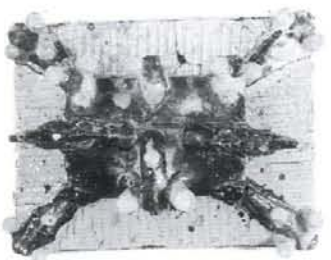
4

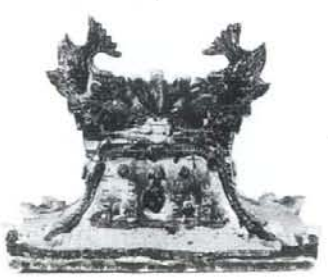


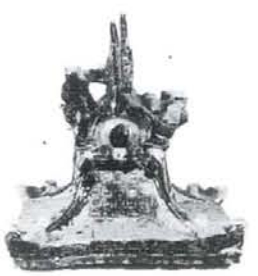
6



▲ 銘書（蓋内面）





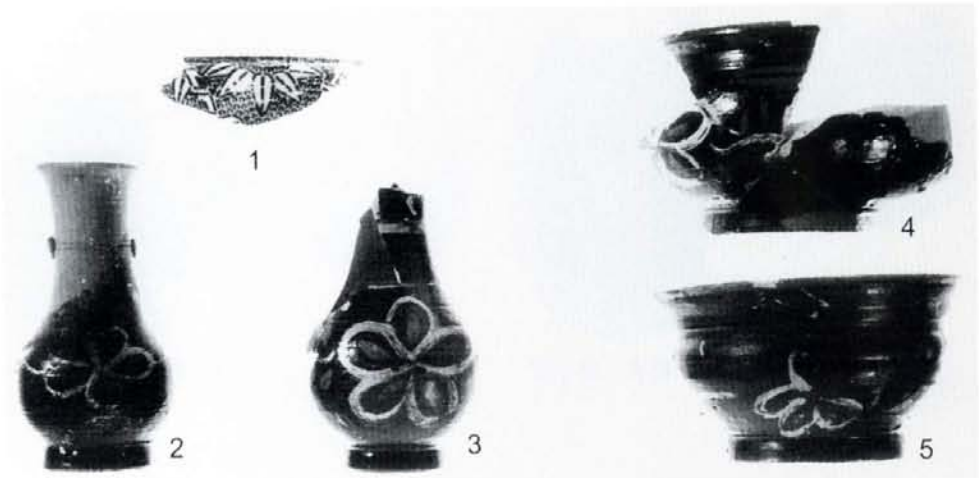


5

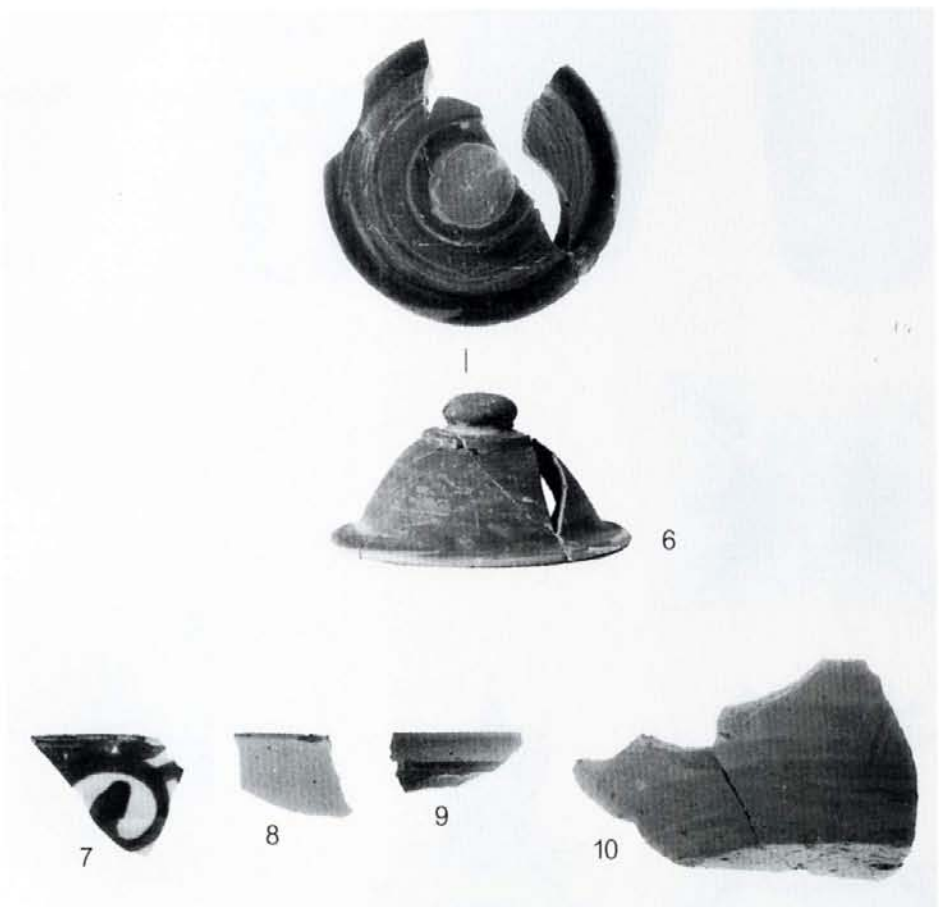


▲ 銘書（蓋下面）

図版33　墓道表採資料（蔵骨器）



▲ 墓道採集遺物



▲ 墓道進入部採集遺物

図版34



▲ 北側から撮影



▲ 墓道進入部から北側の石積み（写真右端の斜面が墓道進入部）

図版35　墓道石積み



▲ 墓道進入部から南側の石積み（南側から撮影）





▲ 厨子甕蓋の出土状況（墓道進入部）

◀ 墓道進入部（写真の上端は７号墓）

図版36　墓道石積み

浦添市文化財調査報告書第22集

内間西原（イリバル）古墓群

－都市計画道路建設工事に伴う緊急発掘調査－

発行日　平成６年（1994年）３月30日
発行所　沖縄県浦添市教育委員会
浦添市宮城２丁目４番１号
ＴＥＬ：０９８-８７７-４５５６
印　刷　有限会社 潮印刷